Z32-B88

金の星

国立国会
8. 3. 26
図書館

第六卷 十一月号 第十一號

大正十三年十一月一日發行 大正十三年十月九日印刷納本

大正十一年六月十三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

勉強がラク〳〵出來て

成績がメキ〳〵よくなる

東京高等師範學校附屬小學校主事 佐々木秀一 指導

小學自習書

後編が出來ました

修身・讀方・綴方・算術・地理・歴史・理科などの豫習や復習には是非なくてはならぬよい本です。

教科書にない面白い話や全國から集めた童謡なども澤山載つてゐます。

尋常三 尋常四 一冊五錢

尋常五 高等一 高等二 五十錢

全國國定教科書販賣店にあり

發賣元 東京神田 東京堂書店 振替東京二七〇

滋強飲料

スピルカ

慈母に捧ぐる一杯……長壽

愛妻に薦むる一杯……平和

愛兒に與ふる一杯……健康

酒店、食料品店、藥店にあり

▶アイデアの兒童圖書館叢書◀

西遊記

吉田助治著

▲最新刊忽六版▼

四六判 401頁
定價二圓二十錢
送料十二錢

支那の名篇を子供の爲めにやさしく譯したものです。佛の悟道に入るに苦心した順禮紀行です。只單に面白いばかりでなく、兒童の爲めになる文學價値ある美しい本です。

童謠 鈴草

河野伊三郎著

▲第六版▼

四六判 190頁
定價一圓六十錢
送料八錢

本書は童謠の味ひ方を知らせる童謠集です。お母さんが子供の爲に創作せられた百八十の童謠を選んで、それに一章宛の解說をつけました。

マツチの兵隊

水谷勝著

▲第六版▼

四六判 330頁
定價一圓八十錢
送料八錢

居眠り王樣
萩の森の子マツチ馬の長者兵隊
紙鉄砲と竹笛の細い村
振替東京一二四五
電話牛込三六五六

發兌 東京市牛込區山伏町一四一 イデアの書院

▶アイデアの兒童圖書館叢書◀

子供美術史 埃及より現代まで

文學士 相良德三著

▲最新刊▼

四六判 270頁
定價二圓
送料八錢

序、藝術の話
ギリシヤ、ローマ時代
エジプトと其時代
ヨーロッパ。
キリスト教の時代
文藝復興とイギリス
オランダ、スペイン、フランスと十九世紀

日本風俗史 祖先の生活

成城訓導 上里朝秀著

▲第六版▼

四六判 280頁
定價二圓
送料八錢

吾々の祖先の衣食住を中心として、太古人の穴住ひや、勝利の宣命や、鏃祭りの由來を面白く、やさしく說いたものです。歷史の興味はこの文化史に於て見出し得られます。

西洋古代史 ギリシヤの神話

中島孤島著

▲最新刊▼

四六判 411頁
定價二圓五十錢
送料八錢

ギリシヤ民族と神々
世界の天火
パンドラの匣
大洪水
月と日
の誕生
星の世界
月桂樹の海
こだま
宮の王國
メンサの首の王
海の怪物
龍の齒

發兌 東京市牛込區山伏町一四一 イデアの書院
振替東京一二四五
電話牛込三六五六

丸善インキ

萬年筆用

アテナインキ

このこと書店にも文房具店にもあります

小島政二郎先生譯（キップリング原著）

世界童話文學叢書第二編

狼少年

附録 白あざらし

寺内萬治郎畫伯裝幀

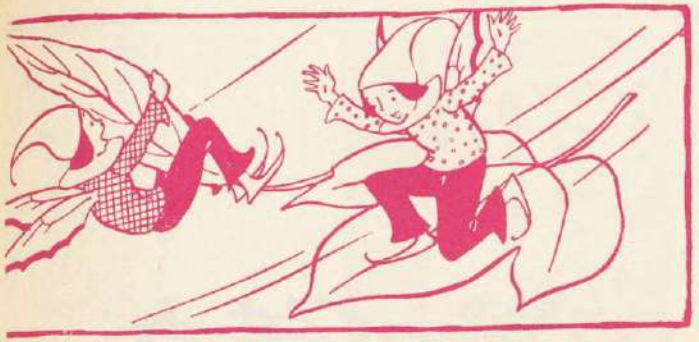
四六判箱入總クロース
本文三百數十頁挿畫九枚

定價金貳圓廿錢
送料金十五錢

（最新刊）

この物語は印度の森林の中で、狼に育てられた少年の物語です。印度の大自然の中で、いろ〳〵の猛獸と共に生活する不思議な運命を持つたこの少年の物語は、如何に大きな驚異を以て讀者に迫るでせう。世界的文豪キップリングの名作を、小島先生の麗筆によつて譯述された一大名篇であります。尚附録の「白あざらし」も同じ作者によつて書れたもので、頗る面白い、そして珍しい物語りです。裝幀と口繪共に寺内萬治郎畫伯の苦心になつた美本です。皆さんの永い間の期待の裡に今回漸く出版されました。御一覽を乞ふ。

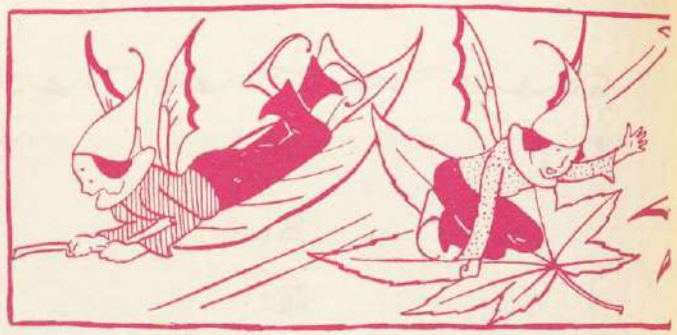
東京市外目黒三五一
金の星社
振替東京一五九五
電話小石川五五三八
番六九八七番



目次

（第六卷・第十一號）

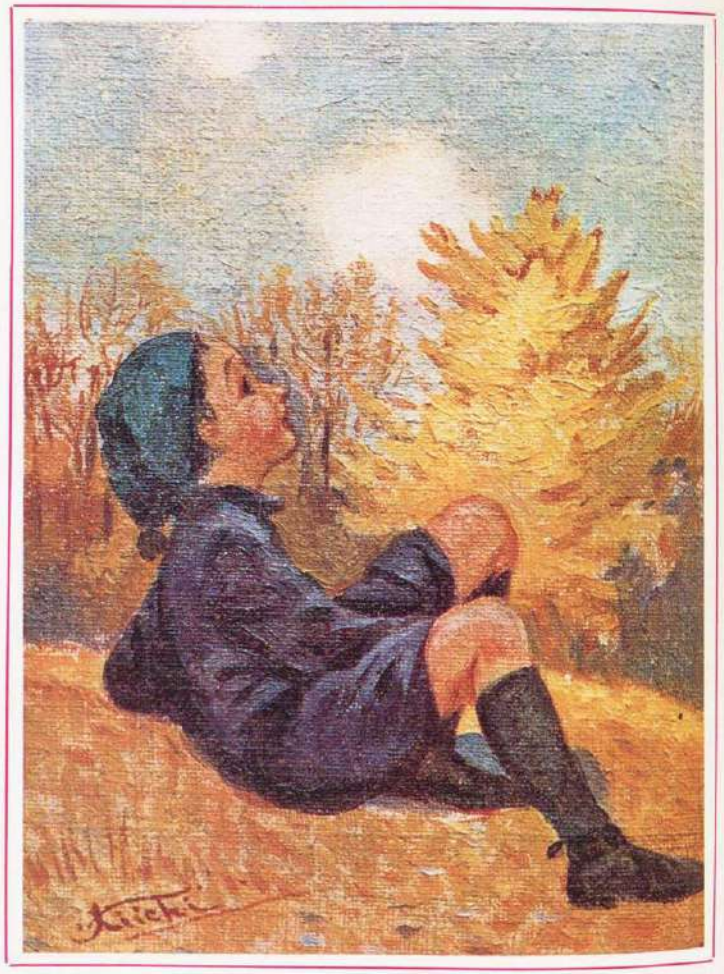
人形使ひ（表紙・原色版）……寺内萬治郎
鳥渡る頃（口繪・三色版）……岡本歸一
待ちわびて（口繪・一色版）……寺内萬治郎
芒の穂（童謡）……（四）……野口雨情
同作曲……（二）……本居長世
猿廻し與次郎（童話）……（六）……三島霜川
家なき娘（長篇）……（一六）……三井信衛
ホシロー・ヒルム（柿盗人の卷）……（一六）……木下孝一郎 畑畫
すめ（童謡小供篇）……（三〇）……野口雨情選
百足の選手（童話）……（三三）……江口渙
當麻寺物語（歴史童話）……（四四）……豐島百合子
栗の皮むき（童謡）……（四三）……若山牧水
虎『助けて呉れエ』（童話）……（四四）……小島政二郎



狸峠（推薦童話）……（六四）……靖井德夫
ラム王の一生（長篇）……（七〇）……武井武雄
お月さま（推薦童話）……（七七）……佐藤よしみ
隅田川（幼年詩）……（七八）……若山牧水選
万八物語（滑稽童話）……（八〇）……西川喜平
葦になつた坊さん（支那童話）……（八八）……片平喜一郎
薇切り（童謡大人篇）……（九六）……野口雨情選
十五少年漂流物語（長篇）……（九九）……霜田史光
噴水成佛（童話）……（一〇六）……原田謙次
海坊主小坊主（童話）……（一一四）……野口雨情
野口さん（自由畫）……（一二六）……山本鼎選
鳥賣り（綴方）……（一二八）……齋藤佐次郎選

〔附錄〕

長篇童話 山の少年……（一二六）……沖野岩三郎
挿畫……寺内萬治郎 蕗谷虹兒 岡本歸一 武井武雄 水島爾保布



鳥渡る頃（金の星童謡）

岡本歸一畫

童謡集 絲ぐるま

年少の天才兒と賞讃される著者の第一童謡集

西條八十氏序
渡邊增三氏著
中山晋平氏曲入
松島彝子氏曲入
川上四郎氏挿畫

○四六版總絹布上製箱入
○定價金一圓三十錢
○送料書留金十三錢

▽著者の童謡には著者自身が今住んで居る純一な思想の世界、優しい夢みがちな感情の世界が其ままに美しく詠み出でられてゐる。此の書を讀まるゝ誰もが感ぜらるであらう如く、童謡に於ける君の表現技術は已に老熟と云つてよい程巧妙で有る、と激賞されてゐる。童謡を作る人、教へる人の必讀書也。

童謡は斯の如き表現を得て始めて滿足なる童謡と謂ふべきで有ると知るべし

高評新刊
噴重人
々版の
た書滿
るを足
交手を
蘭偲
社ぶ
せ
のら

加藤長江氏新著 **音樂常識辭典** 音樂好愛家の爲に知らねば恥の普通重要語歌劇等全部收錄 金一圓三十錢送料書留十三錢

蕗谷虹兒氏新著 第三畫譜 **銀砂の汀** 美しき畫と美しき詩と美しき裝幀と目醒むるばかり美しき本 金一圓三十錢送料金十三錢

吉屋信子女史著 第一、第二、第三、第四 **花物語** 若き女性間に今や知らざる者なき無二の愛讀書と益々高評各冊金一圓卅錢送料留十三錢

西條八十氏新著 **抒情小曲選集** 詩小曲を作る人は是非一見されむ事を望む眞に傑れた小曲二百金一圓卅錢送料書留十三錢

テニスン原著 幡谷正雄氏譯 **イノツクアーデン** 長篇哀詩として眞に萬人必讀の要ある世界の名著愈々出づ 金一圓三十錢送料書留十三錢

交蘭社 東京振替 神田區東京 神市座口 南四 神保町二〇 十七 六九

世界少年少女名著大系第八編

ギリシヤ神話 オデッセ物語

ギリシヤの詩聖ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りとして「イリヤッド物語」と共に有名な物語りです。トロイの戰爭に遙々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

四六判箱入美本
本文百八十頁
定價金九十錢
送料金十五錢

世界少年少女名著大系第九編

シエークスピヤ物語

世界一の劇作者として有名なシエークスピヤの芝居の中で、少年少女の讀物として面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。この本の原書はラムの『シエークスピヤ物語』よりも遙かに優れてゐるといはれてゐます。『あらし物語』『御意のまゝ』『ヱニスの商人』『がみ〳〵女騙し』『眞夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

四六判箱入美本
本文百八十頁
定價金九十錢
送料金十五錢

東京市外 田端三五一
金の星社
振替東京五九五三八番
電話小石川五九五五六七番

世界少年少女名著大系第六編・金の星社編

ロビン・フッド物語

ロビン・フッドは英國に傳へられてゐる有名な物語りであつて、近くは我國へも活動寫眞となつて紹介され、映畫界の人氣者ドーグラス・フエヤバンクスによつて演ぜられ、世界的の評判になつてゐました。この金の星社の編になる「ロビン・フッド物語」は、原作を忠實に紹介したものだけに、得難いものです。シヤーウッドの森のロビン・フッドの生立ちから、最後に毒殺されるまでの、變轉極りない物語りは、如何に讀者を喜ばす事でせうか。

四六判箱入美本
定價金九十錢
送料十五錢

世界少年少女名著大系第七編・金の星社編

アラビアン・ナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を與へてゐるかゞわかります。傳說によれば、アラビヤの王が毎日一人づゝ新しい妃を娶へては、翌日は殺して了ふので、遂に或一人の婦人が現れ、自ら進んで王妃となつて、その夜から話しはじめて、遂に千一夜の間語つたのが、此のアラビヤン・ナイトだといはれてゐます。

四六判箱入美本
定價金九十錢
送料十五錢

東京市外 田端三五一
金の星社
振替東京五九五三八番
電話小石川五九五五六七番

金の星

世界少年少女名著大系

第一編 ロビンソン漂流記

（四六判箱入美本　内容百四十六頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第三版

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ漂流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて來るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程深山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですから、この本を讀まない者は、一生の不幸だとさへいはれてゐます。

第二編 ナポレオン物語

（四六判箱入美本　内容百五十六頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第三版

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せらるまでの變化極りない物語を、わかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな感奮を與へるでせう。

第三編 ドン・キホーテ

（四六判箱入美本　内容百七十七頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第三版

イスパニヤのある村にクイザノといふ男がありましたが、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、遂に乘つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ滑稽な物語りです。

第四編 コロンブス物語

（四六判箱入美本　内容約百七十頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第三版

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心慘憺して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

第五編 ガリバアー旅行記

（四六判箱入美本　内容約百七十頁　定價金九十錢　送料金十五錢）

第二版

ガリバアーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡るまで、滑稽と奇拔な面白い物語りで、そこに人世の諷刺や、大いなる教訓も含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすゝめいたします。

發行所　東京市外田端三五一番地　金の星社

振替東京五九五九六番

金の星社發行の名著

野口雨情先生著 青い眼の人形
野口雨情先生の名作童謡を深山に集めた壯麗無比の本です。
▽定價金壹圓八十錢 ▽送料十五錢

沖野岩三郎先生著 父戀し
父の行方をたづね歩く、姉と弟のあはれな〳〵物語りです。
▽定價金壹圓 ▽送料十五錢

三宅房子先生著 家なき子
旅役者となつて諸國をさすらひ歩く孤兒の物語りで、原作は佛國の名著です。
▽定價金壹圓八十錢 ▽送料十五錢

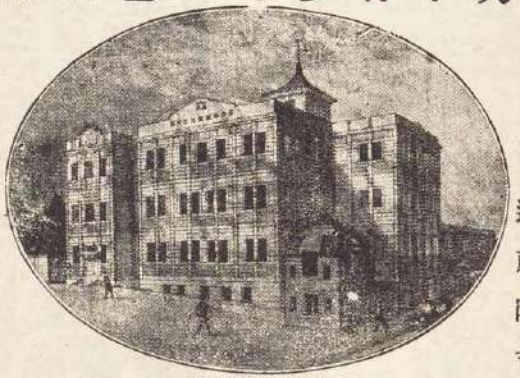
武井武雄先生著 ブウ太郎鍛冶屋
武井先生獨得の面白い童話と畫を集めた本で、たまらなく面白い本です。
▽定價金壹圓六十錢 ▽送料十五錢

沖野岩三郎先生著 童話讀本 赤い猫
日本で出來た最初の童話讀本で、最も面白くて爲めになる本です。
▽定價金九十錢 ▽送料十四錢

東京市外 田端三五一 金の星社 振替東京 小石川 電話 五九五五三八 五九六七番

天下青少年の登龍門

會長、正三位 尾崎行雄
顧問、理學博士 山内繁雄
文學博士 遠藤隆吉


（本會車夫所設計圖）

目下新學期開講中
入會の最好期は今也!!
講義錄見本つき會則
—申込次第無料進呈す—

大日本國民中學會あり!!

天下の青少年諸君 意を強うして可也

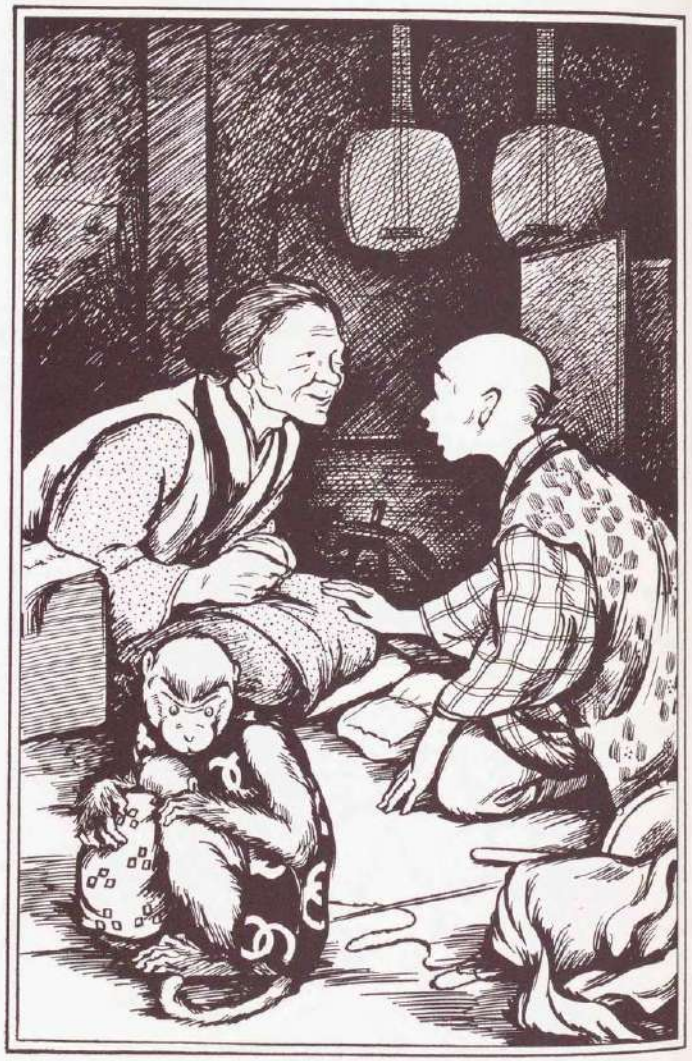
諸君は學校萬能の迷夢より醒めなければならぬ、中等教育を受くるには必ずしも中學校に入るを要しない、諸君は居乍らにして中學校に學ぶことが出來るのである。大日本國民中學會の最善をつくせる講義錄は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に臨むであらう。

本會二十二年の試練と經驗とはこゝに次の如き獨自の特色を獲得せり。

■講義の新いこと……模範的通信教授法として推奨せらる。
■會費の廉いこと……全科の學費一ヶ月分の遊學費にも達せず。
■學制の正いこと……正確に中學校令に從ひ全く中學校と同樣也。
■指導の良いこと……通信教授に永き經驗を有するを以て指導懇切を極む。
■講師の善いこと……中等教育者として名ある實際家を選ぶ。
■卒業の早いこと……僅か一ヶ年半の短日月にて卒業の榮冠を得らる。
■基礎の固いこと……創立以來二十二年國家的事業として一般に認めらる。
■成功の確なこと……本會の門より出でたる成功者の多きこと謂ふを用ひず。

東京神田 駿河臺 大日本國民中學會
振替（東京四二〇〇番 電話神田 三〇〇二番、三〇〇四番、三〇〇三番
口座）名古屋四二八〇番 特設牛込 五〇九五番

待ちわびて



寺内萬次郎畫

（第六頁の「猿廻與次郎」を御覽下さい。）

沖野岩三郎先生著○蕗谷虹兒先生裝幀並ニ挿畫

長編 森の祈り

四六判箱入美本
定價金壹圓八拾錢
送料金拾五錢

本書を一度讀め生終ばる忘れられぬ作名あて

本書は沖野先生が最も自信を以て世に問ふ長篇傑作であります。少年少女の讀物に對して、一大抱負を持つてゐる著者が、童話といふよりは寧ろ小說として、あらゆる家庭に、また學校圖書館に、本書を備へて廣く讀んでもらひたい希望から、數ヶ月の尊い犧牲を拂つて完成した作であります。全篇悉く清い涙と尊い教訓とに滿ちた物語りであつて、著者の敬虔な信仰は全篇にみなぎつて、讀者に偉大なる感銘を與へずには措かぬでせう。

【本編の概略】

紀州のある村に二人の兄妹があつた。兄妹は、祖父の三六爺さんと母親とで淋しく山の中に暮してゐた。父親は行方不明になつたまゝ未だ歸つて來ない。一家はごく貧しい暮しをしてゐたので、兄の時丸はどうかして家の手助けをしたいと思ひ、樵夫の仕事を習ひに山へ行くが、大負傷をして歸つて來る。時丸は足を折つてしまつたのであるそれを治す爲めに、一家は一層貧乏になるしかも孫の思ふことめて厚い三六爺さんは、家を賣つても孫達に勉强させたいと、途に先祖傳來の家を賣つて了ふ。兄妹は、それを學費として東京へ行つて苦學する。（以下略す）

▽父戀しを讀まれた方は是非本編を御覽下さい△

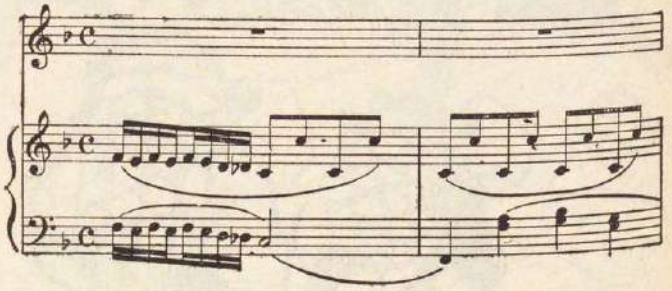
東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番

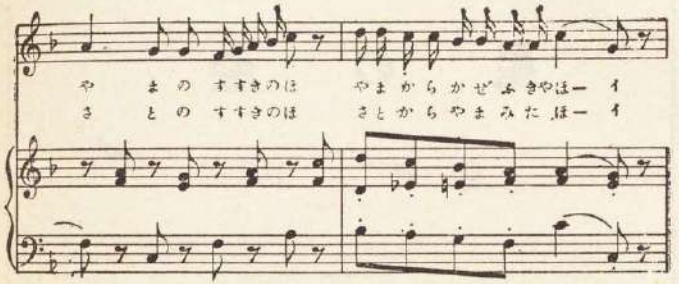
金の星

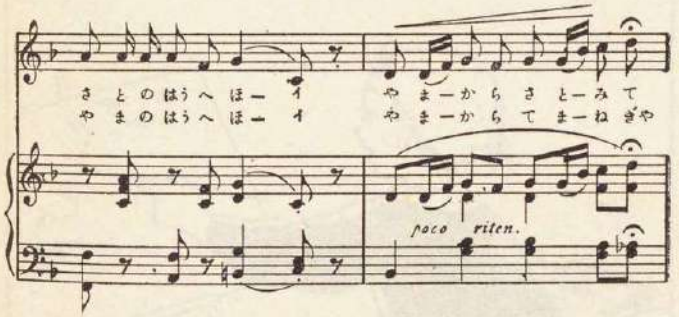
十一月號

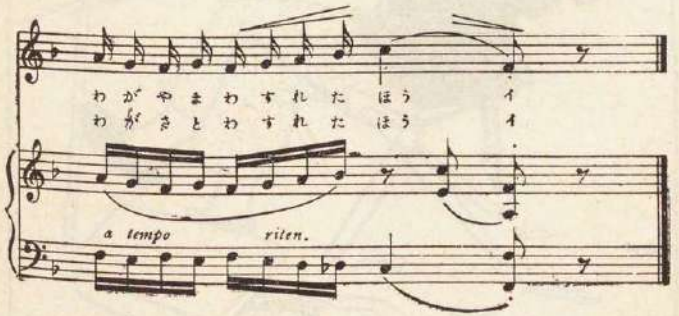
芒の穂

本居長世作曲




やまのすすきのほ　やまからかぜふきやほーイ
さとのすすきのほ　さとからやまみたほーイ


さとのはうへほーイ　やまーからさとーみて
やまのはうへほーイ　やまーからてまーねぎや
poco riten.


わがやまわすれたほうイ
わがさとわすれたほうイ
a tempo
riten.

芒の穂

野口雨情

山の芒の穂
山から風吹きや　ほうイ
里の方へ　ほうイ
山から里見て

わが山　忘れた　ほうイ
里の芒の穂
里から山見た　ほうイ
山の方へ　ほうイ
山から手招ぎや
わが里　忘れた　ほうイ

猿廻與次郎

三島霜川

一

カラ、カラ、カラ〳〵、カラ、カラ、カラ、カラ——小さいけれども、好い響で、豆太鼓の音が、そこらに聞えて來ました。

『お猿が來た、お猿が來た……』

と、さう云つて、子どもたちが、二人三人づつ、その豆太鼓の音のする方へ駈出して行きました。

京の三條小橋の辻——秋も、もう深くなつた頃のことでございます。ほがら〳〵と、日は明るく照りかゞやいてゐても、街は、ひそやかに何か考事でもしてゐるやうに、物靜でございました。それで、豆太鼓の音が、爽に、よく響きました。

豆太鼓をたゝいてゐるのは、猿廻——眉毛が、大きな毛蟲を三匹も一つしよにしたやうに太くつて、それが『へ』の字なりになつて、ショボ〳〵した細い目を隠してゐました。それに、おでこでした。そして頭のてつぺんのところに、蜻蛉ほどの髷が、ちよつぴり、乘つかつて居りました。背かに擔つた風呂敷包、それには、お猿の『とく』が、片足投出して、ちよこなんと乘つかつて居りました。

五六人の子どもが、そこへ集まつて來たとき、此の『とく』が、誰に貰つたのか、大きな柿をかゝへるやうに持つて、少しづつ、かじつては、頬つぺたのところを丸く膨ませてゐました。

『やア、とくめが、柿をたべてゐる』

と、子どもたちは、面白がつて、手をたゝいて笑ひました。

それが、癪に障つたのでもございませう。『とく』は、目を、くりつ、くりつさせて、子どもたちの方を見ました。そして、柿の種を一つ、投げました。

『これッ……』

それを見た猿廻しは、ぐいと、肩を一つ、ゆすつて置いて、豆太鼓のばちで、『とく』の頭を輕く打ちました。

『とく』は、ちよつと白い齒を露して、逃げるやうにしました。その樣子が、をかしかつたので、子どもたちはまた、手をたゝいて、笑ひました。と、今度は、くるりと背かを向けて、脇腹のところを搔きました。そして、頬ッぺたのところをモグ〳〵させながら、また柿を嚙り出しました。

『とく、踊らないか』

子どもたちのうちに、さう云つて、喚いた子がございました。

『とく』は、知らん顔をして、こつちを向かうともしませんでした。その代り、猿廻しが、ひよいとお叩頭をしました。そして、『はい〳〵。只今、直きに踊らせます』

と、にこ〳〵しながら云ひました。

『はやく、踊らせておくれよ』

子どもたちの一人がまた、さう云つて、ねだるやうに喚きました。

『はい／＼……』

と、やはり、おとなしく然う云つて、猿廻は、カラ、カラ、カラ／＼、カラ――と、豆太鼓を打ちつゞけてゐました。

すゐうちに、一人立ち、三人立ちして、大勢の人が集まつて來ました。そして、どちらかと云ふと、子どもたちよりも、大人の方が大勢になりました。

そこで、ちよつとお斷り致して置きますが、『とく』は、女猿でございました――これに、どなたも覺えてゐて戴きませう。

二

猿廻しは、名を與次郎と申しました。毎日々々、京の町々を、お猿を踊らせて歩いて居りましたので、誰でもよく其の顔を知つてゐましたが、顔つきが顔つきですから、皆なが『馬鹿』だと思つてゐました。が、與次郎は、たいへん親孝行者で、そして、眞面目で、正直で、づつと前に、お奉行所から、三貫文といふ、御褒美を貰つたことさへあるのでございます。

その頃、京の町々では、それが、たいそうな評判でございました。しかし、もう、よほど前のことですから、皆なが忘れて了つたのでもございませう。近頃では、その御褒美を貰つた噂などをする者もございません――さつたく、また、與次郎は、それほど古くから、猿廻しをしてゐるのでございました。そして、お上から御褒美に下すつたお金も、年を老つて、目も不自由な母アさんの、永い間の養生に遣つてしまつて、自分は、いつまでも、猿廻しをしてゐるのでございました。お日和でありさへすれば、いつも、にこ／＼、にこ／＼して……

『皆樣が、お集まりじや、さア、とくよ』

さう云つて、與次郎は、豆太鼓のばちを、襟のところへさしました。そして、片手にからめてゐた細い綱をひくと、『とく』は、その腕につたはるやうにして、ヒラリと大地へ飛んで下りました。

與次郎は、帶にさしてゐた鞭を拔取つて、シャンと身構をする。『とく』は、ちよこなんと坐つて、三度ほど、つゝけて、ひよい／＼、お叩頭をしました――

お叩頭をしながら、大急ぎに、慌てゝ、かじりかけの柿を頰張つて了はうとするものですから、その樣子と云つたらございません。子どもたちも、大人も、面白がつて、どつと笑ひました。

『おはつ、德兵衛が、祝言の、ことぶき』

與次郎は、眞面目に然う云つて、『とく』が踊る外題を披露しました。『とく』は、もう一ぺんお叩頭をしました。

『お猿は、芽出度や、芽出度や、なあ――』と、與次郎は、聲を張上げて、唄ひ出しました――それは、有田歌といふ歌でございましたが、聲が、すてきに好いので、大人は、皆な腕を組んだりしまして、じつと耳を澄ましました。そして、子どもたちは、『とく』が、ひよこ／＼踊り出すのを、手をたゝいて、悅びました。

『婿入委も、のつしりと、のつしりと……』

と、與次郎は、首を振り／＼、拍子をつけて云ひますと、『とく』は、その拍子に乘つて、お婿樣になつた積り――大氣取に氣取つて、手を振り、肩を、し

やな〳〵させて、右へ、左へ歩き廻りました。その頬ッぺたが、大きな瘤のやうに飛出してゐました。

『オヽ、德兵衛さん、お出でになりましたか……あんまり、こなたの來やうが遲いによつて、おはつさんは、顏を眞ッ紅にして、腹を立つてゐやんすわいの』

と、與次郎は、『とく』に然う云つて、ふところから、紅い巾をかけた、島田髷の小さな鬘を出して、それを『とく』の頭に、スッポリと、かぶせて、そして、木の盃を其の手に持たせました。つまり、『とく』は、お顏の眞ッ紅な、花嫁さんになつたのでございます。

『これ、おはつさん、お婿樣が、盃をしたいといふてござる。機嫌をなほして、盃なり戴かんせ……』

と、與次郎はまた、『とく』に然う云つて聞かせるやうに云ひました――『とく』は、盃を持つたまゝ、濟ましアして、他方を向いて、眼を、くりつ、くりつさせながら、集まつてゐる人等の顏を見廻しました。そして、頬ッぺたに溜めた柿を、少し出して、ポリポリ嚙んでゐました……

『これ、これ、これ……』

と、與次郎は、拍子を取りながら、輕く鞭を振つて、『とく』に或る注意を與へ、そして、島田の鬘を除りました。と、『とく』は、びつくりしたやうに、キョロ〳〵して、盃を片足の指のさきに、はさんで、そ

れを、づいと突出すやうにしました。――これは、『とく』の藝の一ッでございました。

そこで、その樣子が、をかしいといふので、皆ながまた、どつと笑ひました。

けれども、與次郎は、眞面目でした。『ヤ、これ、婿さん、足で、盃をさすといふことがあるものか。眞ンまに、さゝんセ！　眞ンまに、さして遣らんせ。』

と、云ひますと、『とく』は、盃を手に持つて、ちよこなんと、行儀よく坐りました。そして、その盃を、兩手で捧げるやうにして、前の方へ差出しました――とたんに、皆なから、五六文の錢が、バラバラと投げられて、『とく』の傍に轉りました……

『そじや、そじや、そじや……そこで、おはつさんが戴いたものぢや。これ戴く、ぢう、盃を……』

與次郎は、さう唄ひつゝけて、また『とく』の頭へ、島田髷の鬘をかぶせますと、『とく』は錢を拾つては、戴き〳〵、それを與次郎の手に渡しました。

與次郎も、續けさまにお叩頭をしながら、『嫁御の晝寢も、ころッとせ……　ころッとせ』

と、唄ふ『とく』は、肘枕をするやうにして、ころ

りと、横に寝ました。その拍子に、島田髷が、ポツクリ抜けて飛んだので、また、皆なの大笑となりました。

鑢がまた、二三文、投げられました。

今度は、與次郎が、それを拾つて、戴きながら、『これ〳〵、婿さん、あんまり、つれなうしなさるによつて、嫁御が起きさんせぬ……　さア、さア、おこしたり……　おこすのだ』

と、やはり、言葉に、或る拍子をつけて云つて、ついでに、『とく』が、投出して置いた盃を拾取りました。

『とく』は、起きて、ちよこんと、坐りました。

『それで、機嫌がなほつたろ……　立たしやませ！くるりと、かへつて、立つたりな。立つてくれ……』

『とく』は、立つて、でんぐりかへしを打つて、すぐに、すつくと立ちました。

『そじや、そじや……　ま、一度、くるりと、かへつたり……』

『とく』は、また、でんぐりかへしを打ちました。

『そじや、そじや……　くるりと、かへつて、立つてくれ、立たしやませ……　お猿は、芽出度や、芽出度や、なあ——』

と、與次郎は、靜に唄ひあげる——『とく』は、また三度ほど、續けさまに、でんぐりかへしを打つて、それで『鑿』が一とくさり、終りました。集まつてゐた人たちも、二人去り、三人去つて、間もなく、皆な何處へか行つて了ひました。

與次郎は、やつこらさと、大地に腰を落して、すつぱ〳〵、煙草にしました。『とく』は、その傍で、頬ッぺたの柿を小出しにしては、たべてゐました。人とお猿と——歌を唄ふ猿廻しと、踊るお猿と、何事もないやうな京の街に、秋の日が、靜に、ほがら〳〵と照つてゐました。

程なく與次郎は、また、カラ、カラ、カラ、カラ

カラ、カラッ——と、豆太鼓をたゝきながら、次の町へ移つて行きました。その背かの風呂敷包の上で、『とく』は、こくり、こくり居眠をしてゐました。

三

京のうちでも、堀川といふと、もう眞んとのはづれの方でございました。その片隅に、燻りかへつた、小さな〳〵お家——それが、與次郎のお家でございました。その小さなお家の隅の方に、『とく』の小さなお家もございました——お家と云つても、ナニ、犬小屋のやうな箱でございました。

與次郎の母アさんは、永年の眼病で、眼が盲れて了つてゐました。それでも、近所の子どもたちを集めて、『三味線』の指南をしてゐました。それほどに、この母アさんは、『三味線』と『唄』とが上手だつたのでございます。

與次郎は、この目の見えぬ母アさんと、『とく』と、それから『とく』の赤ン坊と——それだけで暮してゐ

たのでございます。

夕日が薄れると、障子の破目が、ビ、ビ、ビ、と聞取れるか聞取れぬ位に鳴つて、そこから吹込んで來る風が、身に沁みるやうに薄ら寒くなりました。その頃にはもう、お稽古に來てゐた子どもたちも歸つて了つて、家のなかが、ひつそりとしてゐました。そして、『とく』の赤ん坊が、キャッ、キャッ、キャッ、キャ…としきりに啼いて居りました。

『オ、オ、今朝から乳を飲まぬ。空腹いのであろ！…　待ちや〳〵、追ッつけ、「とく」も戻るであらう』

と、盲目の母は、手さぐりに、そこらを取片づけながら、さう云ひました。それでも、子猿は啼止みません。

『何か遣る物が？……』――と、盲目の母は、それを考へるやうに、少らく、じつとして、佗しい顔をしてゐましたが、ふと、稽古に來る子どもたちのうちに、茹栗を持つて來てくれた子のあつたことを思出して、それを手さぐりに探しました。さうして、手に觸つた茹栗――それを三粒ほど持つて、子猿の方へ寄つて行きました。そして、二三本、拔殘つた齒で、ていねいに皮を剝いて、子猿にたべさせました。

子猿は、バッタリ啼止みました。

『與次郎にも、かうして、栗の皮を剝いてやつたこともあつた……』

盲目の母は、ふと、そんなことを思出しました。それは、遠い〳〵昔の思出でございます――見えない目に、五つか六つの與次郎の幼顏、そのニコ〳〵した顏が、チラ〳〵と浮んで來ました。そして、それは、どんなに、なつかしい顏でございましたらう。

『まさか、いつまでも、猿廻しをさせて置かうとは思はなかつたが、わしの此の永の病で……』

さう思ふと、親の身には、與次郎が、可哀さうに思はれてなりません。そして、いろ〳〵の愚痴も出て來て、盲れた眼から、涙が、ポロ〳〵、ポロ〳〵零れて參りました。

そこへ、與次郎が歸つて來ました。

『今、戻りました』

と、にこ〳〵した其の顏――いつものことではございますが、その聲までが、何か悅しいことでもあるやうに、元氣が好いのでございます。

『オ、、戻りやッたか』と、母アさんは、涙を隱しました。そして、『子猿めが、さつきから、親をたづねて、やかましい。疾う、傍へやつて遣りや！』

『はい〳〵……　さうでございませう。乳が欲しいによつてな。それ、「とく」よ、たんと、飲ませてやれよ』

と、云つて、『とく』の綱をといてやりました。そして『母者人、今日は、好い稼ぎがございましたによつて、また、いつもの、大佛餅を買うて參りました』と、その竹の皮包と、かなり、重みのある財布とを母アさんの手に渡しました。

與次郎は、この大佛餅を、何より母の好な物だと考へてゐたのでございました。盲目の母はまた、たいそう、それを悅びました。

『とく』は、子猿を抱き上げて、よねんもなく、乳を飲ませて居りました。そして、さも〳〵悅しさうな其の樣子を見て、與次郎も、ニコ〳〵して居りました。

かくて、與次郎は、薄暗い行燈をともして、母アさんと一緒に、晩の御飯を戴くのでございます。さうして、機嫌の好い母の顏を見ながら、町で見て來た事やなどを話すのが、與次郎に取つて、何よりの『悅』でございました。心のうちには、『明日のお天氣』を祈りながら……

（をはり）

家なき娘（つゞき）

『家なき子』の姉妹篇

三井信衛

一　意外の再會

涙ながらにバリンヌは、ギロオの廣つ場を後にしました。遠い印度を出る時には、お父さんとお母さんとバリンヌとさうして驢馬のバリカアル。今ではその父も母も、いゝえバリカアルさへもその側には居なくなつて、寄邊もない孤兒になつたバリンヌが、やがてとぼ〳〵とカレイの街道を、アミアンさして歩いて行つた頃には、もうそのお金もほんの殘り少なになつてをりました。巴里から、アミアンを通つてマロオクウルまで、『控へ目のをぢさん』から貰つた地圖によれば、ほんの短い一筋の黒い線で、分り過ぎさ程分りいゝ道でした。けれどもその里程を計つて見ると、どう見積つても百五六十哩はありました。

丁度巴里を出てから四五日目、さすがに廣い花の都も、今では遙か後の方に、一かたまりの煙のやうに遠のいてしまひました。ほんの少し許りのお金を大切に握りながら、バリンヌはと或る町でパン屋の店先に立ちました。

『パンを頂戴。』

『お金はあるかい？』

『えゝ、一ポンドだけ頂きたいんですけど……こゝに二圓ございます。お剩錢を下さいな。』

バリンヌが二圓の銀貨を出すと、パン屋のおかみさんは大理石の板の上で、チャリン〳〵と試して見ました。

『何だい、これは？』

『二圓の銀貨ですわ。』

『お默り、泥棒！

『まア、泥棒ですつて……』

『これは贋金だよ。これを使つてパンを盗らうとしたんぢやないか！　浮浪人！』

泥棒だ、贋金だと罵られた時には、思はず手を握りしめました。けれども、浮浪人と言はれた時、バリンヌの目には急に涙が湧いて來ました。浮浪人、宿なし――あゝ、本當にそれに違ひがない。家もなければ親もなし……ましてさうした少女たちに目をつけて、一も二もなく怪しい者として、警察へつれて行くのはこの邊りの巡査でした。

その時もうバリンヌの周りには、たくさんの村人たちが群り集つて、パン屋のおかみさんは今にもバリンヌの肩を突いて、警察へ押し出さうとしました。思はず彼女は人波を押し分け〳〵、一目散に街道筋を走つたのでした。さうして涙は留度もなく、二つの頰を傳ひました。

今はもう一錢のお金さへも無くなつてしまひました。あゝ、これから先の長い〳〵旅の空を、まアどうして行けばいゝのでせう！　五丁十丁、その度に小さな川の流れでもあると、その水を掬つては飲み、飲んでは掬ひ、ほんの一時のお腹を滿たしてをりました。又或る時は道ばたに落ちてゐる小石を拾つては、それをそつと口に入れながら空腹さを紛らはしてもをりました。

一足行つては父の姿を憶ひ出し、二足行つては母の俤を胸に浮べ、バリンヌはとぼ〳〵と歩いて行きました。さうして不圖面を擡げて大空を眺めると、いつしかそこにはどす黒い雲の塊りが幾つも〳〵浮んで、早や紐のやうな大雨が、ざアッと一時に落ちて來ました。思はず力ない足を引き立てながら、せめて森の中にでも辿りつかうと懸命に駈けようとした一刹那、青い火柱が目の前に立つたかと思ふ間もなく、彼女はそこに撞と倒れて、氣が遠くなつてしまひました。

……どれ程の時間が經つたでせうか。再び氣がついて見ると、先刻の大雨はもう跡かたもなく止んで、向方の森の木々は眞赤な夕燒にきら〳〵と光つてをりました。

『あゝ、やつと命拾ひをした。』

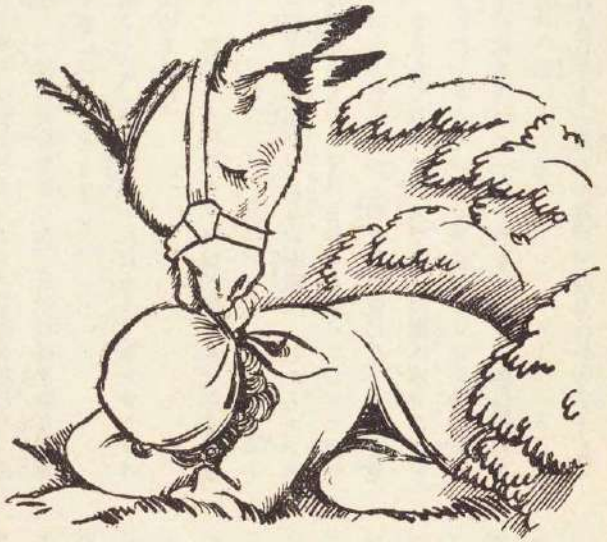
思はず獨り言を云ひながら、バリンヌは又もとぼとぼと歩いては行つたけれど、空腹さは前よりも何倍かの力で押し迫つて來たのでした。力なく〳〵薄暗い森に入つて、ころりとそこへ寐轉んだバリンヌが、目の前に枝の低く垂れ下つてゐるのを見ると、思はずその木の葉の一枚一枚をむしり取つて嚙みました。

『あゝ、お母さんが、あんなに仰有つてゐたマロオクウルへも行けずに、私はこゝで死んでしまふのかしら……？』

マロオクウルへ行けば屹度幸福になる――あの母の語つたその一言が、強く彼女の胸に甦つて來ました。けれどもバリンヌの頭は、重い熱病のやうにぐら〳〵として、手足は少しも言ふことを聞いてはくれません。

『あゝ、私は死ぬのだわ。……あゝ、死んではならない、死んではならない……』

強くさう思ひながらも、いつの間にか又も氣が遠くなつて、刻一刻と深い眠りに陷ちてしまひました。



……不圖氣がつくと、頰の邊りに何かしら暖いものが觸りました。と、又暫くすると、丁度天鵞絨のやうなものが額を撫でました。思はずはつきりと目を見開いたバリンヌが、急に邊りを眺めた途端、『あつ！』と鋭く叫んでしまひました。

おゝ、そこにはあの驢馬のバリカアルが、バリンヌの側にぢつと立ちながら、一心に見守つてゐるではありませんか！

『まアお前は……お前はバリカアル！』

とバリンヌが言つた時、驢馬は一聲高くいなゝきました。その聲に續いてバタ〳〵と走つて來たのは一人のおばあさん――それはこの間、馬市場でバリカアルを買つたルウケリイでした。

二　兎の皮や兎の皮！

ルウケリイは直ぐさまバリンヌを抱き起して、森の奥深くへ伴れて行きました。そこには小さな箱車が、木影に停つてをりました。

『お前さんは、屹度空腹いんだらう？』ルウケリイは言ふのでした。

『えゝ、えゝ……』バリンヌは、涙ぐんでしまひました。

まア何といふ思ひがけない邂逅！　しかもルウケリイは深切にも、チイズとパンとをバリンヌに與へました。さうしてやつと彼女が元氣になつたのを見ると、どうして只つた一人でこんな處へ來たのかと尋ねました。そこでバリンヌは、ギロオの廣つ場からこゝへ來るまでの一伍一什を、詳しく物語つたのでした。

『それにしてもお前さんは、一體これからどうしてマロオクウルまで行くつていふんだい？』

『私、どうして行けばいゝんでせう……』思はずバリンヌは獨り言を云ひました。

『するとお前さんは、そこまで行く何の當もないんだね？』

『えゝ……』

『それぢや一度聲を張り上げて、私の言ふ通りに言つてごらんな。』

バリンヌは不審で一杯になりました。それには構はず、ルウケリイは言ひ續けるのです。

『さア私の言ふ通り、聲を上げて言つてごらん、いゝかい……えー兎の皮や兎の皮、極上等の兎の皮でござい！……さア、やつてごらん。』

そこでバリンヌは、言はれるまゝに聲張り上げて言ひました。

『えー兎の皮や兎の皮、極上等の兎の皮でござい！』

『うまい〳〵、全くいゝ聲だ。』

さう言ひながらルウケリイは、側にあつた箱車の蓋を開けますと、そこには雪のやうな兎の皮が、山と積まれてありました。

『まア、兎の皮！』

『私はこの通り、兎の皮を賣つてゐる旅商人なんだよ。明日の朝、こゝからシャンチイルといふところまで商賣に出かけるんだが、お前さんは私の代りに、今言つたやうに、賣聲を上げて歩いておくれでないかい？その代り私は、お禮に二圓上げるよ。お前さんはそのお金で、シャンチイルから汽車に乘つて、マロオクウルまで行けばいゝだらう。』

『それは願つてもない幸ですわ。』

バリンヌは心から喜びました。さうしてその夜はこの森の中で、ルウケリイと一緒に一夜を過したのでした。

三　初めて知つた身の上

恰度バリンヌが遠い國から、あの貨車を進めたやうに、今再びバリカアルはがたりごとりと箱車を進めました。

『えー兎の皮や兎の皮、極上等の兎の皮でござい！』

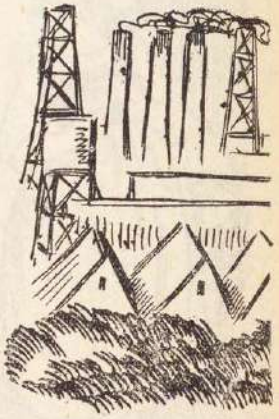
村から村、町から町へ行く毎に、バリンヌは聲張り上げて呼びました。だがその美しい彼女の聲も、いつしかしつとりと涙を含んでゐるのでした。――あゝ、若しもこの車があの貨車であつたなら！　若しもこの驢馬がまだバリンヌのものであつたなら！いゝえ、若しもこのルウケリイがお母さんであつたなら！

シャンチイルへ着いた時、ルウケリイは約束通り二圓の銀貨をバリンヌに渡しました。さうして悲しさうに啼いてゐるバリカアルを後にして、再びバリンヌは只一人、そこを立ち去つたのでした。

シャンチイルから汽車に乘つて、バクイナといふところで降りたバリンヌは、それからは急に元氣に歩き續けました。幾つかの村々を過ぎ去つて、やがて一つの丘に出ました。クロオバの生ひ繁つたその

丘を登りつめると、直ぐ目の前には工場の煙突が高く立つて、さうして家々の屋根が、折からの夕日にびか〳〵と光つてゐました。

おゝ、それこそはマロオクウルの町！　亡くなつたお父さんからも、そしてお母さんからも、幾度となく聞かされたその懐しい町が、今目の前に見えてゐるのです。そこにはおぢいさんのウルフランが、大きな〳〵工場を持つてゐて、この町一番のお金持でした。バリンヌが若しもそこに行つたなら、もう今までの苦しい辛い旅をしなくてもいゝのです。丘の上に腰をかけたバリンヌは、つく〴〵とその町の景色を眺めてゐるうちに、いつしか二つの頬には輝やかしい微笑が溢れて來ました。マロオクウルへ行つたなら、屹度幸福になるのだよ……あのお母さんの最後のお言葉が、今又強く彼女の胸に訪れて來たのでした。今こそ彼女はその幸福の町を目の邊り眺めました。



バリンヌは緩りと丘を降りて、眞直に並木路をすん〳〵と歩いて行きました。するとその一寸向方に、バリンヌと同じ位の年恰好の少女が、重さうに兩手で籠を提げながら、歩いて行くのが見えました。バリンヌはその後から、すた〳〵と追ひ縋つたのでした。

『マロオクウルは此處を行けばいゝこと？』

『えゝ、さうよ。眞直ぐに行けばいゝわ。』

少女は答へて、重さうに籠を置きました。『私もマロオクウルへ行くのよ。一緒に行きませうか？』

『そんなら私、その籠を持つわ。』

バリンヌは籠の片方を提げながら、少女と二人緩り〳〵歩いて行きました。

『あなたはマロオクウルの方？』歩きながら少女は尋ねるのでした。

『いゝえ、あなたは？』

『私マロオクウルに住んでるのよ。』

『まアさう、そして工場へ出てゐるの？』

『えゝ、あの町の人は大概工場に勤めてるのよ。』

バリンヌは不圖この少女に、祖父ウルフランのことを訊いて見たいと思ひました。お父さんやお母さんから、幾度かおぢいさんのことを話されてはゐたけれど、固よりバリンヌは、生れてから只の一度も會つたことはありませんでした。それに又、一體バリンヌがどんな身の上の下に生れて來たのやら、それについてはこれまでに、只の一度も聞かされたことはなかつたのでした。

『あなたはマロオクウルで生れたの？』どき〳〵とする胸を抑へながら、バリンヌは訊きました。

『えゝ、さうよ。』と少女は答へました。『でも、私はお父さんもお母さんもないのよ。』

『まア……』とバリンヌは、自分と同じ境涯の少女の身に、思はず憐れみの涙を浮べたのでした。

『私は今おばあさんと一緒に暮してるの。おばあさんはフランソアと言つて、工場主さんのお子さんの、アドモンさんと云ふ方のお乳母だつたのよ』

『えゝ!?』とバリンヌは大きく目を瞬つたまゝしばらくはその場に棒立ちになつてしまひました。おおアドモン！　それこそは忘れ方ない父の名前！

しかもこの少女のおばあさんが、父アドモンの乳母であつたとは！

『工場の親方はウルフランさんつていふのよ。』

又もバリンヌは、はつとして少女の顏を眺めました。

『ウルフランさんはアドモンさんといふ一人のお子さんがあつたのよ。私のおばあさんは、いつもその

お方のお噂ばかりしてゐるわ。』

高鳴る胸を抑へ〳〵、バリンヌは一心不亂に少女の話に耳を傾けたのでした。

『アドモンさんはウルフランさんのお子さんなのだけど、私なんか生れない前に、家を出ておしまひになつたのよ。』

『えゝ?!　まア、それはどうして？』

『ウルフランさんとアドモンさんとは、それは〳〵中がお惡かつたのですつて。たうとうアドモンさんは勘當を受けて、遠い〳〵印度の國へ行つて、その國の娘さんと御結婚なすつたのよ。さうして生きてゐるのか死んでゐるのか、それを知つてる者は誰一人もないの。』

『あゝ……』とバリンヌは、心の中に強く叫びました。

初めて知つたバリンヌの身の上！　あの亡くなられたお父さんが、まさかにおぢいさんのウルフランと仲が惡くて、十何年か以前に勘當を受け、家を出ておしまひになつたのだとは、今が今まで夢にも思はないことでした。お父さんが勘當の御身であつたと知つた今、バリンヌはどうしておぢいさんのお家へ歸つて行くことが出來ませう！

思へば遠い〳〵印度から、このマロオクウルへ來るまでの辛い哀しい旅の空！　さうしてしかもこゝへ來て見れば、そのおぢいさんとは會へない身の上であつたとは！

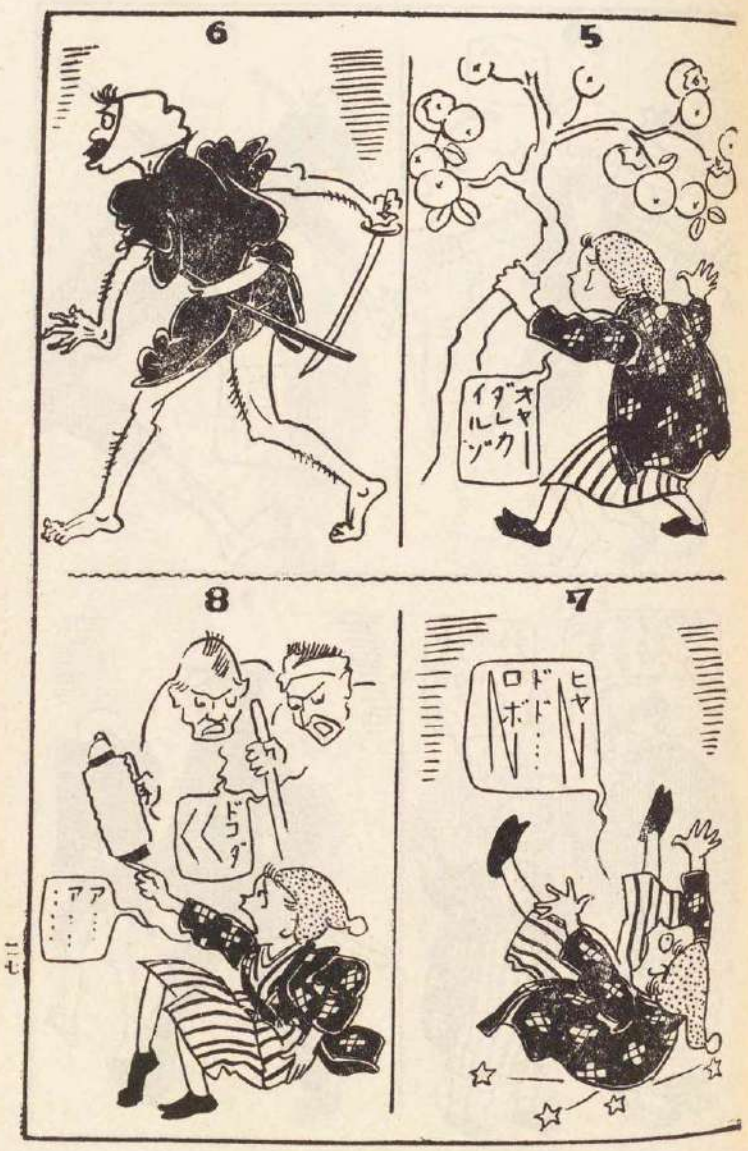
マロオクウルへ行けば幸福になる――あの母の言葉も、今では何の慰めにもなつてはくれませんでした。一體どうすればいゝのでせう？　せめてお母さんが生きてゐて下すつたなら、又おぢいさんに會ふ工夫もあつたらうけれど、年の行かないバリンヌにば、どうしていゝやら少しもわかりませんでした。

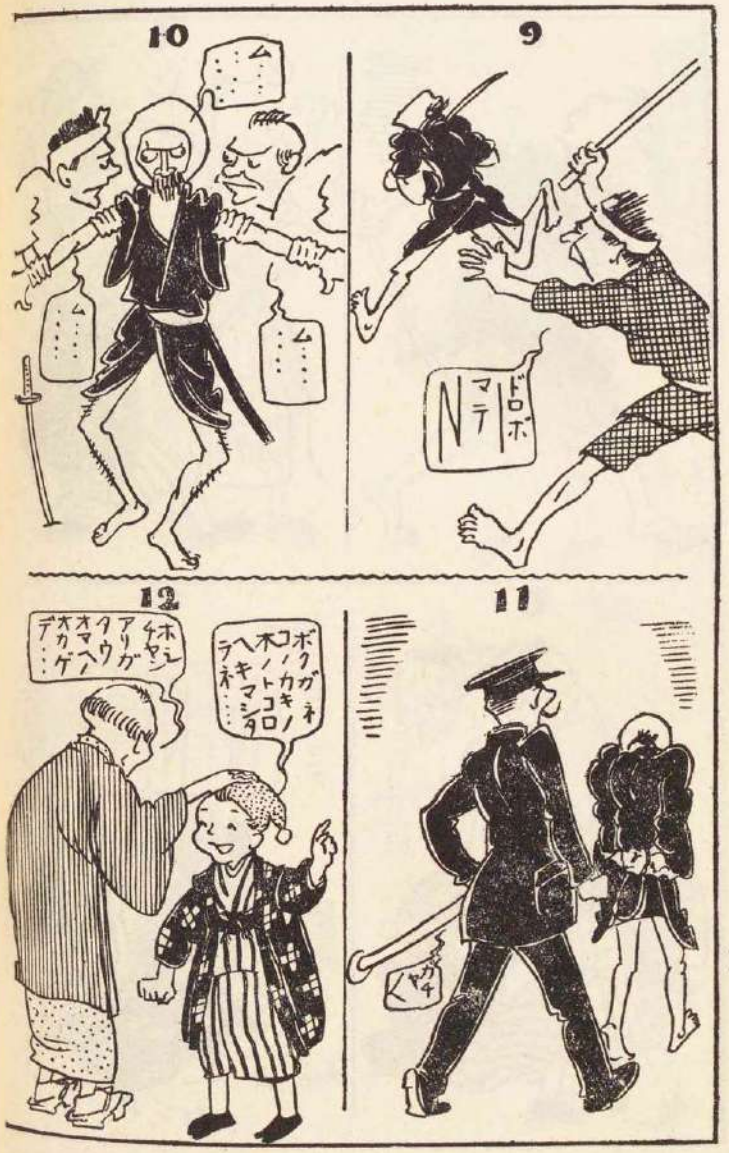
彼女の運命は、こゝに思ひもかけぬ暗い、波瀾の多いものとなつたのです。（つゞく）

ホシローヒルム

（柿盗人の巻）

木下孝一郎作画




9
マテ
ドロボ
10
ム……
ム……
ム……
11
ヤガテ
12
ボクガネ
コノカキノ
木ノトコロ
ヘキマシタロ
ネ……
ホンニ
アリガ
タウ
オマヘノ
オカゲ
デ……

13
カキノ木ノ
トコロヘナ
ニシニキタノ
？
14
ハハ……
イツモナラ
コンナ
ヤルノダガ
15
今夜ハ
大テガラ
ダカラ
ゴホ
ビ！
16
ヘヘ……
馬鹿ニオモイヤ

童謡

野口雨情選（子供篇）

雀

山梨縣上九一色村　田中　水清

すずめ〳〵
ささの中で
足切つて
なくから
かしの木にとまれ
ばら

熊本縣荒尾北校　海達　公子

私の
かんざしに
すず一つ
ばらにも
つゆの
すず一つ

夕日

熊本縣荒尾北校　海達　公子

もうすこうして
築港の
さきにはいる
お日さん
がにひかつて
まばゆい
まばゆい

朝の雨

香川縣川東村　若松　忠夫

静かな雨朝の雨
桐の新芽伸びました
静かな雨朝の雨
ほうせん花がぬれました

海邊

山梨縣小笠原校　金丸　正則

背戸の
海原
波さドード
一人
渚に
立つてゐりや
海山
へいのかげみてもない
草のなかみてもない
げたをなくして
ないてるこども

雨

静かな雨朝の雨
さあさあ學校へ急ませう

げたなし子

青森市造道　小館善四郎

げたをなくして
ないてるこども

千里の
風が來る

くものあみ

東京市元町　中坂藻の舟

黒くも小ぐもの
つーくつた
絹の樣なあみに
とーしみとんぼが
かゝつてる
三ケ月樣も
かゝつてる

とんぼ

東京市成城中學　園部　源吾

とんぼとんぼ
赤とんぼ
おまへのきものは
すずしいな
今日はどこまで
いつて來た
とんぼとんぼ
赤とんぼ

夜の雨

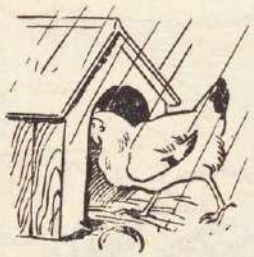
神奈川縣逗子校　横尾　義貫

一人ぼつちで
さみしいな
すや〳〵ねむる
弟の
ねゝ顔を見たが
さみしいな
外は小雨の
音ばかり

天氣雨

山梨縣中巨摩小笠原校　竹川　芳人

バラ〳〵バラ〳〵



雨やどり
バラ〳〵バラ〳〵
天氣雨

きーす

京都市小川通　伊藤富士雄

ぎーすちよん
はた一段織りました
誰が着るのだろ
ぎーすちよんちよん
おひげが伸びました
なにするのだろ
ぎーすちよん
はたが六段
おひげが三寸
大かたおめかし
するのでしよ

天氣雨
雀はちう〳〵
屋根の上
犬小屋おるすを
さいはひに
にはとりやこけ〳〵

百足の選手

（下）

江口渙

この競爭に勝らさへすれば、きつと暖い着物が貰へると云ふ事が解りますと、さあ、大變です。今まで齒の根も合はない位にがたがた慄へたり、無闇にちおこまつてばかりゐた動物達は、急に見違へる程、元氣になりました。そして、早速、必ず勝つてくれさうな好い選手を選び出す相談にとりかかりました。

廣い廣い野原の眞中には、獅子や、熊や、虎や、狼や、狐などがぞろぞろ集つて來ました。そして眞裸の體をぶらりと並べて、大きな車座を造りながら、いろいろと相談を始めました。

これ等の四つ足で歩き廻る動物の中では、それまでは兎が一番早い事になつてゐました。現に『脫兎の如く』と云ふ言葉がある通り、何かにつけて一番早いものの例にされる程でした。

ところが、その少し前の或る日の事です。兎と龜とが、野原の眞中から、向ふの小山の麓まで、みんなの見てゐる眼の前で競爭しました。そして、誰もが大丈夫らくらくと勝つだらうと思つてゐた兎の方が、意外にも、却つて龜に敗けました。

それ以來、兎の評判の惡い事と云つたら、全くお話しにならない位でした。『兎なんて見かけだけで、一寸も早くないぢやあないか。あんなにのろい龜にさへ敗けて終つたんだからね』と云つてみんなはさんざん兎を笑ひました。で、若し、あの時、龜に敗けなかつたなら、こんどもきつとみんなは兎を選手に出したに違ひありません。だが、龜にさへも敗けたんだから、こんどの大競爭にはとても駄目だと云ふので、兎の事は誰も始からてんで問題にしませんでした。

何しろこんどの競爭は、神樣の立つてゐる山の頂上まで、隨分、遠い路を歩かなければならないのですから、唯、足が早いばかりでなく、體力も氣力も十分續く奴でなければいけないと云ふので、みんはいろいろ頭をひねつて考へました。それには馬が一番好いだらうと云ふ事に話がきまりました。そして最後に選手に選まれたのは、馬の中でも一番逞しい一番早い、見事な白馬であつたのは、云ふまでもあ

りません。

その同じ頃に、野原の向ふの、大きな大きな森の中では、世界中の有ゆる鳥と云ふ鳥が集つて、矢張選手をきめる相談を始めました。

鳥の仲間では、先づ最初に、鷲が

『是非、俺を選手に出してくれろ。』

と云ひました。鷲が選手になりたいと云ふ理由はかうでした。

『何と云つても鳥の中では、己が一番、大きくもあり、強くもある。その上、翼も丈夫だし、又、爪も嘴も一番鋭い。こんどの競爭で吾々にとつての大敵は云ふまでもなく獸達だ。後の蟲けらなんかは問題にならない。とにかく獸に勝ちさへすれば好いんだ。だから獸の選手が途中で俺を追ひ越さうとしたら、俺はこの十本の爪でつかみかゝつて、この嘴で裂いてやる』と云ふのです。

だが、みんなはそれに反對しました。それは若しこの神聖な競爭に、途中でそんな手荒な事をされては、假令、競爭には勝つても、或は神樣のお怒りに觸れて、大切な着物を他のものに渡されるやうな事にならないとも限らないと云ふ心配があつたからです。

みんなは神樣のお怒の怖しい事を云つてきかせてやうやく鷲をなだめました。だが、その後で、さて誰を選ばうかと云ふ事になりますと、みんなの意見はなかなか纏りません。

すると、こんどは雁と鴨と燕とが、是非自分を選手にしてくれろと云ひ出しました。それは、みんな海を一飛びに何百里も渡れるだけの力を持つてゐるから　長距離には大丈夫、自信があると云ふのです。そして暫くの間は、互に『俺が行く』『俺が行く』と云つて、わいわいと大喧嘩をしました。

だが、最後に鶴の計ひで、無氣になつて云ひ爭つ

てゐる
鴨と雁と燕
とをなだめて、
とうとう鳩が選手に
選ばれる事になりました。
鳩は長距離を飛ぶのには十分慣

れてゐる上に、平生から神様に可愛がられてゐるから一番好いと云ふのです。そして、それには誰一人として苦情を云ふ者はありませんでした。

鳥の仲間が相談をしてゐた大きな森のもう一つ向ふにあるひろびろとした砂原では、鰐だの、蜥蜴だの、やもりだの、龜だの、四つ足のくせに地べたをはつて歩いてゐる動物達が集りました。そして、早速、選手の相談にとりかかりました。

だが、その仲間の相談は、案外早くまとまりました。そして、唯一人の反對もなく、ほんたうの満場一致で、直ぐ樣、龜が選手に選ばれました。その理由と云ふのは、かうなのです。

『現についこの間も、吾々の見物してゐる眼の前であんなに素早い兎にさへも、龜は實にらくらくと勝つたぢやないか。して見ると、今のところ世界中で龜と競爭して勝てる奴は、滅多に一人もないだらう。だからこんどの競爭に、龜を選手に出しさへすれば、軟い羽根の着物は、大丈夫、らくらくと俺達の手に入る。』

みんなはかう思つて、喜んで龜を選手に選みました。そして、競爭を始めない前からもうすつかり勝つたやうな氣持になつて、その仲間はわいわい大騒ぎをし始めました。

『さうだ。選手は龜に限る。何しろ兎と競爭してさへ、あんなに見事に勝つたのだから、たしかに龜は世界一だ。』

『全く、俺達の仲間に龜がゐてくれた事は、何と云ふ幸福な事だ。』

何時の間にか、すつかり嬉しくなつてしまつたその仲間は、もう躍つたり、跳ねたり、龜を胴上げにしたりしてまで、しきりにはしやぎ廻りました。

龜を選手に選んだ仲間達の集つてゐたその砂原の

やつと遠くの端れにある、大きな大きな洞窟の中では、又、別な仲間が、選手を選ぶ相談をしました。

その仲間と云ふのは、蛇だの、なめくじだの、百足だの、げじげじだの、みんな同じやうに地面の上をのろのろと這ひ廻つて生活してゐる生き物達です。

その仲間では、いろいろ思案した揚句、最後に百足を選手に出す事になりました。それは、何と云つても、世界中で百足が一番足が澤山あるから、あの澤山な足で走りさへすれば、どんな相手にだつて、大丈夫敗ける氣遣ひはないと云ふのです。

『如何に口惜しくつたつて、他の奴等は足が四本しかないんだからね。鳥なんかに到つては、可哀さうにたつた二本ぢやないか。それに較べれば俺の方の選手は、何十倍の強味があるか解らないよ。』

『あの澤山な足を一度に動かして走つて見ろ。四本足の奴等が一町走る間には、大丈夫、二里や三里は馳けて終ふからね。』

『さうさ、百足を選手に出しさへすれば、どんな事があつても勝は俺達のものだよ。』

こんな事を云ひ合つて、みんなは大はしやぎにはしやぎました。そして、大丈夫勝つものと思ひ込んだものか、蛇が發起人になつて、洞窟の一番奥の大廣間で、盛んな前祝の酒宴を始めました。

『馬だらうが、鳩だらうが、龜だらうが、いくら死物狂ひになつたつて、俺達の選手にかなふものか。』

『全くだよ。百足の足の早い事と云つたら、うつかり見てゐては、動くのさへも好く解らない位だからな。』

好い氣持に醉つ拂つた蛇やなめくじは、かうして頻りに自分達の選手を褒めちぎつては、まだ競爭も始らない裡から、もう全然勝つたつもりになつてぐいぐい酒を飲みました。

やがて、いよいよ世界中のありとあらゆる動物に

とつて、一生の運、不運、否、孫子の代までの幸福と不幸との岐れ途となる可き大競爭が始りました。

出發の合圖をするために、神樣か、すつと向ふに見える高い高い山の頂に立つた頃には、流石に世界中が、ひつそりかんと靜まり返つた程でした。

そして、有りと有ゆる動物は、みんな同じやうに、思はず呼吸を殺して、出發の合圖の聞えて來るのを待ちながら、如何かして自分達の選手に勝つて貰ひたい、否、是非とも勝たせなければいけないと、心の限り祈りました。やがて、とうとう出發の合圖がありました。先づ鳩が輕々と森の中から飛び立ちました。そのふつくらとした胸毛を頻りにそよがせながら、白い翼で氣持好く風を切つて、見る見る空へ舞ひ上りました。

それを見た鳥の仲間は、何萬と云ふ嘴を同じやうに空へ向けて、森の木立が搖ぐ程、一齊に應援歌を唄ひました。そして、その朗かな應援歌が長い長い尾を曳いて、空の隅々までもひびいた頃には、眞白な鳩の姿は、何時か眞一文字に空を切つて、高く遠く、ふわりと浮いて流れてゐる雲の間へ、姿を消して終ひました。

鳩が森の中から飛び立つのを見ますと、馬も直ぐ樣、野原の上を馳け出しました。

銀色に輝く房々とした鬣を、波のやうに大きく動かしながら、見事に揃へた蹄の先で力强く大地の上を蹴返し蹴返し、後へ曳いた長い尾を、烈しく風の中に泳がせては、一心不亂に馳けて行く後姿は、何とも彼とも云へない位非常に勇しいものでした。

それを見た同じ仲間の、獅子や虎や象や、狐は、倘この上にも、馬に元氣をつけるために、いろいろな聲でもつて一生懸命吼鳴りました。その聲は、波のやうに、又、嵐のやうに、地面がぶるぶると慄へる程に、物凄く野の隅々までもひろがりました。だが、そのお蔭で野を走つてゐる選手の馬は、どんなに元氣がついたか解りませんでした。

鳩の影が雲に消え、馬の姿が野のはてへ見えなくなつた頃になつても、龜はそんな事には少しも頓着なしに、平生と同じく、唯のそのそと草の上を這つて行きました。

『なあに、鳩や、馬が、いくら慌てて先へ飛んで行

つても、一向に平氣だ。あいつ達は初の間こそあんなにどんどん馳け出すけど、今に見ろ。大丈夫くたびれるから。さうして、この前の兎と同樣、晝寢をするにきまつてゐるから。さうしたら、その寢てゐる間に悠々と追ひ越してやれば好いさ。何、少しも慌てゝ事はない。』

龜はこんな獨語を口の中でぶつぶつと云ひながら一面甲羅で包まれた平べつたい體の中から、小さな首を出したり引つ込めたりしては、いつまでも同じやうに、唯のそのそと歩きました。

『おい。龜の子。しつたり賴むせ。』

『大丈夫だよ。慌てなさんな。』

應援隊の懸け聲に對して、龜はこんな事を云つては、悠々と後を振り返つたりしました。

その同じ時に、野原の一番の端にあつた大きな大きな洞窟の一番奥の大廣間からは前祝の酒に元氣をつけた百足の選手が、急ぎ足に出て來ました。

『ちや、みなさん。それでは今から出懸けますよ。』

かう云つて仲間の者を見渡して、非常に威勢好く挨拶したかと思ふと、百足は早速、洞窟の入口にある大玄關の方へ向つて出て行きました。

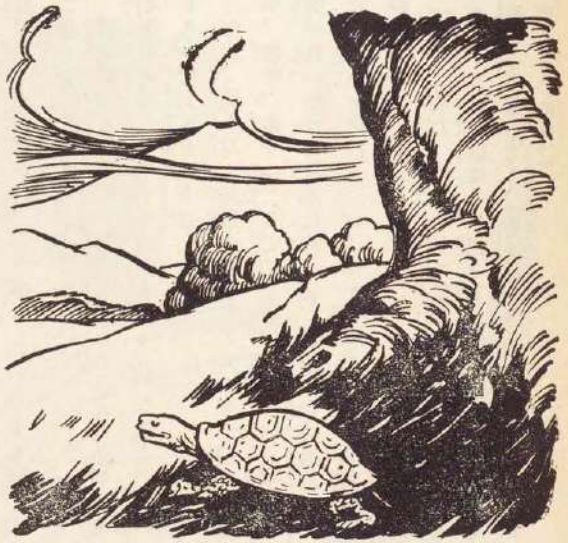
百足が出て行つた後の大廣間では、相變らず盛んな酒宴が續いてゐました。

蛇や、みゝずや、げじげじや、なめくじなどは何時の間にかぐでんぐでんに醉つ拂つて終ひました。

この競爭に勝つ爲めの前祝の酒宴と云ふよりは勝つて終つた後の酒宴とでも云ふ風に、すつかり好い氣持になつて、無闇にぐいぐい飲みつゞけました。

『ねえ。おい、愉快だな。たしかにこの競爭は百足のものだよ、』

『さうさ。何と云つても大した足の數だから、あれで走られた日には、どんな奴だつてかなひつこないよ。』



『かうして百足のおかげで、俺達まで明日から暖い羽根の着物が着られるのかと思ふと、實に嬉しくつてたまらないね。』

『全くだ。好い友達を持つたばかりに、みんな、まあ何と云ふ幸福な目に會ふんだらう。』

『ああ。有難い。有難い。』

『ほんとうに百足大明神だ。』

洞窟の中の大廣間で、すつかり醉つ拂つたその仲間が、こんな事を大聲で話しながら、前後を忘れる程、無闇にはしやぎ廻つてゐる間にも、時間はどしどし經つて行きました。

やがて最初に出發の合圖があつてから略一時間位も經つた時分でせうか。突然、鳥の仲間の棲んでゐる森の中から、歡びに充ちた勝鬨波が、大空の雲を搖がすばかり、一度にどつと擧りました。

神樣の處から、鳩が歸つて來たのです。

『おや、鳩が歸つて來た。』

『さうだ、鳩が一着だ。鳩が勝つた。ちや、一番暖い羽根の着物は、鳥の仲間にとられちやつた。』

洞窟の中の蟲けら達はみんな思はず顏を見合せま

した。そして、鳩に一着を占められた事を如何にも殘念に思ひました。

『だが、まだ二着が殘つてゐるよ。二着になれば毛皮が貰へるのだから、さう落膽しなくつても好い。二着はたしかに百足がとるから。』

誰かがかう云つて、落膽してゐるみんなの氣持を引き立たせたので、みんなも又々、前に劣らない位、もう一度元氣を取り返しました。

だが、間もなく野原の眞中にあたつて、獅子や虎や、熊や、象や、狼などの、歡び狂つてほえたてる聲が嵐のやうに起つた時には、洞窟の中の者達は思はず顏色を失ひました。馬が歸つて來た事が解つたからです。

『馬が二着だ。毛皮は四つ足共に捕られて終つた。』

『さうだ。俺達はもう何も貰へないのだ。どんなに寒い冬の最中でも、俺達は一生裸で生活なければならないのだ。』

げじげじや、なめくじは、これから何時までも何時までも、裸でくらさなければならぬ自分達のみじめさを思つて、もう、おろおろと泣き出しました。

その時、洞窟の入口の玄關の所で『よいしよ！』と云ふ威勢の好い懸聲と一緒に、ごとんと扉の開く大きな音が聞えました。

『百足の奴。今頃、歸つて來たつて何になるんだ。』

もう競爭に敗けたので、ぷりぷり怒つてゐるその仲間は、こんな事を口々に叫びながらそれでも疲れ歸つて來た自分達の選手を迎へるために、揃つて玄關へ出て行きました。

ところが驚くまい事か、疲れて歸つて來たとばかり思つてゐた百足は、やうやうこれから扉を開けて競爭に出かけて行かうとするところなのです。

『何だ。歸つて來たのだと思つたら、これからやつと出懸るところなんか。』

『ええ。これからです。では、早速、行つてまゐります。』百足は呼吸をきらして答へました。

莫迦。もう競爭はすんぢやつたよ。一體ここで、今頃まで何を愚圖々々してゐたんだ。』蛇が思はず大きな聲で怒鳴りつけますと、百足は却つて叱られるのが不思議だと云はないばかりの顏をしました。

『だつてね。足へ鞋を穿くのに、とうとう今までかかつたんです。それでも今日は隨分急いで穿いたんですが、足がこんなに澤山あつちや、全く時間がかかりますよ。鞋さへ穿ければ、後は案晴く速いんですが。』百足の選手は、一向それが不思議でないと云つた風に、至極、平氣で答へました。

みなさん。その日は、牛憎、鳩も馬も晝寢をしなかつたものですから、龜は見事に敗けました。そして、競爭に敗けた龜の仲間と、百足の仲間は、お蔭でその後今日まで、夏も冬もぶつ通しに裸でくらさなければならなくなつて終ひました。（をはり）

當麻寺物語

豐島百合子

昔、奈良の朝廷で、大そう勢力のあつた、横佩の大臣藤原豐成といふ人のお子に、中將姫といふ玉のやうにうるはしいお姫さまがありました。このお姫さまは、長谷の觀音さまの申子だといふので、お父さまもお母さまも、大切に育てました。

とりわけお母さまは、姫がお嫁に行くやうに大きくなつたら、どんなに美しい人になるだらう、長く生きてゐて、その時の姿を見たいと、樂しみにしておゐでになりました。けれども不仕合せなことに、お母さまは、中將姫が五つになつた年、ふとした病氣がもとで、床におつきになると、ずん〳〵惡くなつて行つて、たうとう、今日明日さへも知れない有樣になつてしまひました。

お父さまの豐成は、さつそく都中の名醫といふ名醫を呼んでお診せになりましたが、どの醫者もお母樣の身體のどこが惡いのかわからないから、手のつけやうがないといひました。

お父さまの中將姫は、お母さまのそばにつき切りで介抱しながら、早く癒るやうにと、そればかり祈つてゐました。

が、たうとうお母さまと別れなければならない時が來ました。その日の夕暮、お母さまは、中將姫を枕元にお呼びになつて、兩方の眼に一ぱい涙をためて、瘠せ細つた手で、姫の髪をなでながら、

『お泣きでない、あなたはまだ幼いから、私のいふことがわからないかも知れないが、わからなくとも、聞くだけは聞いておいでなさい。私はたうとうあなたとも別れて行く時が來たのです。私はいつまでも〳〵生きてゐて、あなたが大きくなつて、お嫁に行くまでも傍にゐたいのだけれど、それも出來なくなりました。これから私は、極樂淨土といふ佛さまのいらつしやる、遠い〳〵ところへ行かなければなりません。私が行つてしまつた後は、父さまのおいひ付けをよくまもつて、りつぱな人になつて下さい。』

とおつしやつて、珠數を兩手にかけて、手を合はせたまゝ、じつと目をおつぶりになりました。それからしばらくすると、體はだん〳〵冷えて行つて、遂には、あれほど美しかつたお姿も、今は見るかげもなくなつて、青ざめた醜いからだをこの世におのこしになつたまゝ、たうとう息をひきとつておしまひになりました。

その時、そばにゐた當麻寺の和尚さまが、

『いよ〳〵御臨終でございます。』といふと、中將姫やお父さまをはじめ、大勢の人々はわつと聲を擧げて泣きました。

だん〳〵日が經つにつれて、姫の心の中は、淋しさと悲しさが、增して行くばかりでした。それまでは、子供らしく樂しく暮してゐたのですが、それからは急に沈みきつて、部室にこもつてはたゞぼんやりと物思ひにふける日がつゞくやうになりました。

ある時、姫はお父さまに、

『お父さま、佛さまのいらつしやる極樂淨土といふところは、どんなところなのでせう。』と、尋ねまし

た。

『極樂はそれは〳〵よいところだ。しかしそこは、罪もけがれもない、淨い〳〵人でなければ行くことは出來ない。』

お父さまはかう仰つて、それ以上姫にわかるやうに、云つて聞かせては下さいませんでした。

姫はそれから、極樂のことについていろ〳〵なことを聞くにつけて、ます〳〵そこへ行つて見たくなり、どうしたらその罪もけがれもない、淨い〳〵人になれるだらうかと、寢てもさめても、そのことばかり考へるやうになりました。

それから何ごともなく一年たつて、お母さまの忌日が來ました。その日は、方々のお寺からえらいお坊さんたちが集つて來て、法事を行ひました。お坊さんたちは、もう〳〵と立ちのぼる香の煙の中で、尊いお經を誦みました

中將姫はそのお經の聲を聞いてゐるうちに、うつ

とりとして、どこか遠い遠い處へ行つてしまふやうな、よい心地になりました。けれどもじつと目をつぶると、胸がこみ上げて來て、ひとりでに泪が目から溢れ出ました。

やうやく法事が終つて、あたりに誰もゐなくなつた時、大せいのお坊さんの中でも、一番德の高いお坊さんといはれてゐる當麻寺の和尚さまは、姫を呼びました。姫の樣子がたゞごとではないやうに思ふが、何か大きな心配ごとでもあるのでないかと、和尚さまは優しくおたづねになりました。

中將姫は、目の前が開けたやうな思ひがいたしました。

『和尚さま、極樂淨土と申しますところは、ほんたうにあるのでございませうか。そして又、どんな所なのでございませう。私の心配ごととといふのは、そのことなのでございます。』といひました。

すると和尚さまは、大層感心なさつて、

『あゝ、さうでございましたか。極樂はたしかにあります。そしてそこは、美しく淨らかなところで、罪やけがれのない、淨い〳〵人なら、死ねばきつと行くことが出來るのです。』

『和尚さま、それでも死んだ人はまたと歸つては參

ません。生きてゐても極樂を目のあたりに見ることは、出來ないことではありません。』

『まあ、それでは死なくとも極樂を見ることが出來るのでございますか。それでは一體どうしたら、よろしいのでございませう。』

中將姫は一きは目を輝かせながら、たづねました。

『それは、この汚れた罪ふかい世の中をはなれて、佛の道にはひり、慾のない淸い心になつて、一心にお經を誦んでゐれば、しせんと極樂が目の前に現はれてくるやうになります。』

りませんのに、どうしてほんたうに極樂があるのか、又そこへ行くことが出來るのか、わかるのでございませう。』

『なるほど、そのお疑ひはごもつともです。しかし必ずしも極樂へは、死んだ人ばかりが行くとは限り

それから何年かたちました。姫ももう今では、りつばなお姫さまになつたので、お嫁に行く歳ごろになりました。お父さまは、お嫁に貰ひたいといつて來る大せいの人の中から、一番よささうな人を選んで、姫にそのことをお話しになりました。けれども姫は、

『いゝえ、わたくしはお嫁になど行きたくはございません。それよりか、どうぞわたくしをお寺にやつて、尼にさせて下さいまし。』と申しました。

お父さまはそれをお聞きになると、暗い顏をなさつて、

『そんなつまらぬことをいふものではない。それはお前の氣まぐれといふものだ。』とおつしやいました。

それから間もなく、お父さまは新らしい奥方をお迎へになりました。で、中將姫は、二度目のお母さまを持つことになりました。

こんどのお母さまは、ほんたうのお母さまと同じやうに美しい方でしたし、決して惡い方ではありませんでしたが、姫がほんたうの子でないので、やつぱり面白くないことが度々おこりました。そんなとき中將姫は、部屋に閉ぢこもつて、亡くなつたお母さまのことを思ひ浮べたり、お經の本を出して誦んだりして、心をなぐさめてをりました。

姫はそれからも、度々お父さまに、お寺へやつて下さるやうにと願ひました。お父さまも始めのうちこそ、お聞き入れになりませんでしたが、たうとうおしまひには、承知なさいました。そこで、姫は奈良から五里ばかりも南に下つた二上山の麓の當麻寺へ行くことになりました。

中將姫は最い間の願ひがかなつたので、寺へ行くとすぐさま和尚さまにねがつて、尼にしていたゞきました。そしてそれからは、和尚さまについて、一心にお經を習ひました。

中將姫は或時、どうかして極樂の相を見たいと思つて、お堂にこもつて、七日間行をしました。姫はお堂に坐つたまゝ、一心にお經を誦んでゐました。

すると、七日目の夕方、日暮れの鐘が鳴り出した時、どこからともなく、見知らぬ尼さんが一人現はれました。そして中將姫に、

『極樂の相が見たいなら、馬に百駄の蓮の莖を乘せて運んで下さい。』といひました。そして消えるやうに、見えなくなつてしひました。

中將姫は大層喜んで、早速お父さまのところへお使を送つて、そのことをお願ひしました。それから二三日たつと、お父さまの領分のお百姓たちが、百匹の馬に蓮の莖を一ぱい積んで、ぞろ〳〵と當麻寺へ運んで來ました。

百駄の蓮の莖が揃つた日の夕方になりますと、まだれいの尼さんが現れました。そして、山のやうに積み上げた蓮の莖から一本々々絲をくり始めました。そして、見るまにそれをほぐして、絲にしてしまひました。尼さんはその蓮の絲を、庭の泉の中へつけました。と、たちまち美しい五色の絲が出來上りました。

その時、お堂の中へ、もう一人、それは〳〵氣高い神々しい尼さんが、現れました。そして、

『五色の絲は揃ひましたか。』とたづねました。と、前からゐる尼さんは、恭々しくおじぎをして、

『はい、すつかり揃ひました。』と答へました。

氣高い尼さんは、油壺の中へ藁束を二つ投げこんで火をつけました。お堂の中がぱつと明るくなりました。二人の尼さんは坐つて、五色の蓮の絲を編みはじめました。

中將姫は水晶の珠數をつまぐりながら、尼さんたちのすることをじつと見つめてをりました。あれほどたくさんあつた蓮の絲は、見る間に編まれて行つて、美しい織物が出來上りました。すると、その織物の上にきれいな繪が現はれ出たのです。その時、油はすつかり燃えきつて、急に消えてしまひました。しかし、もう明け方になつてゐました。ほの白い光が、かすかに戸の隙間からもれてゐました。

二人の尼さんは、繊り上げた大きな曼陀羅（繪のこと）を壁にかけました。それから間もなく、氣高い尼さんの姿が見えなくなつてしまひました。

その曼陀羅をよく見ますと、清らかな大きい池の中に、蓮の花が一ぱい咲いてゐます。そして、その上に、佛さまが坐つてゐらつしやいます。池の中には可愛いらしいきれいな子供たちが、大せいで舟を漕いでゐます。池のそばの高い壇の上には、阿彌陀さまをまん中にして、三十六人の佛さまが坐つておいでになります。阿彌陀樣のお頭からは、白い光が神々しくさしてゐます。大勢の天女達は、その上を、笛を吹いたり笙を鳴らしたりして、飛んでゐます。

中將姫は、うつとりと眺めてゐました。それからしばらくして、尼さんに、

『この繪はどこの景色でございます。』と訊ねました。

『あなたがあれほど見たがつてゐた極樂淨土の景色です。』と尼さんが答へました。

姫はこれまでかつて、おぼえなかつた喜びに打たれて、思はずほろ〳〵と涙をこぼしました。

『それでは、今しがたまでいらつしたあの立派なお方は、どなた樣です。』

尼さんは嚴かに答へました。

『あの方は阿彌陀如來でいらつしやいます。』

中將姫はあまりの有難さに身體を顫はせました。それから、珠數を手にかけて、サラ〳〵ともんで、暫くの間拜みました。拜み終つてふと顔を上げて見ますと、もうその尼さんの姿も見えなくなつてゐました。

中將姫は立ち上つて戸を開けました。二上山の頂をはなれたばかりの朝日が、さつとさし込んで、一丈五尺もある大曼陀羅を、美しく美しく照しました。

栗の皮むき

若山牧水

栗の皮むき
お上手お下手
お上手四つ
お下手は三つ

三つは四つ
四つは五つ
五つは六つ
六つは七つ
七つは八つ
おやおやとうとう
たべちやつた

『虎助けてくれエ』

小島政二郎

一

或所に、又兵衛と云ふ怠け者がありました。立派な體を持つてゐながら、怠けてばかりゐるので、家はしじう貧乏してゐました。しかし食べる物がなくなると、友達の處を廻つて借りたり貰つたりし來て、それでも飢ゑもしずに生きてだけはゐるから不思議です。

今日もノソ〳〵町へ出て、友達廻りしよう、と思つて、先づ最初に金作のところへ寄つて見ました。

『今日は。』と表から聲を掛けながら這入つて行くと、

『おお、又兵衛さんか。恰度いゝところへ來てくれた。實はお前さんに急に用が出來て、今使ひをやらうと思つてゐたところだつたよ。――まあ、こつちへ上つておくれ。』と金作が迎へてくれました。

『へえ、私に急用？』と遠慮なく上つて火鉢の前へ坐ると、

『うん、外ぢやないが、お前さんを四五年間雇ひ切りにして、月々百圓づゝ月給を出さうと云ふ口があるのだがね。』

『へえ、そりや有り難いね。しかし、折角百圓の月給を貰つても、御承知の通り私は怠け者で、その上人中で喋ることも出來ず、讀み書き、算盤、その他人間の出來ることは何一つ出來ませんが、先樣はそれを御承知でせうか。』

『うん、そんなことは何一つ出來なくつても差支ない。唯お前さんの體が入り用なんだ。』

『よしませう。折角の話だが、命あつての物種だ。甘い物を食はす人には油斷すな。』

『馬鹿なことを云ひなさんな。』

『それでも話が旨過ぎますもの。誰かにお聞きなすつたな。私が巳の年の巳の月の巳の日の巳の刻生れだと云ふことを……巳の年月が揃つてゐるものだから、私に半年程御馳走を食べさせて置いて、十分肥え太つたところで、生膽を採つて藥にしようと云ふのでせう。』

『とんでもない事を云ふ人だ。お前さんの命を取れば、こつちの命もなくなるのは分り切つたことぢやないか。誰がそんな無鐵砲なことをするものか。話をせねば分らんが　實は私達四五人の者が金を出し合つて、今度動物博覽會と云ふものを拵へたのだ。そも〳〵動物園は、日本廣しと雖も、完全なのは三つしかない。一つは東京の上野公園、一つは京都の岡崎公園、一つは大阪で、その近所の人は、土曜や日曜に、いつでも見に行かれるから大變仕合せだが、その外の人達は、象が見たい、獅子が見たいと思つても、ちよつと見られない。さう云ふ人達のために私達は何百と云ふ動物を集めてそれを連れて、日本

全國を廻つて至る處で見物させようと企てたのだ。』

『成程。』

『早速動物を集めに掛つたところ、幸ひ二百種類位はもう集まつた。その中に、朝鮮で捕れた虎が加るが、これが大變珍らしい虎で、日本語が分るのだ。口を開けろと云へば、口を開くし、舌を出せと云へば、舌を出す。尻尾を振れ、木の上へ登れ、耳を立てろ、何でもこつちで云ふなりに藝をする。で、私達も寶物のやうに大事にしてゐたが、急に氣候が變つたせゐであらう、病氣に罹つて、いろ〳〵手當をしたのだが十日ばかり前に死んでしまつた。』

『やれ〳〵。』

『まあ私達の失望落膽を考へて見ておくれ。しかし、死んだものは幾ら悲しんでも生き返つては來ない。諦めるとして、しかし、これから朝鮮へ註文しても、すぐ間に合ふものでもない。と云つて、この虎なしでは、折角の動物博覽會も面白くない。そこで虎の皮を剝いでよく干して、乾いたところで縫ひ合はして貰ひ、この中へ人を入れて虎に仕立てようと云ふことになつた。ところが、その虎の皮の中へ這入つてくれる人がない。いろ〳〵考へた末に思ひついたのがお前さんサ。お前さんなら背は高いし、氣はユッタリしてゐるし、虎の替玉になつて貰ふには打つてつけだ。――まあ、話と云ふのはかう云ふ譯だ。一つウンと承知をして貰ひたい。』

『こりや驚いた。日本男子に生れながら、動物の眞似をさせられるとは情ない。』

『だつて、お前さんのやうな怠け者にはお誂へ向きの仕事ぢやないか。虎の皮を被つてノッ〳〵してゐれば、月百圓になるのだぜ。』

『しかし、一日何時間程ノッ〳〵するんです。』

『午前の八時から午後の四時まで。』

『阿呆らしい。四ん這になつて八時から四時までノッ〳〵やつて御覽なさい。三日もやれば血が下つて病氣になつてしまふ。』

『いや、そんなに永い間ノッ〳〵する必要はない。舞臺に出てゐる間はホンの五分間か、永くて七分間だ。永い間見せてゐて、虎の替玉と云ふことが知れてしまつては金儲にならない。舞臺に緞帳を卸してその内側へ鐵の格子を組んだ中にお前さんを入れて置くのだ。見物が集まると、辯士が說明をして緞帳を上げる。すると、鐵の格子の内側で、お前さんが虎を被つてノッ〳〵歩いてゐる。五分もすれば、緞帳を卸してしまふ。見物人がそこを出て行つてしまつてから、次の見物が集るまでには、一時間位の間があるから、その間お前さんは樂屋で虎の皮を脱いで新聞を讀むなり晝寢をするなり、好きな怠け癖を出して勝手なことをしてゐるがいい。さうして時間が來たら、また虎の皮を被つてノッ〳〵――。これなら疲れもしまい。それに、虎の餌として、舞臺の前で牛肉を一切五錢で賣ることになつてゐる。それを見物が放つてくれるから、ロースが腹一杯食べられる。』

『馬鹿にして貰ひますまい。生の肉を食べたら腸に眞田蟲が湧く。』

『ハハハ……、まあ、冗談は措いて、一つ私を助けると思つて虎になつておくれでないか。』

『よろしい。まあ、ノッ〳〵やつて見ませう。』

『やつてくれる？　それは有り難う。ぢやあ、明日早速地方へ乘り込むことにしよう。』

二

金作の考へた通り、動物博覽會は非常な歡迎を受けました。表門には大きな綠門を作り、そこから綱が八方に引かれて、萬國旗や紅提灯がヒラ〳〵、ブラ〳〵風に翻つたり搖れたりしてゐます。樂隊が景氣よく、ブカ〳〵ドン〳〵囃し立てると、市の者も田舍の人達も、着飾つてゾロ〳〵這入つて來ました。

一番最初に目に附くのは、兎と豪豬、それからアラビヤ馬、狼、水牛、山羊、象、駱駝。猿が百匹ばかりキャッ〳〵と云つて騒いでゐるかと思ふと、鶴、亀、ベリカン、信天翁、大蛇、鰐、河馬、山椒魚、猩々、熊、カンガール、狐、狸などが動いたり寢そべつたりしてゐます。

だん〳〵見て行くと、綺麗に小屋掛けが出來てゐて外に『大虎』と書いてありました。中へ這入ると正面の舞臺には緞帳が下りてゐました。大勢の見物が一杯その中へ這入り切るのを待つて、ガラン〳〵と鈴が鳴るのを合圖に、辯士が現れて丁寧に一禮をした後で、さて、

『皆さん、今日はよくこそお出で下さいました。ここに御覽に入れまするのは、大虎にござります。大虎は朝鮮の國はスプル山の大藪にて生擒りましたものにございます。特に、御吹聽申し上げたいのは、この虎は不思議にも人の言葉を辨へまして、いろいろなる藝を致しまする。鐵の格子を昇れと申せば昇り口を開けろと申せば口を開け、舌を出せと申せば舌を出し、尻尾を振れと申せば尻尾を振り、こちらの言葉に從つて運動を致しますのが不思議でござります。それも、獸の悲しさ、餌物が欲しさに致しますることでござりまするから、何卒皆さんの御同情によつてロースの切り身を、虎めにお與への程をお願ひ申す次第でござります。——口上はこれにて打ち切り、いよ〳〵實物を御覽に入れます。』

かう云つて辯士はまた一禮をしながら、テーブルの上の呼鈴をリリリンと押すと、それを合圖に徐々と緞帳が卷き上げられました。

見ると、奥の鐵の格子の中に、百圓で雇はれた又兵衛さんが、虎の皮を被つて、ノッ〳〵してゐました。

『おゝ〳〵、大層な見物だ。』と又兵衛さんはノッノッ向うへ行つたりこつちへ來たりしながら、皮の中で考へました。『成程、金作が勧めた通り、俺のやうな忘け者にはいゝ仕事だ。かうしてノッ〳〵やつてゐれば百圓になるのだからな。こんな樂な商賣は外にはあるまい。』

しかし、見物はそんなことは知りませんから、

『おい、玉吉。』

『なんだ。』

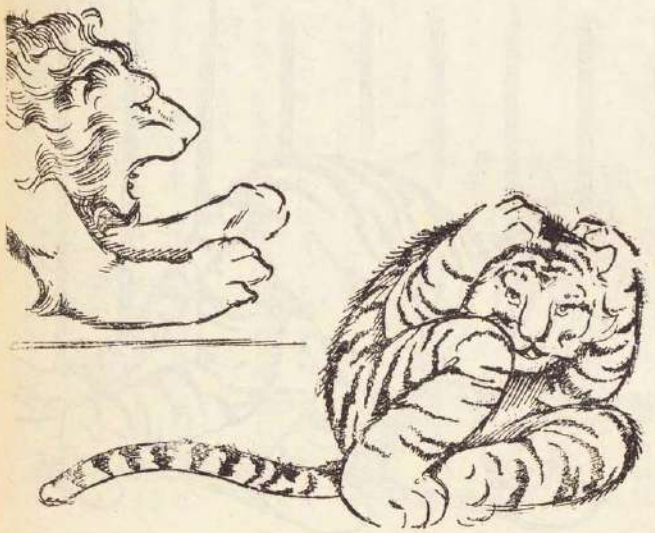
『あれ見い。虎と云ふものは強い獸と聞いてゐたが、ああやつてゐるところを見ると、カラおとなしさうぢやないか。』

『なんとなく勢が惡いな。お腹でも減つてゐるのだらう。』

『おやあ一つ、牛肉でも放つてやらうか。』

こんなことを云つて、見物はめい〳〵牛肉を買つて、十人ばかりが放つてくれました。皮の中の又兵衛さんはそれを見て、

『ああ、俺の好物だが、生では食べられない。氣



の利かない、見物共ではあるぞ。煮た奴を放つてくれればいいに。』

すると、また辯士が、

『唯ノソ〳〵してゐるばかりでは面白味が薄うござります。一つ私が言葉をかけて、藝をさせて御覽に入れませう。』

かう云ひながら、右手に短い鞭を持つて檻の傍へ寄つて、

『皆さまがお望みぢや。アーンと口をお開け。』

と云ひますと、又兵衛さんは、わざと正面を向いて大きくアーンと口を開けて見せました。

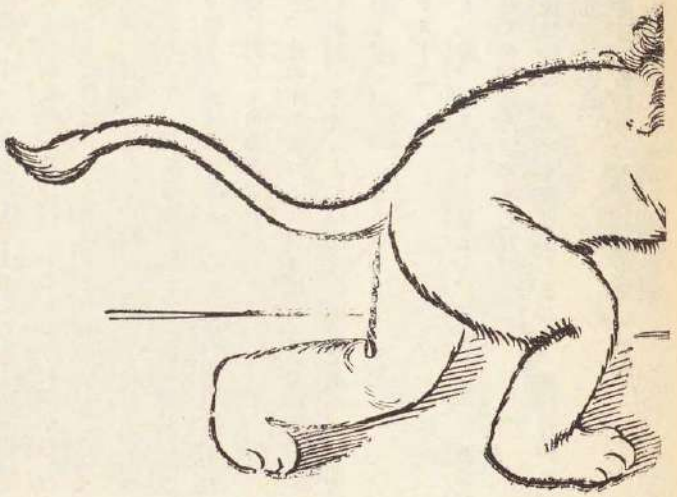
辯士は得意になて、

『この通り。』

と見物の方を向ながら、鞭で虎をさして見せました。

すると、見物は感心して、

『ナール程。』



かうして辯士は次々に一通り藝をさせて見せてしまふと、今度は一段と聲を張り上げて、

『さて、皆さん大虎ばかりではお慰みが薄うござります。虎は強いものには違ひござりません。しかしどの位強いかは誰も見た者がござりません。で、只今この檻の中へ、獸の王と云はれてをりまする獅子を一匹放つて御覽に入れます。虎と獅子との一騎打、どちらが勝つかお目とめられて御覽の程を願ひ上げます。』

すると、見物は大喜びで、

『わあ。』

と聞の聲を上げました。

驚いたのは皮の中の又兵衛さんでした。

『さあ、大變なことになつた。唯ノソ〳〵してゐれば、百圓やる。――どうも初めから話が旨過ぎると思つた。俺を百圓で雇つて獅子の餌食にするつもりだつたんだな。しかし今更そんなことを云つたつて

鐵の檻の中へ入れられてしまつてゐるもの、逃げる譯にも行かない。さうだ、いつそ獅子に譯を話して食ふことだけは許して貰はう。と云つたところで、相手は、言葉の通じない獣だ。どうしたらよからう。

――ああ〳〵、又兵衛も、三十五歳を一期として、ここで獅子に食はれてしまふのか　俺の先祖は武士だ。先祖に對して申譯がない。』

と、皮の中でボロ〳〵泣き出しました。

しかし、そんなとには遠慮なく、早檻の口が明けられて、

『ウオー。』

と一聲、叫んだかと思ふと、獅子が鬣に波を打たせて飛び込んで來ました。

虎は一堪りもなく逃げ出しました。逃げながら、又兵衛さんは、

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。』

と願へながら一心に念佛を唱へましたが、獅子は

一向平氣で飛びかかつて來ます。

見物は面白がつて、

『獅子は強いものと見えますな。あんな恐ろしい顏をしてゐる虎が、獅子にかかると、まるで猫のやうだ。あれ〳〵あんなに逃げ廻つてゐる。』

そのうちに、追ひ詰められた虎は、逃げ場を失つて檻の隅にペタ〳〵ペタと腰を拔かしてしまひました。

獅子は『ここぞ』と云はんばかりに躍り上つたかと思ふと、ガブリと虎の頭に食ひ附きました。又兵衛さんは我れを忘れて、

『助けてくれエ』

と悲鳴を上げました。

すると、不思議！〳〵、獅子から聲がして、

『虎、心配するな。俺ら百圓で屋はれて來たのだ。』

（をはり）

狸峠

（薦推）

靖井德夫

一

三百年も昔のことです。信州の山の中に『狸峠』といふ峠がありました。この峠が何故そんな名をつけられたかと云ふと、この峠に性の惡い狸がたくさん棲んでゐて、人をだまして道に迷はせたり、田圃を荒したり、大川の堤を切つたりして、村人を苦しめたからです。

この峠の附近は、一帶の田圃でした。そしてこの田圃が、何處の田圃よりも一番良いので、村では非常に大切にしてゐました。

所が、田植をしてから一ヶ月程たつた或る月夜の事でした。峠の狸がみんな出て來て、一晩の内に、田圃の苗を踏みにじつてしまつたのです。何處の田も畦が切れて水が無くなり、苗は根本から引き

拔かれて泥の中へ踏みつぶされてゐました。朝になつてこれを見つけた村の人達は、一俵の米も取れないと大騒ぎになりました。

村中の人は、腹いせの爲に鐵砲や弓や鍬などを持つて、狸峠の狸狩りをしました。併し一匹の狸も獲ることが出來ず、口惜しがりながら、ひき揚げて歸りました。

月日はだんだんとたつて、その内に秋のお祭りが來ました。が今年は田圃を狸に荒されたので、少しも米の取入れがないと言ふので、毎年賑やかであつたお祭にも、太鼓の音一つしないといふ淋しい有樣でした。

その内に、年の暮も追々と近づいて來るので、情深い庄屋の藤江門は、自分の持つてゐる澤山の米を、全部村の百姓達に分けてやりました。村の人々は心から藤江門を尊敬しました。その間にも狸峠に棲んでゐる狸は、里へ出て來ては、惡い事許りしてゐました。

それから一月程後でした。庄屋の藤江門の息子が重い病に罹りました。ほんの一寸の間に病がひどく惡くなつたので、藤江門は急いで隣村にゐる名醫の竹庵先生を呼びに行きました。藤江門が狸峠へさしかゝつた時、向うから六尺にも餘らうと思はれる大坊主がやつて來ました。そして藤江門を見ると、馴れ〳〵しくお辭儀をして、

『もし〳〵貴方は藤江門さんではありませんか。私は只今お呼びに與つて、貴方樣方へ參るのです。』と叮嚀に言ひました。藤江門は訝しなことを言ふ坊主だと思ひましたが、

『お坊樣、誰か貴僧を呼びに行きましたか』と尋ねました。するとその坊さんは、

『ハイ〳〵、唯今お宅の富助さんが來まして、宅の坊ちやんが死にましたから、すぐ來てお經を讀んで呉れと言はれたので、急いで參りました次第です』と言ふのです。

藤江門は不思議なこともあるものだと思ひましたが、或は本當に子供が死んだのではあるまいかと思つて、坊さんと二人で、一生懸命に走つて歸へりました。

藤江門が門口まで來た時、ひよいと氣が附いて見ますと、さつきの坊主は何處へ行つたか見えなくなりました。藤江門はいよ〳〵不思議だと思ひながら奥の病室へ這入つて行きました。其處には藤江門の妻が、竹庵先生の來るのを今か〳〵と待つてゐるところでした。そして子供もまだ生きてゐるのです。

藤江門は、

『誰か坊さんを呼びに行つたのか』と尋ねて見ましたが、誰も行つたと言ふ者がありませんでした。そ

こで初めて、さつきの大坊主が狸の化物であつた事が分りました。藤江門は又急いで、竹庵先生を呼びに行きました。

竹庵先生が馳せ着けた時には、子供はもう死んでゐました。竹庵先生は頭をかしげながら、『あゝ遅かつた。もゝ半時程でも早ければ、この子は助かつたのに』と言つたので、藤江門は今更ながら狸の悪戯が腹立たしく、地團駄ふんで口惜しがりました。

峠の狸はこんなにして村人を苦しめ、果ては人の命までも取るのでした。

二

藤江門の子供が死んだ翌日は、可愛い子供の葬式だと言ふので、村中の人を呼んで、御馳走をしたり、お經を讀んだりして、其の夕方には、下男の富助と眞吉とそれから下女の杉の三人を殘して、他の者は皆んな葬式に出て行きました。墓場は狸峠の二丁程手前を、東の方へそれて行くのでした。棺をかついで一同が、その分れ道まで來た時、何處から何時の間に來たのか、法衣を着た十二三の可愛らしい子坊主が出て來ました。そして藤江門の處へ來て、

『私は隣村の竹庵先生から聞いて來たものです。可愛い坊ちやんの爲にお經を讀まして戴きたう御座います』と言ひました。

藤江門はその小坊主が、狸であるとは一寸も知らず、喜んで承知しました。

狸の化た小坊主は、あたりの者を見廻して居ましたが、急に考へついた樣に、

『藤江門さん、此のお供の中に富助さんや、眞吉さんや、又お杉さんが見えないやうですが、それは死んだお坊ちやんの爲になりません。皆んなして葬つてあげますと、きつと極樂淨土へ行きますから、早く歸つて連れてお出でなさい』と言ひました。

藤江門はそれを聞いて、すぐに使ひをやつて、三人を連れて來ました。藤江門の家は皆出てしまつたので、本當のからつぽになりました。

家が全く留守になると、狸峠の狸は全部藤江門の家へやつて來ました。そして、そこにあつた御馳走をすつかり食べてしまひました。その上歸へる時には、酒藏へ行つて、酒の樽をみんな持つて行つてしまひました。

墓場では狸の化けた小坊主が長い事お經を讀んだので、みんな日が暮れてから歸つて來ました。そして取り散らかしたお座敷や、からつぽになつた酒藏を見てびつくりしてあんぐりとしてしまひました。

この惡戯も、峠の狸の仕業と分つたので、村人は全部集會所に集つて、狸退治の相談をしました。併し今迄での經驗で、どうしても狸を退治してしまふことは、むづかしくありました。

集つてゐる人の中に、勘太と云ふ鐵砲の上手な獵師がゐました。彼は百發撃てば百發的てると言ふ程上手なので村の人達は彼を『鐵砲の勘太』と呼んでゐました。勘太はこの集會の席で、きつと狸を退治しますと約束しました。

その翌日から勘太は、毎日々々狸峠へ出て行きました。そして糞ぐろを作つて其の中に隱れて、待つてゐました。しかし狸は一匹も出て來ません。たまに出て來たかと思ふと、岩の蔭から糞ぐろへ石を投げては逃げて行きました。どうしても鐵砲では撃てないと知つた勘太は、フトよい事を考へ付きました。そしてすぐ樣、狸の親分と仲直りをしました。

勘太はその狸の親分に、

『今晩仲直りのために、家で御馳走をこしらへて待つてゐますから、お前さん達の仲間をみんな連れて來てくれ』と言ひました。

狸の親分は大層喜んで承知しました。そこで勘太は急いで家に歸り、酒を買つたり味噌を買つたりして、たくさん御馳走をこしらへました。

それからすぐに庄屋の藤江門の家へ行つて、一番

大きな蚊帳を借りて來ました。そして、その蚊帳の裾へたくさんの穴をあけて、その穴へ強い綱を通しました。その綱を引き絞めると、恰度信玄袋の口のやうに、蚊帳の口が絞れるやうにしました。そして夜の來るのを待つてゐました。

やがて山寺の鐘が、ゴーン〳〵と鳴つて日が暮れました。すると勘太の家の裏口から、のそり〳〵と親狸や子狸が三四十匹も入つて來ました。御馳走の香がプーンとするので、狸達はよだれを垂して、物待ち顔で座敷へ上つて並びました。勘太は心の中では非常に喜んで、狸の親分に何匹來たかと問ひました。親分狸は嬉しさうな顔をしながら、

『一匹も殘らず連れて來たので、皆で四十二匹ゐる』

と言ひました。其の内に、勘太の出した御馳走を見てみんな喜んで騒ぎ出しました。酒を飲んで踊る奴もあれば、腹鼓ポンポコ〳〵と打つて歌ふ奴もありました。

この時餘りの騒ぎに、勘太の内の獨犬が狸の來てゐる事を嗅ぎつけて、ワン〳〵と吠え出しました。犬の聲に驚いた狸達は、一時に騒ぎを止めて震へ出しました。そこで勘太は親分の狸に、

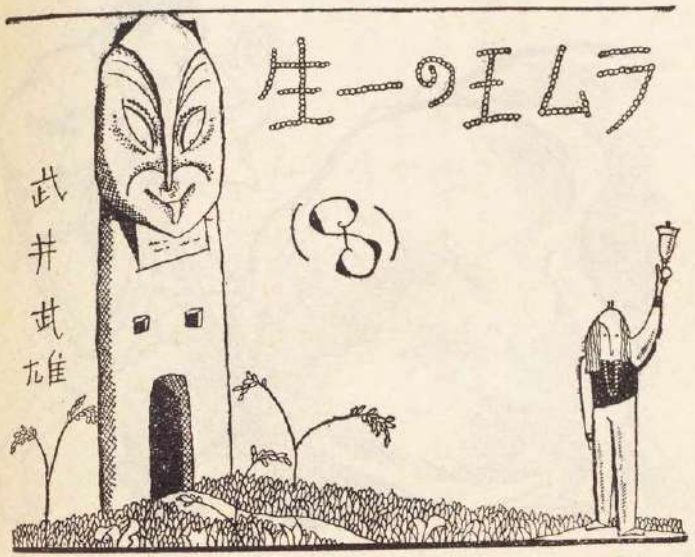
『あれは犬がお前さん達のにほひを嗅いで吠えてゐるのだから、これから蚊帳を吊つてあげるから、その中へ這入りなさい。さうすれば、にほひが蚊帳の外へ出ないから大丈夫だ』と言ひながら、仕掛のしてある、大きな蚊帳を吊りました。狸達は大喜びでみんな帳蚊の中へ這入りました。すると、勘太の言ふ通り犬は吠えないやうになりました。かうなると狸達は又もやポンポコ〳〵腹鼓を打つて騒ぎ出すのでした。やがて東の空が白々と白らむ頃になりました。今迄の酔が一時に廻り、四十二匹の親狸子狸は全部大鼾をかいて、蚊帳の中で寝てしまひました。

この時、恰度好い時だと思つて勘太は蚊帳の吊り手を切り落して、信玄袋の口のやうになつてゐる蚊帳の綱を、グーイと引き絞ばつてしまひました。これで狸峠に棲んでゐた性の惡い四十二匹の狸は、全部蚊帳袋の中へ這入つたのです。

蚊帳の中ではそんな事とは露知らず、四十二匹の狸が四十二色の夢を見て、樂しんでゐました。勘太は大喜びで、その狸を曳き摺つて、庄屋の藤江門の家へ行きました。

藤江門は勘太の手際を非常に褒めました。やがて村の人も集つて來て、今まで惡い事ばかりしてゐた狸が、全部生捕りになつたと言ふので、雀躍りして喜びました。

四十二匹の狸が目を醒した時には、一匹づゝ丈夫な箱へ入れられてゐました。もうどうする事も出來ませんでした。それからと言ふものは、一寸も狸の惡戯が無くなつたので、村は平和になりました。鐵砲の勘太と偉名を取つた勘太は、こんどは『蚊帳の勘太』と呼ばれるやうになりました。(をはり)



御殿の煙突掃除人のヘボンといふ男は、パンは食べないでも釣りがしてゐたい、といふ先生なのですから、今日御殿の寶物の黒燿石の釣針が拜借出來た、といふので、まづ米搗虫のやうに三度ばかり飛上つて悦びました。それからすぐに白ペンキで塗つた小舟を浮べて、あちらこちらと釣つてあるいてゐたところが、どうしたはずみか、とんでもない綺麗な鱗をもつたお魚がひつかゝつて來たので、喜ぶまいことか眼なんぞ無い樣な顏をして、

『虹色の魚てえやつは福運の向くしるしだんべえ。』

と云つてお天道樣に手を合せました。

ヘボンは早速その魚を持ちかへつて、おかみさんにも見せてやりました。今夜食べようか、いやもつたいない、と押問答の末、結局死んで腐らせて棄てしまつたら尙一層もつたいないぢやないかといふことになつて、ヘットで燒いて食べることにきめ、そのまゝシチュウ鍋の中へ入れておきました。

ラム王は鍋の中で考へました。『黒燿石の釣針を呑んで生れ甲斐がわかるといふ、生れ甲斐とは卽ち、煙突掃除人に食はれることか。』と。グヅ〳〵しては居られないと思つたので、かまどに火がたきつけられない內にラム王の妻にかへつてつつ立ち上りました。すると丁度シチユー鍋を靴にはいて、鍋蓋を帽子に被つた樣な妻になりました。そこへ、今小便からヒヨツコリと歸つて來たヘボンがこれを見て、いきなりウヘエ：：と云ひながら、後向きになつてゐたおかみさんにしがみついてしまひました。

ヘボンはたちまち氣をとり直して、

『ヤイヤイ、この鹽鮭め、なんでそんなにふん伸びやがるんだ。』

と、怒鳴りはじめました。

『ワイワイ云ふな、俺はラム王だから、夕飯のおかずにはちつともつたいないぞ。』

と云ひますと、ヘボンは、

『よしよし、そまつにはしない。』

といひながら、鋏を持つて來てラム王の髮をチヨキ〳〵切り落して、足には重い重い、軍艦につける樣な鎖をしばりつけてしまひました。これは奴隸にされたしるしです。

ヘボンはニコ〳〵して云ひました。

『女王樣が千人からの奴隸を使つておいでになるからには、俺的だつて一匹位は飼つておいても罰は當るめえ。エヘン。』

それから地下室の雜巾やバケツの置いてある隅つこへ寢かされました。ラム王は、生き甲斐とはこのことかい、と思ひました。獨りになると、顎にひつかゝつてゐる黒燿石の釣針を、漸くのことでこつそりとはづして見ました。釣針は一寸四分位の象牙の板に纏つてゐました。それをよくよく見ると、蟻の足で書いた樣な細かい文字がありました。

▲神樣のゐらつしやる所、番地、

まづかういふみだしがあつて、
たとへば、花の雌蕊と雄蕊との根元を割つてごらんなさい。
そこにゐらつしやらなかつたら虫眼鏡でのぞいてごらんなさい。のぞくことが拜むことです。
はゝア、學問でいろ〳〵の不思議を調べる事だな、と思ひました。
美しいものや感じたものがあつたならしるしてごらんなさい。
それを作ることも拜むことです。
繪をかいたり、歌を作つたりしても神樣に近づけるといふわけかしら、と思ひました。
又えらい聖人の數へに手を合せてゐると、いつかお姿が見えるかもしれない。
これで板の兩面がおしまひになりました。ラム王は、だが、いつか何の智慧もない獸の世界に神樣の遊んでゐらつしやるのを見たが、あすこのとこは落してゐるなと思ひました。けれど處の名前や、番地はさつぱり書いてありませんでした。

それからラム王は、毎日毎日ヘボンの身代りに煙突掃除をさせられました。どうせ掃除人のその又奴隷ときてゐるから、女王樣のお顏や、大臣の姿は一と目だつて見ることは出來ませんでした。

そのうちにヘボンは、ラム王が變身の術を心得てゐることを知つて大變に重寶がり、ある時はステッキにして、散歩にゴツ〳〵ついて歩いたり、月琴にして夜中ペンペコ鳴らして居たり、又ある時は、おかみさんの腕環にしたりしましたが、その外のときはいつも重い鎖で足をつないでおきました。

ところがこゝにある日のこと、ヘボンは女王樣の前へさし上げる琥珀の盃を、一寸欠伸が大きすぎたため、ふと石疊の上へ落して割つてしまひましたので、

『サアサアサア、今夜の御宴には一體どうしたもんだんべえ。勿論俺の首は無いものにはきまつてゐるが、サテそれから先が心配だ。首が無くなつたら一體どうしたもんだんべえ。どこも見えなくなつたら一體どうしたもんだんべえ。』

と、それからそれへひどく心配して、まるで腐つた魚の樣な顏をして、ふさぎ込んでゐました。するとおかみさんが、

『お前さんもよつぽど間抜けね。こんな時にこそラム王をちよいと使つておけばいゝぢやないか？』

と、うまい智慧を授けてくれたので、

『おつと、その通りその通り、なぜもう少し早く氣がついてくれなかつたんだい。』

と、又例の米搗虫の樣に、ヘボンは三べんばかり飛上つて悅びました。

その晩、美しい宴會の卓の上の、リラの花のかげに、女王樣の胸を見上げて、盃の形をしたラム王はチョコンと置かれてありました。やがて女王陛下の萬歲が唱へられましたので、女王樣はしづかに盃をとつてそつと唇をおふれになりました。

ところが、ところが、唾は變身の魔法を解く唯一の妙藥です……皆さんも、もし机の上の何かゝ化けてゐると思つた時は、そつとなめてごらんなさい。それで形が變らなかつたら大丈夫、といふ位のものです。……盃はたちまちラム王の姿になつて、女王樣の白魚の樣なお指から、滑り落ちてしまひました。この不思議の上に、不思議はもう一つ重なつて起りました。二人は思はず、呀!!! と叫んだまゝつつ立つてしまひました。

女王樣はその昔、ラム王の妃となつたギニビヤであつたのです。

* * *

かつては自分が王として君臨したこの城で、今、煙突掃除人の奴隷にならうとは……只うたたねの夢を手がかりに、一生の旅に出たラム王は、この夢の樣なはかない身の上に出喰はしたのも、又理の當然だと思ひました。けれど、そのはかない身の上も、

すぐにこの不可思議な邂逅によつて、これも亦夢の樣に速やかに逆になりました。ギニビヤは氣も狂ふばかりによろこんで、

『お、陛下、お待ち申して居りました。』

と云ひながら、跪いてラム王の膝にすがりました。ラム王もこの城に黑燿石の釣針があつたのなら、なにも仲のいいギニビヤをわざ〳〵すてゝ、夜逃げをしなくてもよかつたものを、と思ひました。

一方ヘボンはこの有樣を見て、いよ〳〵びつくりしてしまひ、腰を拔かしてしやちこばつたまゝ、通る人を見るたびに、

『俺の首はつながつてゐるかい?
俺の首はつながつてゐるかい……』

と、囈言を云つてゐました。

ラム王は誕生の時、窓から降つて來た六枚のカードの占ひの通り・五たびの王と一たびの奴隷とになりました。ラム王とギニビヤとは、長く長く、この國のあるじとして平和に暮したのであります。

けれど二人の間には、一人の王子も又王女もありませんでした。お妃のギニビヤは、隨分長生きをしておかくれになりました。すると間もなくラム王の姿が、どこかへフラリと見えなくなつてしまひました。家來たちは手分けをして毎日毎日、鉦や太鼓をたゝいて、

『ラム王樣、ラム王樣、もう一度お光りを見せて下さい。』

と、呼びながら國中を探し廻りました。もしや變身の術でお姿をかへてゐらつしやるのではないかと、しまひには木の幹や石ころや、人の家の壁などを無闇矢鱈となめて廻りました。

この國の北の方に、頭に妙な顔付をした人の首を彫付けてある木の塔があります。この塔のことをみんなは『無言の人』と呼んでゐました。

ある日のこと、それの咽喉のところにラム王の遺書が書付けられてあつたのを發見しましたので、『無言の人』をすつかりこはして見たが中には蟋蟀一匹居ませんでした。それつきり、ラム王の姿を見たといふ人は、この廣い世界中にたつた一人もありませんでした。ラム王の遺書といふものは、極めて簡單なものであります。

1894年、六月二十五日、日本の國の山の中の、小さな潮のはたに生れ變るまで、私の行方を探してくれるな。

ラム王

＊　＊　＊

これでまづ、長い間讀んで戴いたラム王の一生も全くおしまひになりました。

ラム王の一生といふものは、只不思議であつたといふだけで、世の中に別段何の教訓も遺したとは思はれません。もしもこの上までラム王の續きが知りたいなら、その日本の國へ生れ變つた人を探し出すより外ありません。

ところが、生年月日といひ、場所柄といひ、そつくり符合してゐるところをみると、或ひは私ではないかと思ふのでありますが、しかしこれは、外にもこんな日にこんな場所で生れた人が無いとは限りません。

ですけれど、てつきり私だ、と云ひ切つてもいゝ樣な證據が、只一つこゝにあります。

それは歴史にも出てゐないラム王の事蹟を、私一人が、こんなにくはしく知つてゐるからであります。

（をはり）

お月さま（推薦）

佐藤よしみ

おうお　お月さま
北山で
雁がはぐれて
ゐないとよ

おうお　お月さま
昨日から
芒の穂のよに
お細りぢや

幼年詩

若山牧水選

スイッチヨン（賞）

千葉縣八榮第一校尋六　野溜　眞一

スイッチヨン
スイッチヨン
私の植木さ
とまつた。
スイッチヨン
スイッチヨン
赤い西瓜を
あげやうか。

評「赤い西瓜をあげようか」がたいへんいゝ。

こよりのおうま（賞）

岩手縣師範學校府屬校尋五　川村　花子

にいちやんのつくつた
こよりのおうま
心もないのに
頭をたれて
何かしらぬが
かんがへてゐる

評　もとのこよりになりたいなァと考へてる。

十五夜（賞）

東京府荏原郡目黒町下目黒　伊藤　駿二（十四歳）

十五夜さんで
あかるいな
お池であめんぼが
光つてる

評　あめんぼきれいに見えまする。

月

青森縣八戸町大字町組　和泉じゆん（十六歳）

家で見た月よりも
芋畑にきて見た
月の方が
大きく見えるやうだ

評　まったくさうだ。

お祭よ

熊本縣阿蘇郡宮地町風木　渡邊　徹之（十四歳）

おまつりよ
試驗がすんだら
すぐお出で
しけんなかばに
くるといかん

評　そんなに云ふと直ぐ行きますよ。

小さな草

山梨縣大月廣里東校尋四　羽田　琴

小さなもち草
めを出した
山ぶきゆら〳〵
ゆれてゐる
小さなふきにありがゐる

評　きれいなこまかな繪です。

いなご

鰐島縣喜多方町釜物町　高畑　襄（十四歳）

いなご〳〵
いたづらしないから
おれの手に
ちよつと
とまれ

評　いゝや、とまらない。

おちいさん

名古屋市中區永樂田一七　吉田敬一郎（十一歳）

こつくり〳〵と
別莊のおちいさん
眠つてる
ほんとにおちいさんは
眠りすき

隅田川

東京市淺草區石濱校尋六　岡崎　文二

隅田川は
きれいだな
お月さまが
ながれてる

電氣が來ない

埼玉縣入間郡山根校尋六　坂本　好造

電氣が來ないよ
どうしよう
母さんらんぷを
つけようか
らんぷをさがせば
どみだらけ
それなららふそく
つけようか
つければ風で消えさうだ
電氣が來ないよ
電氣が來ないよ

かな〳〵蟬

埼玉縣入間郡山根校尋六　坂本　好造

かな〳〵蟬が
なきました
暑い夕日が
おちるころ
そよ〳〵小風の
ふくとこで
かな〳〵蟬が
なきました

稻

香川縣木田郡水田校尋六　小賀　常榮

どこを見ても稻ばかり
土地は一つも見えないで
向うのはしまで
青だたみ

輕業師

靜岡縣富士郡貴船校尋六　岡田　文司

おつとあぶない
輕業師
はしごの上から
落つこちさうだぞ
く　も
お日樣西にしづむ時
くもが一人で
あみかけた
毎日僕が
ぬすんでも
それでも
かまはず
あみかけ

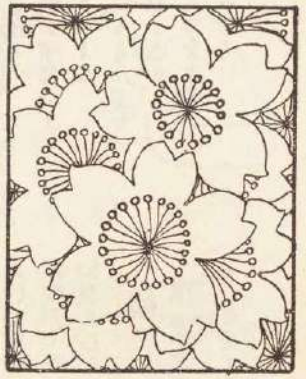
はんもつく

埼玉縣入間郡山根校尋六　鎌北元太郎

昨日父さん
買つて來た
大きな大きな
はんもつく
今日はざしきに
つるされて
坊やがすやすや
ねむつてる

万八物語

西川喜平



昔、ある所に、万八といふ男がゐました。怠け者で、稼ぐのが嫌ひで、それに山氣があつて、慾が深いといふ、世間でも評判の惡い男でした。

ところがその隣りに、千六といふ、これは又正直者で、働くのが大好きといふ、心掛けのよい男が住んでゐました。この二人は隣り同士のことですから仲好くつき合つてゐましたが、万八はいつも心の中で、千六が世間に評判のよいのを嫉んでゐました。

ある時千六は、櫻の實を食べたところが、うつかりして種を呑み込んでしまひました。それを心配してゐます内に、いつか頭の眞ん中へ櫻の芽が出て來たのです。千六は暢氣な男ですから、

『折角生えたものだ。棄てるのも惜しい。』と、そのまゝにして置きますと、だん〳〵その芽が伸びてとう〳〵、大木になつてしまひました。千六も、かうなつては、稼ぎにも出られないので、困つてしまひました。

喜んだのは、万八です。

『千六奴、いくら稼ぎたくても、商賣にも出られまい、いゝ氣味いゝ氣味。』と喜びました。

やがて春になりますと、千六の頭の木は、枝一面に花をつけて、それは〳〵美しい櫻になりました。はじめは近所の人が、見物ばかりでしたが、頭の櫻が評判になつて、遠方からも毎日々々大層な人出がして、しまひには大勢の遊山客が、櫻の根本へ幕などを張り廻はして、お酒や辨當を持ち込んで、三味線や太鼓ではやし立てて、唄つたり、踊つたりして、いい花見場所になりました。それで誰いふとなく『あたま山の櫻』と名をつけて、見物人が押返へされぬやうに、集つて來ました。

そこで、最初は迷惑に思つた千六も、櫻のおかげで、澤山のお金が取れて大儲をしました。ところでこれを見て、口惜しくて堪らないのは万八です。いい氣味と笑つてゐた千六が、大金儲をしたのですから、羨しいのが、しまひには憎らしくなつて、とうとう惡い心を起しました。

ある晩、万八はそつと千六の家へ忍び込んで行きました。そして、晝の疲れでぐつすり寝込んでゐる千六のところへ行つて、頭の櫻をぐいと根元から引き抜いて、自分の家の庭へ持つて歸りました。

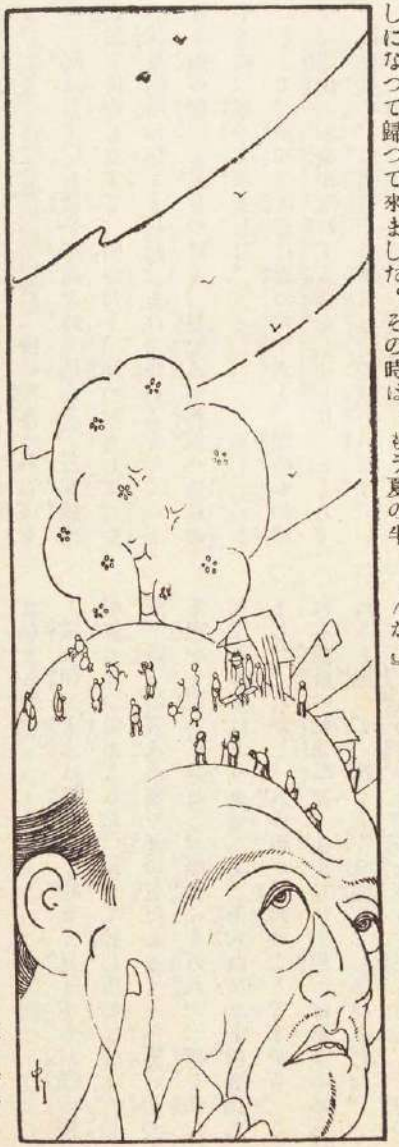
それからびし〳〵枝を折つて、殘らず薪にしてしまひました。

翌る朝、千六は何氣なく起きて見ますと、頭の櫻が無くなつてゐました。驚いて探してゐますと、恰度、隣りの万八の家で斧の音がします。不審に思つて窓から覗いて見ると、無慘にも万八が、櫻を薪にしてゐるではありませんか。千六はワッと泣き出しました。しかし、人の善い千六のことですから、これも前世の約束事だ、生えないと思へばあきらめられると思つて、泣く〳〵我慢してしまひました。

さて万八の方では、千六がさぞ怒るだらうと思つたのに惡い顏もしないので、却つて自分の方がキマリわるくなつて、その後は毎日顏を合せるのも氣が咎めて仕方がないので、その薪を賣つたお金を持つ

て遊出の旅に出てしまひました。

万八はお金のあるにまかせ、方々遊び廻つてゐましたが、その中お金を殘らず遣つてしまひ、一文無しになつて歸つて來ました。その時は、もう夏の半



と、聞いて見ました。

『あたまが池へ涼みに參ります。』

『へー、あたまが池とは、神田の名所ではありませんか。』

『ナニ、今度出來たあたまが池で、いゝ涼み場所です。お見受けするのに、あなたは旅の方らしいが、話しの種に行つて御覽なさい。』

さういはれたものですから万八も、そろ〳〵行くでした。だん〳〵自分の家の近くへ來ますと、往來が大層な人出で、美しく着飾つた男や女が、そろそろと行くので、

『モシ〳〵何かお祭りでもありますか。』

人の後について行くと、驚ろきました。千六の頭の櫻を拔いた跡へ、清水が湧き出して、漫々とした大きな池になつてゐるのです。池の廻りには、掛茶屋がずらりと出來てゐて軒の提灯も華やかに、涼みの客が一ぱい入つてゐます。池の中には、家形舟、家根舟、傳馬、荷足り、猪牙舟などが、澤山の客を乘せて漕ぎ巡つてゐます。花火舟からシユウ、ポンポンと花火が揚るたんびに、

『玉や――、かぎや――』と叫んで、陸でも舟でも大變な騒ぎです。それを見た万八は『アーア』と溜め息をつきました。

『千六を困らしてやらうと思つて櫻を拔いたのに、己の方は、今では、元の杢阿彌の一文無しになつてしまひ、拔かれた千六は、またこの通りの金まうけをしてゐる。天運の強い者にはかなはない。道に外れた事は出來ないものだ。今更千六や近所の人達に合はす顏もない。』

と、根が惡人でない万八ですから、後悔すると、もう堪らなくなつて、下駄を拭ぐとそのまゝ、

『南無阿彌陀佛』と一ト聲唱へて、あたまが池へ飛び込まうとしました。この有樣を見た四邊の人は驚いて、大勢して万八を抑へました。

『オット待つた〳〵。不了簡を出してはいけない。』

『どうか放して下さい。』

『馬鹿なことを言ふな……おや、お前は万八さんぢやないか。』

『面目次第もございません。』

『お前はまた千六さんの邪魔をしようとするのか。お前が飛び込んで見ろ。千六さんが、どんなに迷惑するか知れないぢやないか。』

言はれて見ると、なる程その通りです。この池へ身を投げたら、此上にも罪を重ねるわけになると、万八は思ひ止つて、千六にこれまでの心得違ひをあやまりました。

千六も近所の人も、改心した万八を見て喜びました。

『さて万八さん、お前さんも心を入れ替へて眞面目に働らく氣になつたのなら、これから三十里程、東の方の山奥に、運を授けて下さる偉い仙人がおいでになるさうだから、これからすぐにお願ひに行つてはどうだ。』

と、親切にいつてくれる老人がありました。万八もその氣になつて、その時の旅支度をそのまゝに、出立することになりました。

何日かの日數を過ぎて行きますと、教へられた通り、何んとなく神々しい山の中に、一つのお堂がありました。そして、そのお堂の中に、白い髪の仙人らしい人が坐つてゐましたので、万八はさつそくその人の前へ行つて、恐る〳〵

『少々お伺ひをいたします。もしやあなた樣が運をお授け下さる仙人樣ではございませんか。』と、尋ねました。

『おゝ、万八か、待つてゐたぞ。お前の望む運も、死ぬ決心さへすれば取れぬことはない。しかしお前にその修行が出來るか。』

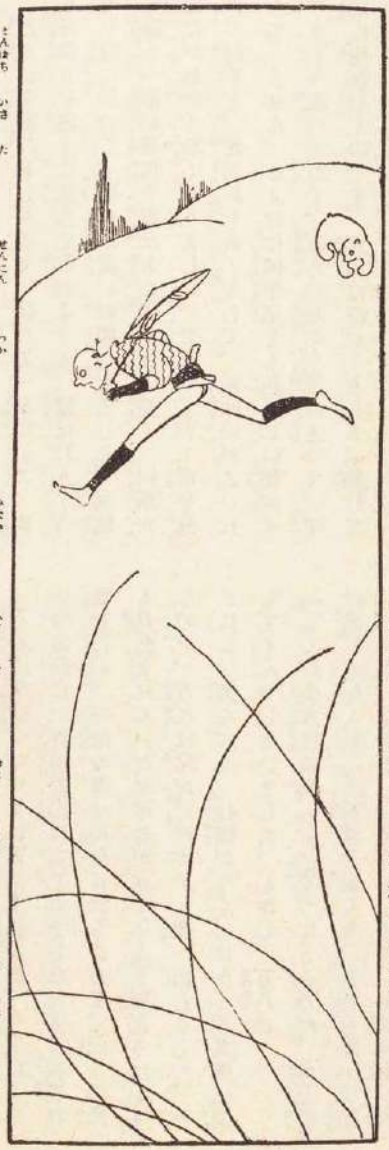
万八は仙人が、自分の來ることを前から知つてゐたので、いよ〳〵驚きました。

『もうどんな修行でも、一生懸命にいたしますからどうぞ運をお授け下さいまし。』

『それなら、今わしの言ふことをよく聽きなさい。』

そこで仙人は、万八に向つて、人間は正直にさへ働けば、自然に福運を授ること、又はやく幸福を得たければ、難行苦行をしなければならないことなど丁寧に說いて聞かせました。仙人の尊い言葉で、万八も、目が覺めたやうな氣になつて、難行苦行の決心を決めました。そこで、仙人は

『これから、南の方へ向つて進んで行きなさい。そこでどんな怖いこと、恐ろしいことに出會つても、一足も後へ戻つてはならぬぞよ。いよ〳〵となつたらば、命を投げ出して、運を天にまかす心で行けば、幸福を授ることが出來るぞよ。』と、親切にさとしました。



万八は勇み立つて、仙人にお別れをいつて、南の方を指して出立しました。

万八はだん〳〵山路を奥深く行きました。すると道が嶮しくなつて、左右は熊笹が生ひ繁り、もう日暮れに近いので、四邊もだん〳〵暗くなり、空には夕月が淋しくかゝつてゐました。何か出はしないかしらと、萬八は尙もびく〳〵しながら行きますと、五六間向うでガサ〳〵と音がしました。

出て來たのは大きな熊でした。熊は大きな口をあいて、万八の方へ向つて來るのです。万八は思はず地の上に坐つてしまひました。

『熊さま〳〵、私は仙人樣のお言葉に從つて福をい

たゞきに參る者です。どうぞ命ばかりはお助け〳〵』と泣き聲を出して、ヒヨコ〳〵お辭儀をして、頭を上げて見ると、いつの間にか、熊はゐなくなつてゐました。

万八は命拾ひをしたので、ほつと一息ついて、尙も月明りを便りに進んで行きますと、道はだん〳〵下り坂になつて、いつか廣い野原へ出ました。見渡す限り一面の草原で草は人の丈けより高く、何所が通だかわからなくなりました。でもやう〳〵草を分けて行くと、足元がじめ〳〵して、氣味のわるいたらありません。おまけに何千疋とも知れない蛇がニヨロ〳〵這つてゐて、万八の足から這ひ上つて、手足に捲きつくのです。万八はびつくりして、『助けてくれ、助けてくれ。』と呶鳴りました。しかし、答へるものもなく、たゞ、草原に吹く風ばかりです。

その時、蛇はだん〳〵首まで捲きついて來るので万八はもう生きた心地はなく、

『南無妙法蓮陀佛、オンガボキヤーベイロシヤノマカモダラ、拂ひ給へ淨め給へ。』と夢中になつて、驅け出しました。そして、十町餘りも來たかと思ふとやうやく、蛇もゐなくなりました。

万八は生返つたやうに喜びましたが、今度はまたいつの間にか谷川の岸に來てゐました。もう夜明け頃らしく、一面の霧は川面に立ちこめて、向うの岸も見えません。たゞ水音がゴー〳〵と聞えるばかりなので、万八は足が、ワナ〳〵慄へ出しました。行くにも、歸るにも、仕樣がなく、たうとう其處へ立ちすくんでしまひました。しかし、万八は

『こゝが仙人樣の仰つしやつたところだ。命を投げ出してかゝれ』と勇氣を出して、衣物を脱いで頭の上へ縛りつけました。そしてソロ〳〵水の中へ入つて行くと、底は意外に淺いが、流れの激しいつたらありません。何度も足をすくはれさうになるので、踏みしめ、踏みしめ行くうちに、岩苔につるりとつて、あつと言ふ間もなく、万八は水勢にどんどん押し流され、どつと瀧壺へ落されてしまひました。それからぐる〳〵渦に卷かれて、浮いたり沈んだり、やうやくにして二三丁の川下へ浮き上ると一つの岩角へ縋りつくことが出來ました。

万八は水を澤山に呑み、身體は綿のやうに疲れて、ぐた〳〵になりましたが、一生懸命に氣を張つて、淺瀨を渡り、崖の藤蔓や、草の根に取りついてやつと岸に上りました。しかし衣物は流されてしまひ、眞ッ裸で、その寒さは耐へられないほどでしたが、ほかに着る物もないので、仕樣なく、ブル〳〵顫へながら、道の無い所を、木の根や岩角に取りつきながら行きますと、又下は何丈とも底の知れぬ谷の崖端へ出でしまひました。

さア。もう道はなし、と言つて、後へ一足でも戻れば、今までの命がけの難行苦行も水の泡になるのです。折角仙人に願つた福も取れず、と言つて、これより先きは飛んで下りるより外に方法もないので、万八はぢうと考へてゐましたが、何でも運は天にまかせだと、やうや〳〵決心して、木の枝から枝を傳つて、崖を下へ下へと降りて行きました。そのうちにぶら下つた木の枝がポッキリ折れてしまつたから堪りません。ドーンと、底知れない谷へ落ちてしまひました。

万八はしばらくの間、死んだやうになつて、夢中でゐました。と、頭の上で

『善哉々々、汝万八。難行苦行の功により、只今福を取らするぞ。』

と、清らかなお聲が耳に入りました。万八はハッと飛び起きて見ますと、雲の中に福錄壽のお姿が、アリ〳〵と見えて、万八の前には、澤山のお金や、數數の寶物が、山のやうに積まれてありました。

万八はどんなに喜んだでせう。

（をはり）

蕈になつた坊さん

片平喜一郎

昔、支那の國に惠洪といふお坊さんがありました。

このお坊さんは、たいへん潔白な人でありましたから、生れてからこのかた、嘘を言つて、人を邪道におとし入れたり、道でない邪惡な行ひをして、人に迷惑をかけたりするやうな、心に恥ぢる行ひは、一度だつて、したことがありませんでした。が、しかし、人々の爲めになるやうな、慈悲深い行ひをしたことも、一度だつてありませんでした。

惠洪坊さんは、毎日々々、圍爐裏の傍に横になつたまゝ、お經も讀まず、念佛を唱へることなく、こくり〳〵と居眠りをして、のんきに暮してゐました。ですから、そのうちにだん〳〵と生活が苦しくなつて來て、いろ〳〵の家財道具を賣つたりして、やつと、命をつないでゐるやうな有樣でした。

しかし惠洪坊さんは、どんなに生活が貧しくなつても、けつしてそれを嘆いたり、悲しんだりするやうなことがありませんでした。

『今に、佛樣が、お惠みを與へて下さることだらう。』と、心の中でそんなことを考へながら、毎日居眠りをして、果報の來るのを待つて居りました。

ところが或る日のこと、いよ〳〵惠洪坊さんにとつて、この上もない幸ひなことが起つて來ました。

それと云ふのは、この邊でも名高いお金持ちの汪朝議といふ人が、わざ〳〵この荒れさびれた、惠洪坊さんの家を訪ねて來たことです

汪さんは、惠洪坊さんに會ふと恐れ多い方を拜むやうに、地べたに坐つて額を土にすりつけるやうにして、惠洪坊さんを拜んで言ひました。

『これは〳〵、惠洪樣でございますか　私は汪朝議と云ふものです。今日お伺ひ申しましたのは、誠に恐れ多い次第ではございますが、惠洪樣にお願ひがあつて參りました。』と汪さんは、三拜九拜して言ひました。

惠洪坊さんは、この有樣を見てすつかり驚いて了つて、暫く呆然としてゐましたが、ひよいと、

『これはうまい事だ。汪さんと云へば有名なお金持ちだ。俺にもいよ〳〵いゝ運が廻つて來たのだぞ。』

と思つて、にこ〳〵笑ひながら、

『で、そのお願ひと申すのは何ですか？』と、かしこまつてゐる汪さんにたづねました。

『いや、外のことでもございませんが、實は、この度、私の亡つた祖父の靈魂を弔ふため、墳庵を建てたのでございます。そこで私達一家族が、相談に相談をかさねた結果、誠に恐れ多い次第では御座いますが、惠洪樣にお願ひ申して、その墳庵の御住持になつて戴きたいと思ひまして、お願ひに上つた

わけでございます。どうか、お聞き入れの程をお願ひ申します。』と汪さんは、尙も三拜九拜して、惠洪坊さんに賴みました。

これを聞くと、惠洪坊さんは、心の中で『これはうまい。汪さんの願ひを聞いてやれば俺もこれから貧乏する心配はないぞ。』と思ひましたから、前よりも一そうにこ〳〵笑つて、

『これは、忝ない。それではこれから參つて、亡くなられた祖父樣の靈魂をお弔ひ致すことにいたしませう。』と、さも勿體ぶつて言ひました。

汪さんは、その言葉を聞くと大層喜んで、

『有難うございます。さあ、下僕ども、急いで仕度を致せ。』と言つて、お供の者達に命じて、用意してきた立派な乘物に、惠洪坊さんを乘せて、早速、墳庵へ連れて行きました。

汪さんの家の人達は、さあ、尊い惠洪樣のお越しだと云つて、上を下への大喜びで、その日は一日中惠洪坊さんを迎へる祝ひの酒宴で、夜になるまで大騒ぎでありました。

さて、いよ〳〵お金持ちの汪さんの家の墳庵の住職となつた惠洪坊さんは、今までの貧乏な暮しかたとは比べにもならないほどの、贅澤な暮しかたで、毎日美味しいものを食たり、上等なお茶で上等なお菓子をほゝばつたり、時には匂ひのいゝお香を焚いては、氣持ちのいゝ夢心地で居眠りをすることが出來るやうになりました。ですから、すつかり、ほくほくもので、これまで、讀んだこともないお經を日に何べんとなく讀んだり、時でもない時に念佛を唱へたりして、それは〳〵眞面目なお勤めぶりでありました。

が、しかし、それもちよつとの間だけで、惠洪坊さんは贅澤な暮しはして居るものの、毎日お經を讀んだり念佛ゞ唱へたりして、心にもない眞面目な忙しい日を送ることが、だん〳〵と厭になつて來ました。矢張り、なんにもしないで、團欒裏の傍に横になつて、居眠りをしてゐるのが一番いゝと思ひ出したのでした。さう思ふと惠洪坊さんは、もう南無阿彌陀佛の南無も云ひたくなくなつて、毎日居眠りばかりして暮しました。

けれども惠洪坊さんはこれと云つて惡いことをするのではありませんから、過を仕出かすやうなこともありませんので、汪さんの家ではみんな喜んで惠洪坊さんのしたいまゝにさして、安心して居りました。

それからと云ふもの、惠洪坊さんは、毎日何一つしないで、居眠りばかりしてうか〳〵と二十年もの長い間、居眠りの生活を續けて居りましたが、ある時、ふとしたことから病氣になつて、とう〳〵この世から暇を告げなければならないことになりました。

惠洪坊さんは、死ぬ前に汪さんに向つて、

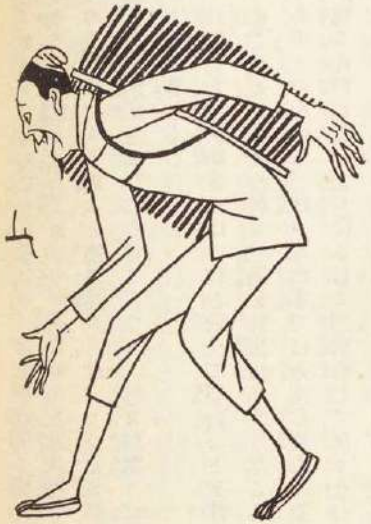
『汪さん！　とう〳〵私もこの世から去らなければなりません。長らくお世話になつて、それに何一つあなたの爲めになるやうな事もせず、申譯けがありません。これからあの世へ行つて、正しいお裁きをうけなければなりません。』と言ひ終ると、すぐ眠るやうに死んで了ひました。

汪さんは、惠洪坊さんが死んで了つたのでたいへん力を落し、またたいそう氣の毒に思ひましたので、澤山のお金をかけて、立派にお弔ひを致しました。そして、自分の家の山の麓の、大きな楮の木の下に惠洪坊さんの死體を葬りました。

それから、二ヶ月程經つてからのことでした。不思議なことには、惠洪坊さんを葬つたところの楮の木が、俄かに枯れて了つて、木の葉一つなくなつて了ひました。そして、それからは毎日、雨が降り續いて氣がめいりさうな日が續きましたので、汪さんの家のものは、『これは、何かのお知せかもしれぬ。』

と云つて、みんな不思議に思つて居りました。

ところが、長い間降り續いた雨がやつとやんだ、或る日のこと、汪さんの下僕のものが、野原に牛を曳いて行つて、草を食べさせて、歸り途にふと楮の木の下を通り過ぎました。すると、その時、何處からともなく、ぷん〳〵といゝ匂ひがして來るではありませんか。不審に思つて、その匂ひのする方を注



意して見ると、どうでせう、楮の木の根下に、大きな白い蕈が、澤山ぴか〳〵光を放つて生えて居るのです。下僕のものはそれを見て、これは珍しい蕈だと早速とつて、家へ歸りました。そして汪さんに見せてその譯を話しました。

汪さんは、その蕈を見ると、大層喜んで、

『これは珍しい。早速 料理させて見よう。』

と云つて、料理させました。ところが、その蕈の美味しいことゝ云つたらありません。こんな美味しいものが、またとこの世の中にあるだらうかと思はれる程でした。で、汪さんは、すぐさま下僕にいひつけてあるだけの蕈を取つて來いと命じました。

下僕は、さつきありつたけの蕈をとつて來たのだから、もう一度行つたところで無駄だといひました。

しかし、汪さんは、

『馬鹿め！　お前は、わざ〳〵取りに行くのが嫌な

ものだから、そんなことを言ふのだらう。』と云つて大層怒りました。

下僕は、仕方なくもう蕈のない事はわかつてゐますが、主人のいひつけ通り、もう一度、楮の木へ行きました。

すると、不思議です。楮の木に近づくに從つて、ぷん〳〵いゝ匂ひがして來るのです。下僕は、狐にでも化されてゐるのではないかとも思ひましたが、氣を落ちつけてみると、やはりいゝ匂ひがして來るので、急に元氣が出ました。で、急いで、楮の木のところへ行つて見ますと、不思議、不思議、楮の木の根下には、また、澤山の蕈が光を放つて生えてゐるのです。

下僕は不思議に思ひながらも、喜んで、その蕈をとつて歸りました。

それからと云ふもの、汪さんは、毎日々々〳〵蕈をとりにやつて、美味しい蕈の料理を食べました。蕈はいくらとつても〳〵次から次へと生えて、根がたえることがありませんでした。

すると、それが誰言ふとなく、だん〳〵世間の評判になつて來たものですから、お金を持つて蕈を買ひに來る人が毎日のやうにありました。しかし、汪さんは、誰が來ても、みんな斷つて、蕈を分けてやりませんでした。

で、或ひは、この儘にしておいたら人に盗まれるかも知れないと思つたので、下僕に言ひつけて、椿の木の周圍に垣を作らせました。

それを見た近所の人達は、汪さんのやり方に腹をたてゝ、汪さんの惡口をいひました。そこで、ある一人の男が腹立ちまぎれに或る晩、蕈の根を絶して了はうと思つて、椿の木のそばへ行つて、垣を壞して蕈をもぎとらうとしました。

と、その時、空に聳え立つて居た椿の木が急にゆら〳〵搖れ出して、忽ちのうちに白い衣物を着た一人の老人の姿に變りました。それを見た男は、膽をつぶして、腰をぬかして、動けなくなつて了ひました。男は眼ばかり大きく開いて、その老人を見て慄へてゐました。

老人は、慄へてゐるその男を、きつと睨みつけて厳かな聲で、

『これ〳〵、盜みをする惡い者！　この蕈はお前達の食べられるものではないぞ。若し、この蕈を無理にも取らうとすれば、必ずお前は災ひを受けなければならぬぞ。わしは、昔、汪さんに世話になつた惠洪と云ふ僧である。わしは、まだ死なぬうち、汪さんにたいへん世話になつてゐながら、それに何の酬ひもせず、それを恥とも思はなかつた爲め、死んだ後、地獄へおとされ、罰を受け、體を蕈にされて、それで昔の罪ほろぼしとして、汪さんに御恩返しをしてゐたのである。蕈の美味しかつたのは、わしの清い血がその味となつたのぢや。もう、今では、わしの罪は許され、これから極樂への旅路をさして、立去らなければならぬ。』

と言つて了ふと、その白衣の老人は、ふつと姿を消して了ひました。

それを聞いた男は、すつかり驚いて了つて、早速汪さんの處へ馳け出して行つて、その事を詳しく話しました。

汪さんは、初めは嘘だと思つて、なか〳〵信じませんでしたが、その男が一生懸命になつて言ふものですから、嘘だとは思ひながらも、男と一緒に椿の木のところへ行つて見ました。

しかし、其處には、もう何もありませんでした。蕈もなく、大きな椿の木は根下から折れて、倒れてゐました。

汪さんは、默つて涙をぼろ〳〵落しながら、心の中で、

『南無阿彌陀佛……』

とお念佛を三度唱へて、すごすごと家へ歸りました。

（をはり）

童謡

野口雨情選（大人篇）

葭切り

臺北市 菜町　野村　詩樓

葭切りや葭間で
何してた
内證だ内證だ
いはれない
葭原は雨だよ
なにしてた
うそうそ葭原
よい日和
そんなら葭切りや
なにしてた
嬰兒のお床を
造つてた

ほとゝぎす

東京府 新宿町　青山綠葉子

お城の壁が
白ござる
お城の裏の
ほとゝぎす
今宵は月が
細ござる

水すまし

大阪府 田邊町　阪野　潤

小川の水は
泥水だ
ゆうべの雨で
泥水だ
まいまいきりこ
水すませ
ぐるぐる廻つて
水すませ
まい〳〵ぐる〳〵
廻つても
まだまだ小川は
泥水だ

雨だれ

高知市 帶屋町　羽田　敬和

雨だれ一つ
ぽつとり落ちた
軒のつばめが
そとのぞいたら
も一つ落ちた
ぽつとり落ちた

鯉の子

名古屋 東陽町　鳥本　夫二

ここを通つた
鯉の子
向ひは長屋の
板圍ひ
ここを通つた
鯉の子
うしろはお寺の
くぐり戸じや
まごつき〳〵
ここ逃げた
いたづら鯉を
追てやろ

虹橋

佐賀縣 久間村　齋藤　利治

虹橋、大鼓橋
どんど橋
浮橋七色
御殿橋
人橋かけろや
夏祭
虹橋、大鼓橋
どんど橋
浮橋七色
虹の橋
はよ〳〵渡れや
夏祭

赤とんぼ

京都市 中長者町　小西　行夫

京の三條
紅屋の店で
お紅買うたぞ赤とんぼ
小さい尻尾にぬりつけて
三條大橋
擬寶珠にとまつて
赤いかつこ履いた
子供を見てる
青いかつこ履いた
子供を見てる

お金魚ちやん

名古屋 市熱田　吉川　春雄

金魚の子供に
本讀ましよ
硝子のお窓に
本立てゝ
パク〳〵金魚に
本讀ましよ

かもめ

横濱市 本牧町　福田ハツ子

かーもめかもめ
海のとり
一ッ白い波の上
かーもめかもめ
舟の上
今日も夕日が赤々と

芒

臺北市 末廣町　渡邊むつを

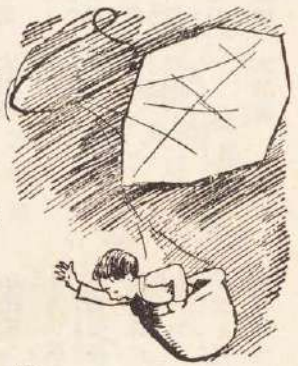
かさかさ
すゝきが
しつぽふつてた
月夜は
さあむい
河原風
子供を
ばかそと
しつぽふつてた

十五少年漂流物語

霜田史光

（前號までの梗概は一一三頁にあります）

一、凧へ乘るのは誰？



ブリアンとバクスターたちは、大凧を作り始めました。そして七日の後には直徑二間半、一方の長さが四尺もある八角形の大凧が美事に出來上りました。そして籠を吊して、その中に一人乘れるやうに作りました。

その夜少年達は風の强いのを幸ひ、その凧を揚げて見ました所、首尾よく揚りましたので、いよ〳〵その翌る晩は、誰かゞ乘つて見ることになりました。

翌る晩、大凧の用意が出來てから、ブリアンは皆を集めて、

「誰か籠に乘る者はないか。」と云ひました。

すると、その聲がまだ終らぬうちに、

「僕が乘りますッ。」と叫んだ者があります。

見るとそれは、年の少ないジャックではありませんか。皆な吃驚してしまひました。

「いや、僕が乘らう。」

「僕が乘る。」

續いて、ドノバン、キルコクス、クロース、サービス等が口々に叫び出しました。するとジャックはまた、

『兄さん、僕に乘らせて下さい。僕こそ乘らなけりゃアならない者ぢやありませんか。』と云ひました。ドノバンは、

「どうしてなんだい、ジャック君。君に强つてそんな理由がある筈はないぢやないか。」

「さうだ〳〵。」とバクスターも云ひました。

「だつて、僕は、君達に對して、乘らなけりアならない義務があるんだよ。」

「義務があるつて……」とゴルドンも聞き咎めました。

「えゝ、さうです。義務があるんです。」

ゴルドンはジャックがかう云ふのを聞いて、これには何か深い理由があることゝ思つてそれをブリアンに聞きたいと、默つてブリアンの手を握りますと、不思議にもブリアンの手はわな〳〵と慄へてゐました。

若しこの時が暗い夜でなくて、また潮の外でなかつたら、ブリアンの顔が蒼白になつて、そして兩方の眼からは涙が流れ出してゐるのを見たでせう。

ジャックはまだ十歳の少年です。絵しその聲は立派に、

『兄さん、早く僕を乘らせて下さい。』ときつと決心した聲で云ひました。

ドノバンはブリアンの前へ進み出て、

「ブリアン君、君の弟は僕達の爲め命を捨てる程の義務があると云ふが、それは一體どういふ譯なんだね。さう云へば僕等はお互に義務があるのぢやないかね。それをジャック君ばかりがそんな義務があるやうに云ふのが、僕にはどうしても解らないんだよ。」

「あゝ、ドノバン君、その譯は僕が話します。」

とジャックが云ひ出すと、ブリアンは、

「ジャック、これ、ジャック。」とそれを止めかけましたが、ジャックは、

『いゝえ、兄さん、僕に何もかも云はせて下さい。僕は云はないでゐるのが苦しくつて堪らないのです。ドノバン君、ゴルドン君、そして皆さん。皆さんが家を離れ、父さん母さんに離れて、こんな所に流され困難してゐるのも、元はと云へば僕が原因だつたからです。スロウ號が海に流れ出したのは、僕が、僕が何の考へもなく、いゝえ、たゞ皆さんを驚ろかしてやりたいと思つたばかりで、その纜を解いたからなんです。僕は船がだんだんと海に流れ出すのを見て、慌てゝ止めようとしましたが、もう駄目だつたのです。おゝ、皆さん、僕の罪を赦して下さい。赦して下さい。』

ジャックは胸も裂け裂けるばかりに聲立てゝ泣き出してしまひました。そしてクートがいくら慰めても泣き止みませんでした。

「よし、ジャック、お前はよく云つて呉れた。そしてその罪の萬分の一を償はうとして命を捨てようと云ふのか。」と、ブリアンは云ひました。

ドノバンは生れつき强情張りでしたが、人の罪を恕すと云ふ尊い心が、この時急に起つて來ました。ジャックはもうその罪を埋め合せる程のことをしてゐるではないか、ジャックはもう二度も三度も自分の命の危いことを忘れて自分達の危い所を救つて呉れたではなかつたか――さうした考へがドノバンの頭にむか〳〵と起りました。

「あゝ、ブリアン君、僕は今になつて、君が平生危い事がある度にジャック君を選んで出したし、またジャック君も命を捨てゝその仕事にかゝつてゐたのが解つた。あゝ僕の仲よしのジャック君、僕は喜んで君の過ちを恕すよ。君はもう君の過ちの埋め合せはしてゐる

んだよ。君はもう少しもそんなことを考へなくゝもいゝのだよ。』と心をこめた聲で云ひました。

ドノバン始め多くの少年達は、ジャックの身の上に同情し、そしてその勇ましく清い心に感心して、皆涙を浮べてジャックの手を握らうと、ジャックの身の廻りに寄り集つて手を差し出しましたが、ジャックは手を顔に當て、まだ體を震はして泣いてゐてどうすることも出來ません。

二、兄さんが乘る？

やつとの事、ジャックは泣き止みました。

「皆さん、僕こそ一番に籠に乘らなければならない者ぢやありませんか。兄さん、僕の云ふ事は間違つてゐますか。」と云つてアリアンの顔を見上げました。

「よく云つた、ジャック、よく云つた。」とアリアンは弟の勇ましい快心を賞めました。

ドノバン達はジャックに思ひ止まらせようとしましたけれども、ジャックの決心は動きませんでした。そのうちに風はだん〳〵と强くなつて來る樣子です。ジャックは皆と一一手を握り合つた後、籠の中へ入らうといたしました。そして兄に向ひ、

「兄さん、僕にもう一度接吻させて下さい。」と云ひました。ジャックはこれが兄弟の別れとなるかも知れないと思つたのでせう。

「いゝとも、さア此處へ來て接吻をするがいい。だが、それよりは僕がお前に接吻しようよ。なぜなら、その籠に乘る者は實は僕なんだからだ」

「えッ、兄さんが乘る？」

ジャックは驚いて叫びました。ドノバンとサービスも驚いて、

「アリアン君、君が乘るつて？」

「ドノバン君、僕はもうとから決心してゐたんだ。」ときつと云ひ放ちました。

ゴルドンはアリアンの手を握つて、

「アリアン君、僕は君がさう決心してゐるのぢやないかと始めから思つてゐたよ。」と云ひました。

かうしてアリアンは自分が籠の中へ乘り込みました。

少年達は籠の太い鐵繩をほぐしてゆくと、大風はアリアンの乘つた籠を吊してだん〳〵と空高く昇つて行つて、やがて暗闇の中に見えなくなつてしまひました。

アリアンは自分の體がだん〳〵高く昇つてゆくのを感じました。十分ばかりすると、ドンと物に突き當つたやうに思ひましたが、それは絞車盤の麻繩がすつかり伸び切つたためだと知れました。風は右左りに搖れますので、その恐ろしさつたらありません。アリアンは片手に吊り繩をしつかり握り、片手に遠鏡をもつて四方を見渡します。たけれども、湖も、森も、海も、たゞ暗黑な夜の闇に包まれてゐて見えません。たゞどうやらわかるのは島と陸との境です。その時東の方にあたつて一筋の赤い光を認めました。然し、それは幾十里あるか知れない程遠いらしいので、アリアンはそれが、この島ではない島か、でなければ大陸の火山でもありはしないかと思つたのです。そしていつか見た東の海の白い點のことを思ひ出しました。

さうして尙よく見てゐますと、今度はそれとは違つた火の光が、自分のゐる所から二三里の所から見えるのに氣が付きました。これこそ、あのワルストン等惡者共の焚く火でなくてなんでせう。

もうこれさへ解ればいゝと思ひましたので、アリアンは合圖の鐵環を落しました。鐵環は一分とかゝらずに風糸を傳つて少年達の手許に屆きました。

少年達は、心配しながら待つてゐた合圖が來ましたので、それッと云つて力を合せて絞車盤を卷き出しました。然しこの時風は强くなつて、風はしきりに頭りを振るやうですから、上のアリアンを心配することは一通りではありません。その上に少年達がいくら力を合せて大汗になりながら卷かうとしても、なか〳〵それが卷き切れないので、益々心配するやうになりました。

三、風の糸が斷れた！

一時間と四十五分もしましたが、まだ風は地の上から二十間位の高さにあるやうです。もう少しだと云ふので、少年達が尙も一生懸命になつて卷いてゐると、その時急にひどい風がさつと來たと思ふと、風の糸は斷れて、絞車盤につかまつてゐた六人の少年は、ぽーんと地の上に投げ出されてしまひました。

『アリアン君！　アリアン君！』

と少年達は口々に叫びました。けれども駄目でした。

暫らくの間少年達はあまりの心配に、たゞぼんやりと立つてゐましたが、その時、

『おーい』と呼ぶ聲が湖の方から聞えました。

『兄さん！』と呼んで第一番に駈け出したのは、弟のジャックでした。

『ワルストン等はまだこの島にゐるよ。』とアリアンは駈けつけた少年達に云ひました。

風の糸が斷れた時、アリアンはだん〳〵と落ちてゆくのを知りましたけれども、うまい工合に急にも落ちないで、ふわ〳〵と風に飛ばされて湖の上まで來ましたので、アリアンは身躍らせて水の中へ飛び込み、七十間ばかりの間を泳いで湖の岸に立つことが出來たのでした。

そして風はアリアンが飛び降りてしまふと、急に輕くなりましたので、また空中へ飛び上つて、東北の方へ飛んで行つてしまひました。

四、傳書燕歸る

次の朝は、昨前の晩の疲れで寢すごして、日が高く昇つてから起き出しました。それから少年達は物置の洞に集つて、これからのこ

と相談しました。

早く本國へ歸りたいことは勿論ですが、それよりも今眼の前にゐる惡者共をどうして防いだらよいかと云ふことが先でした。何よりも自分達の居所を知らさない樣にするのが一番ですから、少年達は湖の岸へも出かけないやうにしようと約束しました。それから外からよく見える、鳥飼ひ場の垣根も樹の枝をとつてきて隱くしたりしました。

それよりも皆を心配させたことが出來ました。それは年若のコスターが病氣になつたことです。ゴルドンはスロウ號に備へつけてあつた藥をとり出してそれを服ませ、皆と一緒に一生懸命になつて看護をしました。幸ひにもケートがゐてくれましたので、まるでお母さんのやうな親切で、いろ〳〵と世話をしてくれましたので、病人も他の少年達も大層助かりました。それでもコスターの病氣はだんだん惡くなるばかりでしたが、でも十日ばかりたつて今度はだん〳〵とよくなつて行きました。

十一月の初めから中頃にかけては毎日のやうに雨がふり續きましたが、森はみな綠をつけて、美しい花が咲き出しました。

ある日、サービスが淵の近くへ張つて置いた獵網にかゝつた小鳥をとつてゐますと、その中に、一羽の燕がゐてその頸には小さな函が結び付けてありました。

サービスは、さては本國から返事でも來たのかと思つて、胸を躍らせながら開いて見ますと、それは自分達が去年出した手紙だつたので落膽しました。

この頃は皆外へ出る事も稀でしたから、バクスターが受符の日記もいゝ加減に放つて置かれることが多いのでした。と云ふのは餘り書くこともないからで、少年達は洞の中で毎日つまらなく日を送つてゐました。

もう三ケ月もたつと、三度目の冬を迎へなければなりません。

あゝ、何日になつたらふる里へ歸つて、懷しい父母のお顏を見ることが出來るのでせうか。思へば悲しい、寂しい日ばかりが續くのでした。

ある日、ドノバンはニューター川の樹蔭で釣をしてゐると、向岸で鳥が騷ぐので、どうしたことかと行つて見ますと、其處には一羽の小さいラマが死んでゐました。そして横腹は鐵砲に撃たれたと見えて血潮が流れ出てゐました。まだ溫か味のあることから考へると餘い時間いたつてゐないやうです。

これは蛇度ルストン等の一人が撃つたものに違ひありません。して見ると惡者共はもうこの近くに來てゐるらしく思はれます。

それからゴルドンとブリアンが森の中を歩いてゐた時、陶物の煙管を拾ひましたので、いよ〳〵ルストン等がこの邊に近づいて、自分達の樣子を見てゐるものと想像されました。

其處で少年達は防ぎの用意をしました。戸の側にあけた窓の所には二門の大砲を据ゑて、一つは表の川の方に筒先を向け、一つは裏の湖の方に筒先を向けました。そして少年達にも鐵砲や短銃をあるだけ分けて、いつでも戰ひが出來るやう用意が出來ました。

ケートは少年達の爲めにする分骨が折つて働いて呉れました。然し、人數は纔四人ゐても

あの鬼のやうなルストン等に比べると、ほんとに心細いものですから、こんな時、せめてあの二等運轉手のイバンスでもゐて呉れたらと、思はずには居られませんでした。

五、ズドンと一發

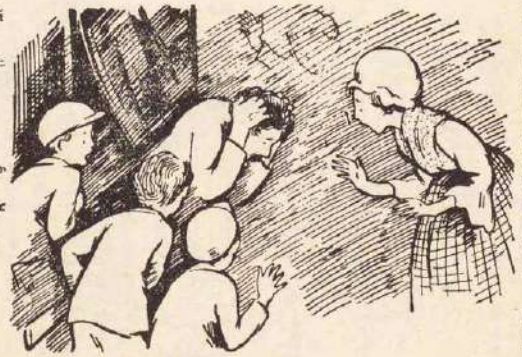
「助けて——」

十一月の二十七日になりますと、いやに蒸し暑くてたまりませんでしたが、夕方になると、少年達はボートを物置へ引込んで眠る時間の來るのを待つてゐました。

所が、九時半を過ぎると、嵐がやつて來ました。電光は物凄く戸の隙間から洞の中まで流れ込み、雷の聲は頭の上で、休みなく鳴つてゐました。けれども風も雨もありません。たゞ恐ろしい嵐の樣樣は少年達の胸を震はせてゐたのです。

十二時頃になると、さしも激しい雷の音も少しづゝ間をおくやうになりましたが、その時、どつと大雨が降り出して來ました。少年達は皆蒲團を頭からスッポリ被つて年若のものは慄へてゐましたが、どうやら恐ろしさも少なくなつたと見えて、蒲團の中からヌッと顏を出す者もあります。

その時ブアンは何か喫驚つけたと見えて、底うなりをして戸の側へ駈け寄つて、前足で頻りに戸をかり〳〵掘き出しました。



これはたゞ事ならぬ、と思つた少年達は皆起き出して、手に手に鐵砲を持つて身構へました。そして、前もから淵の中へ運び込んで置いた大石を戸の内側に積んで外から這入れぬやうにしました。

ズドンと一發、鐵砲の音が嵐の中に響き渡りました。それ、惡者共が攻めて來た、と思つた、ドノバン、バクスター、キルコクス、クロースの四人は、早くも裏口と表口に分れて、若しこの洞に這入つて來ようとする者があつたら、一發のもとに撃ち殺してやらうと身構へました。

その時、戸の外で、

『助けて——助けて——』と叫ぶ聲がします。

少年達がおやッと思つて耳を澄ましてゐますと、今度はすぐ戸のそばで、

『助けて——助けて——』と云ふ聲がします。

ケートは始めから少年達と一緒に戸のきはに立つてゐましたが、その時、

『おや、あの人です。』と叫びました。

『あの人つて？』

『戸を開けて、早く開けて入れて下さい。』

ケートの聲に少年達は戸を開きました。す

ると一人の大人がずぶ濡れになつて、洞の中へ躍り込みました。

この人は、セベルン號の二等運轉手イバンスだつたのです。少年達は何が何やらよく分りませんので、たゞぼんやりとしてイバンスの姿を見てゐました。イバンスは二十五か三十位の間らしく、肩も胸も廣くて立派な體です。その顏は如何にも利口さうで正直らしくも思はれました。

イバンスは少年達を一わたり見廻して、

『なるほど、少年ばかりだな。』と獨り言を云ひましたが、ふとその中にケートのゐるのを見つけて、

『おや ケートさん、貴女はご無事でしたか……。』と驚いて云ひますと、ケートは、

『はい、無事にかうしてゐます。神樣は私を助けて下さつたのです そしてあなたが此處に來られたのも、神樣が の少年達の味方になるやうにあなたをよこしたものでせう。』

イバンスは少年達を た見廻して、

『みんなで十五人だね。そして戰ふことの出來るやうな者は五六人しかゐないね。』と云ひました。その時ブリアンは、

『今にも攻めて來さうですか。』と心配して訊ねましたが、イバンスは、

『いや、今すぐは來ないだらう。』と云つたので、少年達はほつと一安心しました。

六、イバンスの話

少年達は早くイバンスから、此處へ來るまでのことや、ルストン等がこの島へ上陸してからの話が聞きたいと思ひました。しかし、イバンスは濡れた着物を脱ぎ、それから少し食べ物が欲しいと云ひました。イバンスは今朝から何も食べないで、今しがたニュ：ジーランド川を泳いで渡つて來ましたので、すつかりお腹が空いてゐます。そこで、ブリアンは乾いた着物をやり、またモコーに云ひつけて、冷たい兎肉と乾パン、一盃のブランデーなぞを持つて來させました。イバンスは見る間にそれを食べ終へてしまふと、やつと元氣が出たと見えてぼつ〳〵話し出しました。

イバンスの話は大體次のやうでした。

私は傳馬船が岸へ着かうとした時、他の六人と一緒に大浪に浚はれてしまひましたが、やつとの事濱邊へ泳ぎついて見ますと、舟の中へ殘つてゐた筈の二人が見えません。ケートさんは多分浪に浚はれてしまつたものと思ひました。ルストンも確かにそれを見たと云ふので、惡者達は安心したやうです。それから長い間濱邊をうろ〳〵して、十二時頃になつてやつと傳馬船が砂濱へ打ち上げられてゐるのを見つけました。そこにはフォーベスとバトクが倒れてゐましたので、それを助けてから、舟に殘つてゐた食べ物や、鐵砲や彈丸を取つて、東の方へ海岸傳ひに歩いて行きました。

一時間ばかりで、森のある所へ出ましたので、その晩はそこで野宿して、翌朝、また傳馬船のある處に歸つて來て、それから五六日の間は、舟の破れた所を繕さうとしましたが、道具が足りませんでうまくゆきませんでした。

そこで、仕方がありませんから、それは止めても角も暫らくどこかに住む所を見つけて、それからゆる〳〵船のことは相談しようと云ふことになりましたので、私達はそこから十二哩も東の方へ行きました所、川があつて灣になつてゐました。北處には洞もありましたので、こゝがよからうと云つて、傳馬船を曳いて來て川口に繫ぎました。

『その川は東方川と云ひますし、その灣は惡ばし灣と云ふのです。』とサービスが口を入れますと、イバンスは『ばーアそんな名をつけたのですか。』と云つてまた話を續けました。

――何しろ大工道具がありませんので、それをへあれば私達は船を繕ひ直して、もうたうにこの島を去つてゐたのです。ですからルストン等はこの島に人がゐるかどうかと早く知りたかつたのです。

十日ばかり前、川の岸に沿つて森の中をゆきますと、一つの大きな 湖に出ました。そこに油紙で張られた大きな、妙な形をしたものが落ちてゐました。皆はこれが何んであるかと、しきりに考へてゐましたが、何んにしても人間が作つたものに違ひないから、この島には人間が住んでゐると思ひました。

『それは僕等の眼でせう。』とその時ドノバンは云ひました。

イバンスは伺話し續けます。

――そこで私はルストン等の手から逃げ出したいと思ひました。例へこの島に住んでゐる人間が野蠻人でも、ルストン等のやうな惡者ではあるまいと思つたからです。所が私が逃げようとする樣子を見て、惡者共はすつかり用心して私を見張つてゐて、なか〳〵その折を與へませんでした。

それからルストン等は毎日のやうに方々を歩き廻つて人のゐる所を探しましたが、なか〳〵見つかりません。その上一發の鉄砲の音さへ聞えなかつたのです。

ですが、たうとうルストンはこの住居を見つけてしまひました。それ 先月の二十二日の夜のことでした。惡者の一人がこの邊を通りますと、少年達が戸を閉めたりしてゐるのと、戸の隙間から光が洩れてゐるのとで知つたのです。それから次の日の午後にはルストンが自分でやつてきて、前の森の中に隱れてゐて、この洞の樣子を伺つてゐたのです。（次號をお待ち下さい。）

噴水成佛

原田謙次

一

ある片田舎のお寺に、珍念といふ小僧が居りました。

和尚さんが町に用たしに出かけましたあと、珍念は一人で留守番をしてゐました。

それは夏の暑い日のことでした。

始終、和尚さんに小言ばかり言はれてゐる珍念は、留守の間こそ自分の天下だと大威張りで手足を伸ばし、暑いので兩肌ぬいで、縁側の寢臺に乘つて、和尚さんがいつもするやうな恰好をしながら新聞を讀んでゐました。

庭には莢竹桃や桔梗の花などが美しく咲いてゐました。

珍念は、新聞にも倦きて、ぼんやりと庭の花などを眺めながら、いろ〳〵の空想をしました。

『こんなに暑うてはたまらん、この庭に噴水があつたらなあ。』

珍念はさうつぶやきながら、町の公園の池の噴水の涼しさを眼の前に描きました。

『おれが大和尚になつたら。』と珍念は考へました。

『この庭に大きな噴水をこさへてやらう。寺の家も新式の鐵筋コンクリートにしてやらう。』

こんなことを考へてゐるうちに珍念は睡くなつて來ました。

そしてうと〳〵としてゐるところへ大きな地震が起つて、珍念は寢臺の上から庭へ投げ出されました。

『さあ大變だ、地震だ地震だ。』

珍念は大きな聲で叫びましたが誰も應へるものもなく、たゞ樹木の蟬が騷がしく鳴き立てるばかりでした。

珍念は、關東地方の大震災の話を聞いて以來、非常に地震を怖がつてゐました。

そして、もし地震があつたら何處へ逃げ、どうすればよいかといふことを、軍人が戰爭について考へるやうに始終考へてゐました。

珍念は、地震があれば火事が起るといふことを知つてゐました。東京でも、あの時地震で死んだ人よりも火事で倒れた方が多かつたといふことを聞いてゐました。

その火事の中で不思議にも助かつた人は地面を掘つてその中に顔を埋め、窒息をまぬかれたといふ話でした。

庭へ投げ出された珍念は平生の知識を應用するのは今であると、もし大火にでもなつた時のために、庭の眞中に穴を掘りはじめました。

地震は時々搖りました。

しかし、屋根の瓦も落ちず、火事も起りませんでした。

それでも、珍念は穴を掘ることを止めませんでした。

穴はだん〳〵深く、大きく掘られて、かゞんだら珍念の身體が、すつかり這入つてしまふ位になりました。

『よし〳〵、もう大丈夫だ。』と珍念は考へました。

所が、反對に大變な事が起りました。

といふのは、珍念がまた掘りはじめました途端に、穴の中から勢よく水が噴き出たのです。

『あつ！』と、驚いて、珍念が穴を飛び出さんとした時には、もう間に合ひませんでした。

水は途方もない力で、珍念の身體を空中に吹き上げました。

地震のために地中に變動が起りましたものか、珍念の掘つた穴の底を突き破つて太噴水が躍り出しました。

この天然の噴水が、珍念の望んでゐた位のものであつたら、噴き出した時に一浴びさつと水をかけられただけで、あとはかへつて樂しみとなる筈でしたが、この噴水はあまりに大きく、直徑一尺もある水柱で、地上から十間程の高さまでりう〳〵と昇るのでした。

で、珍念の身體は、その地上十間の高さの空中で、噴水の水頭に手玉に取られて躍つてゐました。

それは丁度、玩具の噴水器の水頭の上で跳ねつゝ躍るセルロイドの球のやうに、その噴水が止まない限り、とても地上へ下りることは出來さうもありませんでした。

珍念は、最初噴き上げられた時に、あまりの驚きに氣を失ひましたが、やがて正氣に返りますと、自分が空中にゐることがわかりました。

水は珍念の脊中を支へて、ふつ〳〵〳〵と呼吸をつくやうに、身體を二三寸の間上下させ續けました。

『これは困つたことになつたわい。』と珍念は考へました。『いつまでも下りられないとすると、御飯を食べるわけにも行かず、飢死なければならない。』

さう思ふと、珍念は悲しくてたまりませんでした。

それにしても、仰向きに噴き上げられてゐては、青空を見るよりほかはなく退屈でたまりませんので、せめて、なにか見えるやうな恰好にしたいと大へんな骨折りで、幾度もの失敗の後に、やつと、坐ることが出來ました。

丁度その時、和尚が町から歸つて來ました。

『珍念！　珍念！』と呼びながら縁側の方へ來て見ますと庭の眞中に大きな水柱が立つてゐるのでびつくりしました。そして、その水柱の頂上を見上げますと一人の人が端坐してゐるではありませんか。

和尚はそれを珍念だと見きはめる程心が落ちついてゐませんでした。

噴水の水頭に支へられて坐つてゐる珍念の姿が、蓮の葉の上に坐つてゐられる佛樣のやうに和尚の眼には見えたのです。

和尚は掌を合はせて、『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』と拜みました。

珍念は和尚が歸つて來ましたので直ぐにも『和尚樣！』と呼びかけようと思つたのですが、和尚が驚きのあまり自分の姿を見きはめないで拜んでゐますので、これは自分を佛樣とでも思ひこんだに違ひないと氣がつきました。

さう氣づきますと、根がいたづら好きの珍念のことですから、一つ佛樣になりすまして威張つてやらうと考へました。

そこで珍念は、空中から聲をかけまして、自分は先刻までは和尚の弟子であつた珍念であるが、平生の功德をつんで今はもう佛の仲間入をしたのであるといふことを言つて聞かせました。

そこで和尚は、顏を上げてはるかに見上げようすると、なる程それは珍念に相違ありませんでした。

あの怠け者の珍念が……と考へましたけれど、何といつても眼の前の不思議をどうすることも出來ませんでした。

和尚は、今からは反對に自分を弟子にしてくれるやうにと賴んで頻りにこの生き佛を拜むのでした。

三

珍念は思ひがけない出來事からすつかり佛になりすましましたが、日暮れに近づくに隨つて腹が空いて困りました。

そこで和尚に命じて、握り飯をバケツの中に入れ、ふたをして、水柱の中へ投げこませました。忽ち、バケツは珍念の側まで噴き上げられて來ました。

腹が一杯になりますと今度は寢ることを考へました。で、緣側にある寢臺を送つてくれるやうにたのみました。

和尚は寢臺を水柱の中へ押込みました。するとそれも瞬く間に噴き上げられて珍念の身體の下まで來

て止りました。

珍念は自然に寢臺の上に乘り、水頭は寢臺の下を支へるようになりました。

珍念は一安心して眠りました。

翌朝眼をさましますと、珍念は今更ながら自分が不思議な生活を始めたのに氣がつきました。

お寺の屋根よりもずつと高い所に自分がゐるので、遠い遠い所まで見渡すことが出來ました。

和尚はたゞもう、珍念が生き佛になつたものと信じきつて、珍念の命令には何事にも從ひました。

珍念は水柱の上の寢臺を自分の家として、欲しい物はバケツに入れて噴き上げさせてもらひました。

この不思議な大噴水と生き佛との話は、次第に評判になりました。

隣り村から、また先きの村へ——町へも傳へられて、新聞記者が寫眞を撮りに來たりしました。

その記事が新聞に出ますと、可なり遠方からまで人々が集つて來ました。今まで寂しかつた山寺に、毎日々々多くの人が參詣に來ました。

そして、本堂の方の御賽錢箱は以前と變りませんでしたが、噴水の周圍には生き佛樣に上げた賽錢が毎日堆高く積まれました。

珍念は、毎日寢臺の上で暮して、前のやうに和尚に小言を言はれないばかりでなく反對に和尚を自分の弟子にして氣樂になりましたが、しかし一生この噴水の上から地面に下りられないのかと思ふと心細くもありました。そのうちに夏も過ぎ、秋の紅葉さへまた散つて行きました。

そして寒い冬となりましたが、ふと、珍念が地面へ下りられる機會が來ました。

それは噴水の水柱が氷つてしまつたので、それを傳つて辷つて下りることが出來たのです。

しかし、地面へ下りた珍念はもう佛樣ではありませんでした。

（をはり）

長篇前號 ま で の 梗概

十五少年漂流物語 濠州にニュージーランドといふ島があります。この島にオーックランドといふ市があつて、そこにチエイヤマンといふ學校がありました。暑中休暇には二ヶ月の休暇があるので、この學校に通學してゐる十五人の少年が集つて船でニュージーランドを一周しようといふことになりました。で、いよ／＼船の準備が出來、大勢大人も乘組んで明日は出帆しようといふ前の晩、ヤックといふ少年の惡戯のために、大人が一人も乘らない内に錨を離れてしまひました。風に追ほれて船は、大平洋の中を波の間に間に流されて、遂に或る無人島に流れ着きました。こゝで助け船の來るのを待つてゐる内に二年三年とたつて了ひました。その内に思ひがけなくこの島へ流れ着いたといふケートといふ女に出遇ひました。この女の話で惡漢が大勢島へ流れ着いてゐることを知つて、一同は非常に驚き、惡漢の居處を知るために大きな凧を作り、それに乘つて空中から偵察しようといふ事になりました。

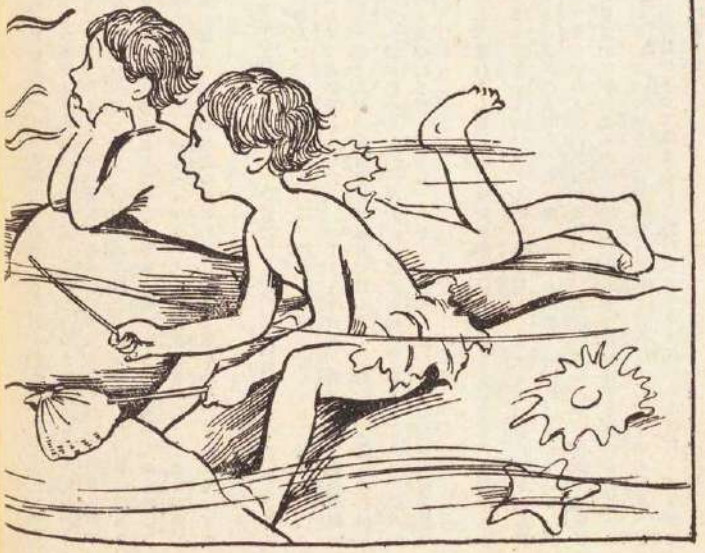
山の少年 この長篇は紀州の山の中に育つた三人の少年の物語りです。三人の名は、信次、孫四郎、善太といひました。三人はいつも遊び友達で樂しく暮してゐましたが、仲間の善太が、今慶皆なに別れて、樵夫の見習に行くことになりました。孫四郎も信次も別れを惜んで、その日は一日、三人して山の中で遊び暮しましたが、いよ／＼今日は、善太が山の木挽小屋へ行くことになつたので、信次と孫四郎が見送つて行きました。ところが、途中で鹿に出遇つたのです。鹿は犬に追ほれながら山を一目散に駆け下りて來ましたが、逃げ路を失つて淵の中へ跳び込みました。三人がわア／＼騒いでゐるところへ、信次のお祖父さんに當る與兵衛翁さんが來て、鐵砲でもつて、巧く鹿を打ち殺しました。やがて、三人はまた善太を送つて山を登つて行きました。河童の話などをして、三人は大元氣でした。

ラム王の一生 ラム王はエッベ國の珊瑚制の子供として生れました。生れながら變身術を心得てなりましたので、いろいろの不思議を現して人々を驚かしてゐました。諸國をさまよひ歩いて、いろ／＼の手柄を現し、四度も王の位に卽きましたが、しかし、いつもぢつとしてゐる事がいやになつて又ぢきに旅に出ました。ある晩、『旅でお星樣と途づれになつて『くらげの面』といふ宿屋に泊りました。ラム王はこの宿屋で、お星樣といろ／＼の話をしましたが、最後にラム王が、自分の旅をしてゐる目的は、黑繼石の釣針をさがすためだと話すと、お星樣が、それなら空中、地上、水中の三界をめぐるがいゝと教へてくれました。そこで、ラム王は鳥になつて空中へ行き、次に羊になつて地上の世界へ行き、終りに魚となつて水中の世界へ行つて見ました。と、ひよつこり、自分の目の先きを黑繼石の釣針が下つて來ました。魚になつたラム王は『これだ！』と夢中で釣針を呑込みますと、忽ちシューッと水の上へ引上げられました。

海坊主小坊主

野口雨情

カンカラ〳〵〳〵カン
海坊主
出たぞ
小坊主の先きに
海坊主
出たぞ



カンカラ〳〵〳〵カン
海坊主
小坊主
小坊主も
出たぞ
カンカラ〳〵〳〵カン

山の少年

（前號迄の梗概は一一三頁にあります）

沖野岩三郎

身代り

三人が瀧壺の底を見入つてゐる時、白が右手の方の雜木林を上の方へ駈け上つたと思ふと、間もなく瀧の銚子口の所へ、犬よりも小い、猫よりも大きな茶褐色の獸が、ぬッ！　と半身を突き出しました。

『あ、河童法師！』

信次は獸の顏を見ると、直ぐ二三尺後へ退りました。孫四郎も善太も死身になつて、わあーい！　と有りつたけの大聲を出して叫びました。

其時、白がワン！　と一聲吠えて、熊笹の葉蔭から飛び出したので、茶褐色の獸は絶體絶命逃げ場を失つて、瀧壺へどぶん！　と跳び込みました。

信次も孫四郎も善太も、吾を忘れて山の方へ一生懸命に逃げ込んだが、大きな楓の幹の所まで行つて後を振り返つて見ると、勇敢な白は、敵を追うて一緒に瀧壺に飛び込んで、頻りに首を左右に動かし乍ら泳いでゐました。

『あ、あ、河童法師、河童法師……』

孫四郎は瀧壺の向ふ岸を指さし乍ら叫びました。見ると其所には、丁度今水の底から出て來た茶褐色の獸が、岩と岩との狹間へ隱れてゐる所でした

『孫さん、あれは河童法師ぢやアないよ。あれは獺ぢや、川獺ぢや！』

善太は確信あるやうに言ひました。それを聞いた孫四郎も信次も、

『さうだ〳〵、川獺だ！』と同時に叫んで瀧壺の方へ走つて行きました。

瀧壺の中では白が川獺の居る方へ泳ぎつかうとして、頻りに足掻いてゐました。それを見た孫四郎は、

『白！　しつかりせい。俺が助けてやるから。』と言ひざま、裸體になつて、勢よく瀧壺へ跳り込みました。信次も續いて飛び込みました。そして白をけしかけ乍ら、拔手を切つて向ふ岸へ泳ぎつかうとしたが、水勢に煽られて後へ後へ撥ね返されるばかりで、どうする事も出來ませんでした。で、已むを得ず元の所へ引返して、

『白、白々々！』と呼びました。すると、必死になつて泳いでゐた白も、諦めをつけて岸へ這ひ上りました。

『居る／＼、あの岩の間に獺の尻尾が見える。』
信次は小石を投げながら叫びました。其時白は又た楓の木の方へ駈け登つて行きましたが、間もなく瀧の上の方で、ワン／＼と吠える聲が聞えました。そして間もなく前のよりも餘程大きな川獺が、瀧の銚子口の所へ顔を出したと思ふと、矢のやうに瀧壺の中へ飛び込んで、深く水の底へもぐり込んでしまひました。
三人は聲を呑んで深い水底を覗いてゐますと、間もなく浮き揚つて來た獺は、大きな石の後へ隱れました。で、三人は大聲で呶鳴りながら石を投げてゐますと、路の所から、
『おうーい、瀧壺へ石を投げちやァいけないぞ。』と叫ぶ聲が聞えました。
驚いて振返ると、樫の葉の間から、ちら／＼と鐵砲の筒先が光つて見えました。それを見た孫四郎は、
『おうーい、獺がゐるんだよ、獺が……』
と叫びました。すると葉蔭から顔を出した男は、疑はしさうに、
『獺？　うそぢやないか。』と言つて、舌を出してみせました。
『うそぢやァない。本當だ／＼。早くいらつしやい。』
信次は足摺をしながら言ひました。
『本當か、どれ、どこにゐる？』
獵夫は鐵砲を持直し乍ら近寄つて來ました。
『あれ、あすこの岩の狹間に一疋、それからあの石の向ふに一疋ゐます。尻尾の尖がちよいと見えるでせう。』
信次は獵夫の袖を引張り乍ら說明しました。
『うん、本當だナ、有難う。あれは私が貰ふから、あんた方は其の犬をつれて、早く此所を引揚げて歸つてお呉れ。』
獵夫は石に腰を掛けながら言ひました。

『犬が居なければ駄目でせう？』
孫四郎は白の頭を撫でつゝ問ひました。
『川獺は大變臆病者だから、人や犬が居ると三日でも四日でも、あのまゝ隱れてゐる。あんた方が此所に居なくなれば、あれが今にのそ／＼と這ひ出して來るから、私は其の岩蔭に隱れてゐて、射止めてやる……』
獵夫はさう言つて、白をぢろ／＼眺めてゐましたが、
『其の犬は與兵衛爺さん所の犬ぢやないか。』
と言ひました。
『さうです、うちの犬です。』と言つて、信次は白の首を抱へました。すると獵夫は信次の顏を見て、
『うん、あんたは、與兵衛爺さんの孫ぢやなァ。』と言つて點頭きました。
『さ、信さん、孫さん、早く行きませう。俺は早く行かなきやァ親方に叱られるから……』
善太は急に前途の事が氣遣はれ出したやうに言ひました。で、三人は白をつれて其所を立去らうとしますと、獵夫は三人を呼びとめて、
『お待ち、私はあの川獺二疋を、あんた方から四圓に買はう。三人で一圓づゝわけて、あとの一圓は白の分として與兵衛爺さんに渡してお呉れ。』と言つて首に掛けてゐた革の財布から一圓紙幣を四枚取出して、信次の前に突きつけました。
信次は孫四郎や善太と顏見合せて、夫れを受取るのを躊躇してゐましたが、獵夫が頻りに夫れを受取るやうに勸めるので、信次は、
『では戴きます。あなたのお名前は？』と言つて其の紙幣を受取りました。
『私は新之助といふ者ぢや。與兵衛爺さんを能うく知つてゐる。』
獵夫はさう言つて、腰の煙草容から煙管を取出しました。

三人は自をつれて、瀧壺の所から路の方へ出て、十町ばかり川上の方へ行くと、坂の上から一人の若い男が降りて來ました。

男は路傍の楠の木の幹に左の手をついて、下の方を眺めながら、

『おうーい、そこへ來るのは、與一さん所の善さんぢやないか。』と呼びました。

『はァ、俺が善太です。』

善太は男の方を見上げながら答へました。すると男は輕く點頭きながら、

『親方が迎ひに行けと言ふから、迎ひに來てあげたよ。』と申しました。それを聞いた孫四郎は善太に對つて、

『そんなら善さん、こゝでお訣れにしませう。達者で働いていらつしやい。』と言つて頭を下げました。信次は懷から紙幣を取出して、孫四郎と善太に一枚づゝ渡しました。けれども善太は、それを受取らないで、

『信次さん、すまないが、それは俺のおつ母さんに渡してお呉れ。お鈴が秋祭りの袷を買つてほしいと言つてゐたから、それを足しにするやうに話して下さい。』と申しました。

『では、あんたのおつ母さんに渡して置くから……』

信次は紙幣を懷へ容れながら、『善さん御機嫌で……』

『左樣なら信次さん、孫さん……』

善太は今日から最う今までのやうに、此の二人と遊び暮す事が出來ないのだと思ふと、俄かに眼の前が暗くなるやうに寂しかつたので、一杯涙を溜めながら俯向いてゐました。信次も孫四郎も涙ぐんで默つてゐました。

『さァ行かう、善さん。』

男が路の上の方から元氣づけるやうに呼んだので善太は思ひ切つて、

『左樣なら！』と言つて二三間駈け出しました。信次と孫四郎も聲を合せて、

『左樣なら……』と叫びました。善太は男の前に立つて、振返り〳〵二人の方を見ながら坂を登つて行きました。

孫四郎は路の傍の大きな岩の上に登つて、『おうーい、おうーい。』と呼んでゐましたが、善太の姿が見えなくなつたので、『信次さん、歸らうか。』と言つて、淋しさうに峯の方を見上げました。

『歸らう……善さんも今日から木挽になるんだなァ。』

信次は白の頭を撫で乍ら、勢の無い聲で申しました。すると孫四郎は、岩の上から靜に降りて來て、

『信次さん、俺も近いうちに大和の十津川へ行くよ。』と言ひました。
『え？　十津川へ？』
『うん．材木流しの飯炊きに行くんだ。』
『いつから？』
『もう一月も前から、そんな話があつたのだが、行くとなれば、襦袢と裩襠を買はねばならんだらう？其のお金が無かつたので、今まで延びてゐたんだ。所が今日この壹圓を貰つたから、これへ二三十錢足せば襦袢と裩襠が買はれる．．．さうすりやア、俺は二三日中に十津川へ行くよ。飯炊きをすれば一日に十五錢位呉れるつていふから。』
『善さんは川合山へ行くし、あんたは十津川へ行く．．．俺は一人ぼつちになるんだなア。』
信次は心から淋しさうに顔を曇らせてゐました。
其時川下の方から、ドウン、ドウンと二發の鐵砲の音が聞えて來ました。

『あ、新之助さんが獺を射つたのだ。さ、行つて見よう。』
孫四郎は、さう言ひ乍ら、もう五六間駈け出しました。鐵砲の音を聞いた白は、耳を立て乍ら、ウ、ウ、と唸つて孫四郎の後を追ひました。
信次は少し後れて走つてゐましたが、二町ばかり川下の方へ來た時、白は獲物を見つけたかのやうに尾を掉り乍ら山の中へ駈け込むのを見ました。
『おうーい、孫さん、白が山へ入つたぞ。何か居るんぢやア無からうか。』
信次の呼ぶ聲を聞いて孫四郎は立停りました。そして四五間後へ戻つて來たが、腰を屈めて路の上を覗き込み乍ら、頻りに信次を招きました。
『何だい？』と言つて駈けつけると、孫四郎は默つて路の上を指ざしました。見ると其所には細長い蹄の跡が交互に見えてゐました。
『鹿だらうか。』

『いゝや、これは猪だ。吾々が善さんを送つて行つた後で、こゝを通つたもんだ。これ御覽、たつた今通つたばかりだ。』
孫四郎は蹄に踏まれて倒れてゐる小い草の葉を指ざし乍ら言ひました。
『さうだ、此の山へ逃げ込んだのだ。すると白は屹度あの欅の所へ猪を追出して來るに違ひない。早く行つて祖父さんに知らせてあげよう。』
信次は前の日捕つた猪の事を思ひ乍ら、孫四郎と並んで、どん〳〵と川下の方へ走りました。
『こつちから行かう、此の近路から．．．』
孫四郎は丘を曲つた時、草原の中の細路の方へ外れ込みました。
『さうだ、そこから行かう。』
信次も孫四郎に續いて走りましたが、草原を二三十間も走つたと思ふ時、丘の上で白がけたゝましく吠えました。と、同時に萩の葉陰から薄黑いものが鳥の飛ぶやうに、さあーッと下の方へ轉がつて來ました。
『猪だ！』と云ふや否や、孫四郎は路の傍の松の木に、する〳〵と攀ぢ上りました。信次も柞の木に這ひ上りました。そして二人が丘の方を見た時は、丁度白と猪の接戰最中でした。
『新之助さん．．．來て下さい、猪だ猪だ．．．』
二人は交る〴〵瀧の方に向つて呼びましたが、何の答もありませんでした。
其のうちに猪は白と戰ひ乍ら丘を降りて來ました。猪が駈け出さうとすると、白はワンワンと二聲三聲强く吠えて其の後に肉薄します。すると猪はくるりと身を轉じて、ふーうと唸り乍ら白の方を睨んでゐます。其時白は頻りに尻尾を掉つて、自分の後に障害物があるかないかを尻尾で探り乍ら、猪が突進して來た時の逃場を用意してゐます。其時の彼の尾は眼の代用をするのです。

猪は狙ひを定めて、ど、ど、ど……と白の方へ突貫しますが、白は巧みにひらりと身を轉して猪を遣り過し、烈しく其の後から吠えつくと、猪は又たくるりと後向いて白を睨まへます。

猪は逃げようとすれば、後から白が吠えつく。牙を鳴らして突貫すれば、巧みに右に左に避けられるので、逃げもならず白を殺す事も出來ず、同じ事を繰返し繰返してゐました。これは白が猪狩りに馴

れてゐるからで、かうして白は獵夫の來るのを待つのです。

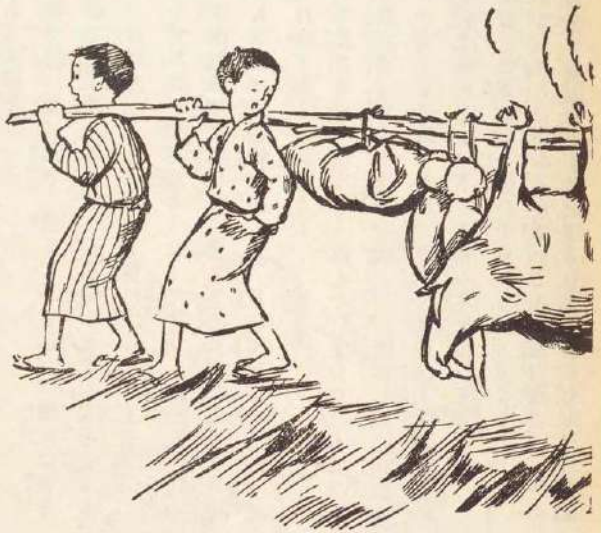
孫四郎と信次とは木の上から、『おうーい、新之助さん……早く來て下さァい……』と一生懸命に聲を嗄らして呼んでゐましたが、信次は白の身の上が心配でならないので、

『白！　しッかりしろ！　猪に負けるな。そうりゃ、そこだ。氣をつけろ！』などと言つて夢中になつて力づけてゐました。

白は人間が居て呉れるので、益々勇氣を出して猪の逃げるのを食ひ止めながら奮戰してゐましたが新之助も誰もまだ來ません。

兎角するうちに、白は段々疲れて來ました。吠える聲も力なく聞えました。

『白！　しつかりやるんだ。今に新之助さんが來て呉れるぞ！』信次がさう言つた時、榊原の所から、『何だ、猪か。』と言ひ乍ら走つて來たのは獵夫の新



之助でした。

『猪だ、猪だ、早く來て下さい……』

信次は躍氣となつて、木の上から叫びました。

新之助の鐵砲の尖には二疋の川獺かぶら下つてゐました。新之助は其の川獺を草原に投げて、薄の影に身を潜めながら猪の方へ近寄つて行きました。

白と猪とは相戀らず同じ戰ひを續けてゐます

孫四郎も信次も鳴を鎮めて新之助の擧動を見てゐましたが、猪は人間が應援に來たと知つたので、死物狂ひになつて、白の方へ最後の突進を試みたが其時、どうした機みか白は避場を失つたので、猪の牙に引かけられて、五六尺程前方へ投げられました。

『あ！　白が……』と信次が叫んだ時、どうーン！と鐵砲が鳴つて猪は其場へ斃れました。

『猪は射止めたぞ。もう降りて來てもいゝ。』

新之助は振返つて二人の方へ、さう言ひ置いて前の方へ一散に走りました。草原の中から白の鳴聲が微かに聞えて來ました。

信次と孫四郎は新之助のあとを追うて草原の方へ

走つて行つたが、新之助は猪の方は振向きもしないで、白の鳴いてゐる方へ飛んで行きました。

『あゝ大變だ！』

新之助の聲は驚きに滿ちてゐました。信次は吾を忘れて新之助の居る所へ行つてみますと、可哀さうに、白は血みどろになつて横に倒れてゐました。

『やられたか、可哀さうに……』

孫四郎は信次の後から悲しさうに叫びました。其時もう白は眼を細く閉ぢて、足の尖をぴり〳〵ッと震はせてゐるだけでした。

『可哀さうに、たうとう死んでしまつた。』と言ひ乍ら新之助は自分の上衣を脱いで、それに白の屍骸をくる〳〵と包みました。そして腰の山刀を拔いて一間半ばかりの長い手頃の柞の木を伐つて來て、

『あんた方は半分擔いで呉れるだらう？』

と言ひ乍ら、帶の上に捲いてゐた細引繩で、猪の四足を確と縛りました。そして上衣に包んだ白の屍

體と川獺とを一緒にして、それを柞の天秤棒に縛りつけて差擔ひに擔いで行きました。

行く道々、信次は時々後を振返つて、死んだ白の包まれた上衣を見て、ほろ〳〵と涙を流してゐました。

『死んだ白は可哀さうぢやが、名譽の戦死だ。白が居なかつたら、あんた方二人共猪に咬殺されてゐるかも知れない。』新之助は後から、さう言つて信次を勵ましました。

聽て三人は、村へ歸つてみますと、村では昨晩與一の家の蜂蜜を盜んだ大熊を射ち止めたのだと言つて、多勢が鐵砲を肩げたり棒ちぎれを持つたりして川原へ集つてゐました。

そこへ新之助と信次等が猪と川獺とを擔いで歸つて來たので、村の人達は、『今日は大獵だ、何といふ緣喜のよい事だらう。』と言つて祝ひましたが、新之助は少しも嬉しさうな顏をしませんでした。

川原には與兵衛爺さんも居ました。與兵衛爺さんは信次の涙ぐんだ顏を見ると直ぐ、『あ、白がやられたのか？』と言つて、人込を押分けて新之助の方へ走つて來ました。

『與兵衛さん、どうもお氣の毒な話です白は此の猪にひどくやられて死にました。私は悲慘な屍骸を、あんたに見せるのが氣の毒だと思つて、此の通り着物に包んで來ました。白の屍骸は此のまゝで葬つてやつて下さい。見事に討死したんです。白が死ななかつたら此の二人の子供さんが者の牙にかゝつたかも知れません。まア二人の身代りに死んだのだと思つて、お葬式だけしてやつて下さい。』

新之助は血のにじんだ白の屍骸の包みを解いて川原の白い石の上へ靜に措きました。

『白！　貴樣はたうとう猪に殺されたか。可哀さうに』

與兵衛爺さんは凹んだ眼に涙を溜めて、兩手を合せて白の屍骸を拜みました。

『白がやられたのか、可哀さうに……』

與一も涙ぐんで與兵衛爺さんの傍へ蹲りながら、人の屍骸に對つてするやうに、兩手を合せて拜みました。

信次はもう堪らなくなつて、聲を立てゝ泣きました。

（つゞく）

綴方

齋藤佐次郎選

鳥賣り（賞）

京都市小川通一條南入高二　伊藤富士雄

「今日は、――留守ですか」と言ひながら裏の木戸をがた〳〵言はせて、いつもの孫さんが來た。孫さんは常に百姓をして、たまに鳥屋に早がはりをしてひよこを賣りに來る。

叔母さんが、「はあ孫やんか、此の頃はちつと儲かりますかな」と言ふと、孫さんは「もう此の頃はとんとあきまへん」といひながら天秤を下して、よつこらしよとひよこの入つたかごを下した。中には白いのや、ちよつと黄のまじつたひよこが、上になつたり下になつたりして「ぴーよぴーよ」とないてゐる。足を踏まれて「ピービー」とへんな聲を出したり、黄色の小さいくちばしで、かごをこつこつたたいて、まばゆいお日さんにあたつて、目をぱちぱちさしてゐる。僕はあまり面白いので、一羽つかんでみたら「ぴーよぴーよ」と大きな聲を立てゝ下へ下りやうとする。ひよこの足で手があまりむず〳〵するのでパッとはなした。孫さんは、「これ〳〵坊やん、そんなことをしたらひよこが死んでしまふ」と大げさに言ひながら、ひよつこをつかんで、かごの中へ入れようとしたが中々入らない。つかまへようとすると、幾らでもかごのぐるりを廻る。五六ぺんも廻つて、今度はかごの上へ飛び上つたが、網に足をひつかけて、ビービーと又なき出す。そこを孫さんが節くれた日に燒けて黑い手でギューと掴んで、とう〳〵かごの中へ入れてしまつた。

孫さんが、「どうです、此の三羽つがひは。おいときまひょか」と言ひながら、三羽をかごの中から出した。「まだ一寸雄か雌かわからしまへんな。ほんならまあしやない（仕方がない）買うときまひよ。」

「こんでなんぼどす」と叔母さんが言ふと「へーたつた七十五錢。やすいもんだ」と手をパチンと打つて、腰から煙草管を出して、スパ〳〵吸ひ出した。お金を出して來てあげると、胴卷の中へ入れて、「坊やん今度目には大きなやつを持つてくるで」といつて、ひよいと天秤をかつぎ「おほきに」といひながら、ごと〳〵と又裏木戸から出て行つた。

私のお父さん（賞）

山形縣北村山郡畠井田村豐田小學校尋六　芳賀春吉

「野口さん」（賞）

千葉縣金東校尋六　高宮喜美江

私のお父さんが船頭になつてゐるので、私は朝夕ごはんを持つて行きます。夕方にめしをもつて行きますと、船頭家のランプで小屋の前があかるくなつてゐます。船場にいくと、川前村の家々の電氣がうすあをく光つて、最上川の水もちら〳〵してゐます。眞暗な夜にごはんを持つて行く時などはさびしいものです。

そんな晩には、急いでおいて來ます。村に入ると、どこの家も電氣の光が障子や窓にうつつてゐるので急にうれしくなります。お父さんは昨日も船場へ行つて人々をおこしました。お父さんはどんなに寒い日でも、どんなに暑い日でも、當番に當つた日は朝早くから出て行きます。

川ぶしん（賞）

香川縣木田郡氷上小學校高一　二川秀夫

朝早くから自轉車で來る人があり、又話をしながらのん氣さうに歩いて來る人があり、ふしん場は朝少しの間どは〳〵とさわがしい。そして來た人夫たちは「まあ一服だ」と言つて、煙草を少しの間のんでやすんで居るが、やがていよ〳〵ふしんに取かゝつた。人夫たちは一生懸命にだん杭を「よいとまいた〳〵」と言つてうちはじめた。大きい石が十二筋の繩につながれて、十二人の人夫が力を

「風景」
和歌山縣伊都郡妙寺町尋六
飯守武雄

人達は一生懸命に汗水を流しながらはこんでゐる。四時間位もたつと飯にかかつた。皆んなは籔のかげの草原で一同飯をくひかけた。たべてすんだ者は「まあ一服だ」と言つて煙草をのむ者もあり、歌を歌ひながら草原でねる者もある。さうして監督らしい人が來ると、又一同の者は仕事に取かかつた。やがて夕ぐれになつて仕事を止め、歸り出した。皆んなは嬉しさうに笑ひながらとだ〳〵と歸つて行く。後はにごつた水がそう〳〵と靜かに流れて行くばかりであつた。

忠男さん

三重縣度會郡四鄕村楠部尋五
山崎豐

兄さんと同級の忠男さんは、今年十三才でした。此の四月に尋常六年を卒業して、山田の商業學校へ優等の成績で入學し、夏期休暇前までは縞小倉の制服を着て、元氣よく通學して居られた。それに今日お母さんから忠男さんは亡くなられたと聞き、私はどんなに吃驚したでせう　ほんとに夢の樣である。私は此悲しい知らせを聞いた時、もう胸は一ぱいになつて、暫くは悲しさと友戀しさに、泣きくづれてしまひました。

想ひ出せば忠男さん程かあいさうな方はありません。まだ小さい時にお父樣やお母樣に死に別れ、それから親類の人の手に育てられて今日まで大きくなられたのださうです。學校でも成績が良いのと、おとなしいので皆仲よく、いつも放課後は「テニス」や野球をして面白く遊んで居られた。此の暑中休暇にも五十鈴川へ魚釣りに行かうとお互ひにかたい約束をして樂しんで居られたのに、まだその日の來ない内に此の世を去られたとは、まあ何んと悲しい事でせう。忠男さんは、死ぬのは、いやであつたでせうに、なぜ天は助けて呉れなかつたでせう。聞けば五、六日前に胃腸が惡いとかで山田病院へ入院せられたが、それから脚氣の爲にとう〳〵亡くなられたのださうです。もう明日からは「テニス」も出來ない、魚釣りにも行けないと思ふと、悲しくて〳〵仕方がありません。

今日は北村にも舊盆で盆踊があり、子供も澤山集つて太鼓の音でにぎやかしてゐますが、私はなんだか物淋しくてなりません、今ちやうど、圓いお月樣は朝熊山の空にさえわたつて、下界を照らしてゐます。ああ、忠男さんは此のよいお月樣をどこで見てゐられませう。草むらでは蟲がヂイ〳〵とないてゐます。

「かかし」
東京黑目
京町黑目
市下外目
伊藤駿二

祭

熊本縣阿蘇郡宮地町風木高二
渡邊徹之

阿蘇神社大祭、それは僕等が忘れることの出來ない嬉しい事の一つである。面白い古式の行事もある。矢ふざめ、獅子舞、かぐら、宮巡り、お田植等がそれである。僕等はいつも先生につれられて行く。式が始つて、しやうが古代のまゝの音を境内にひゞかせる。太鼓がなる。しやけしさん等が何遍もお辭儀をしたり、立つたり、坐つたりする。しやけしさん等は綠や赤の衣類で冠などを被つて居られる。色々の儀式がすむと、いよいよ神殿の戸が開かれる。その時はしやけしさんが誓しつをかけら

「景色」　東合第二　市外交下　落村化　金子多代

れる。その聲は「もうー」ときこえるので、その可笑しさ、神々しさ。毎年笑ふ人があるので、次の日は學校で先生から注意される。それがすむと神輿がお出ましになる。一の假宮、二の假宮、などがお出になる。神輿は三つで金色がまばゆいばかりである。かつぐ人の歌が又、昔からの歌で「へーんへーんへーんへーんへーー」とその可愛さ、その氣高さ。其の他、のぼり、天狗の面のついた棒、牛の面のついた棒など數百種。それをかつぐ人も又皆、古式の衣に繪帽子を被る。間には友達も居て吹出したくなる。

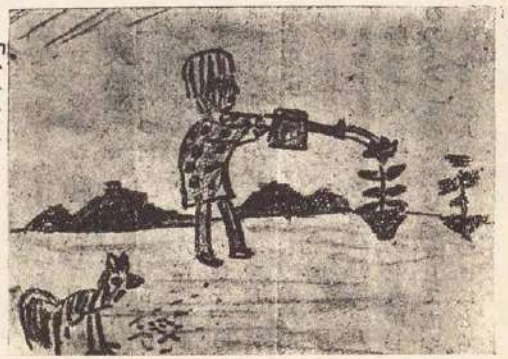
さしもに廣い境内も其の日は群集と店で塡められる。あの驚くほど高い樓門に登る人もある。そして時候は夏の半なので、終日「氷節が又面白い。文句はちやんとあるさうだが「へーんへん」としかきこえぬ。大宮司さん等が晴着で馬でお出ましになり、稚子が又、晴衣で馬にまたがる。

氷々の本家」と呼ぶ氷屋の聲が絶えない。

留守の失敗

北海道札幌市北十一條東一丁目　高田縣治（十五歳）

五日ばかり前のことであつた。兄さんがお祭にサイダーをのむのだと言つて、三つ矢サイダーと金線サイダーとを半打買つて來た。其の翌日であつた。どうしたことか其の日は大變僕ははらがすいてゐた。そこで御飯を食べようと思つたが、僕が食べてしまつたら、夕飯がたりなくなるのでまごついてゐると母が來た。そして母が言ふには「サイダーをのんでもいい。」と。後で兄さんにしかられないかと思つてゐながらも、サイダー瓶のくちを取り、茶わんについで一本きれいにのんでしまつた。一時のしかられるのをふせぐため、その瓶に水を一ぱい入れといた。



「ハチウエ」　秋田縣仙北郡荒川校尋一　岩谷ミヨノ

それから三日ばかりすぎた今日、學校から歸つて來て家の時計を見たら二時頃だつた。其の時、去年藥屋のおばさんからおそはつた事が頭にうかんだ。ラムネを藥で作る方法。それを作るにはサトウの湯が先にいるので、三日ばかり前にあのサイダー瓶に入れた水をなげて、サトウを約五分の一ばかり入れた。そして其瓶へろかぎにかゝつてかんかんとわいてゐた湯を入れた。湯は瓶に一ぱいになつたので、鐵瓶をもとのところへなほさうとした間一髪！！ろかぎはズルッ！と下に落ちて、鐵瓶の中の湯はザッとまかれた。バッ！！白いはひが、もう〳〵として天上に上つた。さながら火事の樣に……。二分間も其の樣な事が續いた。

しばらくして止んだ後を見ればろかぎはしびれ、鐵瓶は、灰でまつしろになつてゐた。そして僕の身も頭も服も眞白であつた。ろの中へ水が澤山入つたとみえ、ひばしでつゝいたらザク〳〵といつた。おかげでラムネを作る事は駄目になつてしまつた。母や兄に見つけられたらきつとしかられる事であらう。

赤丸

愛媛縣松山唐人町一丁目　正岡ひろし（十四歳）

「はやく走つて來い」と云つた健ちやんが先にたつて廣場迄來た。そして云つた。「戰爭ごつこだよ。あの赤丸があらう。あれが敵だよ。そして打ての命令で五分間總攻擊をするんだ」と見ると新しい白壁に赤く書いてある。それを見て皆一度に小石を手に握れるだけ握つ

た。まもなく「打て」と命令が下つた。と石は空氣をつらぬいて白壁に命中した。けれど赤丸にはあたらなかつた。尙勢つけて烈しく擊つた。段々ねらひは定まつて來た。突然武ちやんが叫んだ。「やあ僕一つあたつたよ」それでも敗けぬきらひの僕と茂ちやんは一生懸命である。それにかへて健ちやんは何時の間にか居らなかつた。突然大聲で「コラッ」と人の聲がした。

ホッとしてやめた。

所へ一人の鬚むしやの老人がしわのよつた顏に鋭い目をして立つて居た。三人は一時ぁつけにとられて茫然として居た。

皆目ばかりパチクリさせながら後を見たけれど、健ちやんの姿は見えなかつた。

こじき

茨城縣眞壁郡鹽波ノ江尋六
岩岡　克

私等が霜村のうちで遊んでゐると、向ふから山あらしでもあらうと言ふやうな人が來ました。私がおつかなくてふるへながら「あらどろぼうだとや、おらいにだれもいないが、何かぬすまれたつぺかや」とふるへながら言ひました。私は其の時は竹馬にのつてゐたが、霜村のうちの下駄をかりてはいて見てゐました。

すると霜村のうちのすぐ前のうちに入つて來て「おまんまおくれ」と言つたので、私はそこでこじきだと思つたが、まだふるへはとまりませんでした。西の方へ行くので、私等がどこへ行くかと思つて見てゐると、今度は龍澤のうちに入つて來て「かうこおくれ」と言つたので、かうこを出してやると、だんだんとさかをおりて、西の方へ行つた。それからあたごさまへ上つて行つたが、道がないので又おりて來て、西の方へだんだんと行つてしまひました。頭の毛はぼさ〳〵とはやしてゐて、着物はどてらを着て、せなかにはござや、なべや、いろ〳〵のぼろぎれをしよつてあるいてゐました。

それからそこに私等があそんでゐるうちに、こじきの姿も見えなくなつてしまひました。

母のない子

山梨縣大月廣里東校尋四
設樂ハル

家の前に家が出來ました。其家に淺利から來た母のない子が居ります。それは一年生の男の子です。いつか其の子の姉が來た時姉と川ばたで何かいひあつて泣いて居ました。いつでもをばさんが「てみやあはな、淺利の田舍と思つちやまちがへだぞ。こゝはな、よく耳をほつて聞いてろ」といつてぴしやり。「こゝはな大月だぞ」といつて用をしないつて手へおきうをせえて、其の手からけむがぼうぼう出ました。

私はいつでも其の子を見て居ますがいつでもさみしさうな顏をして居ります。手は私の目のかげんかふくれて居ます。いつでも遊んで居るといふ事はありません。私はよく働くでせうと思ひました。今日もしかられて手をひねくり上げられました。私は其の子を母のない子と思ふと、心のそこからなみだがわいて、一度でいゝからやさしい母に用をいひつけてもらはせてやりたいと思ひます。

「涼み」
住所不明
長岐四子夫

飛行機

秋田縣仙北郡荒川村朝日校高一
岩谷　貞

ブーン、プロペラの音だ。じーつと聞いて居ると段々強くなる。僕はたまりかねて持つてゐたペンも打ち捨てて庭へと飛び出した。ブーン、音は益々強　聞えるが機影は見えない。「どこだ〳〵」我知らず叫びながら、かけ廻つた。と其の時。狐森のかげより、すれ〳〵と出て來た。「來た〳〵」「どこに」「そらそこに」「復葉だ」…「張線が見える」「そら人も見える」……彼方からも此方からもどつと起る。人人は皆、後にひつくりかへるやうなかつかうで見て居る。機は鮮やかな日光を浴びながら、すべるやうに過ぎて行く。

ホシロー・ヒルム入選發表

今後の雜誌は愛讀者と共力して作らねばならぬといふ「金の星」の主義から、前々號に於て、本誌の人氣者**ホシロー**君の**ヒルム**を愛讀者諸君から募集しましたところ、驚くべき澤山の應募がありまして、編輯部に於ても選に非常な努力を拂ひましたが、嚴選の結果、左の諸君が入選されました。

柿盗人の巻　秋田市保戸野本町三十丑　木下　孝

泥棒捕の巻　大阪市西區九條中道四ノ四〇二九條第一校高二　白井　辰三

蛸釣の巻　鳥取縣倉吉町河原町　眞田　幸雄

兎の耳の巻　岡山市八番町八安井方　哉州井德夫

以上の諸君には賞として規定により「金の星」を一ヶ年分贈呈します。

『佳作』

葡萄と蜂の巻（若槻　進）
失敗の巻（松村　淑郎）
サツマ著の巻（宍戸　功夫）
西瓜の巻（啞野　勝郎）
山遊びの巻（齋藤　信也）
魚釣りの巻（前田　晃）
腕試しの巻（瀧口　夢二）
豚の巻（東山　正子）
ポチの巻（城之内弘吉）
飛行器の巻（佐山　秀雄）
鯨の巻（金子　多代）
花火の巻（井上　龜喜）
水まきの巻（野村新太郎）
象の巻（森　晃）
散髪の巻（水谷　陣見）
魚釣の巻（長岐四子夫）
墓口の巻（田中省二郎）
犬と西瓜の巻（岡野　谷茂）
金儲の巻（金丸　正則）
魚釣の巻（細野　加子）
象とライオンの巻（藤本　美弘）
魚釣の巻（細野　淳）
動物園の巻（長塚　正男）
蛔取りの巻（岡田　任雄）
砂まみれの巻（高島　清一）
トンボ捕りの巻（北村直彦）

（懸賞募集）

『牛に關係ある郷土童話』

募集規定は十月號に精しく出てゐますから御覽下さい。

通信

自由畫選評

山本鼎

△高宮喜美江さんの「野口さん」强くよく描けて居ます。帽子などなか〳〵うまい。眼ほ少し變ですね。入れ眼のやうだ。それから顏のくまどりの淺淡がきたないですね。なめるやうにすべ〳〵描く事はいらないが、これでは顏中傷だらけのやうぢやないですか。

△飯守武雄君の風景寫生、活氣のあるいゝ寫生です。中景のこんもりした木がどつしりと描けて居ていい。水田の感もいゝ。家屋が少しいけませんな。他に比してうすつぺらですよ。

△岩谷ミヨノさんの「ハチウエ」大そう廣い景色の處ですね。

△長岐四子夫さんの「塩み」なか〳〵うまいが腰から下と腰から上と別の人のやうぢやありませんか。つまりちんちくりんになりました。

△伊藤鈴二君の『かゞし』變つた繪ですね。鳥の飛んで居る處など面白い。

△金子多代子さんの「景色」の水彩畫うまく出來て居る。前景から中景あたりまでがちとまづい。弱いのです。樹木は皆よく出來て居る。雲も家も惡くない。全體の彩が少し寒いですね。（十三年九月）

幼年詩選評

若山牧水

私は採用した佳作に就いてはその作のあとにそれ〴〵短評を書いてゐるので、此處で書くことはあまり無い。

今度ほどゞしたことか學校組がたいへん少いと思つてゐたら、なんだ、暑中休暇のあとだつた。その代りに個人組（一人々々で出してる人たちのこと）が振つてた。學校組にはそれ〴〵何處かまとまつた靜があ[illegible]が、個人組はまつたく思ひ〳〵の別々で面白い。但し、どうして！佳作は學校組に多い。學校組も振へ。個人組も振へ。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

△今月は數だけは澤山に集つたが　その割に面白い作がなかつた。それで、今月の賞には前月から入賞後補作としてとつて置きにしてあつた伊藤富士雄さんの「鳥賣り」と芳賀春吉さんの「私のお父さん」の二つを賞に入れました。

△「鳥賣り」はヒヨコを賣りに來た爺さんがよく書けてゐるし、また籠から飛出すヒヨコもよく書けてゐる。又「私のお父さん」は　お辨當を持つてお父さんをたづれて行く時の川の情緒をほろりとさせる程によく書いてゐる。

△二川秀夫さんの「川ぶしん」は、人夫達が朝集つて來る有樣を書いたところが面白い。難をいへば、一日中のことを全部いつてしまはうとしてゐるために、外が少しあつけない。

△山崎豐さんの「忠男さん」、よくある作だが、心持が、よくあらはれてゐる作だ。一心になつて思ひを述べた作は生きてゐる。この作も生きてゐる。

△渡邊徹之さんの「祭」は、こち〳〵とよく書いてある。おしまひの方で、時候は夏の半なので、終日「氷々、氷の本家」と呼ぶ氷屋の聲が絶えない。」はステキにその情景をよく現した言葉だ。

△高田縣治さんの「留守の失敗」は、滑稽味をよく出した。

△正岡ひろしさんの「赤丸」、味のある書方だ。老人につかまる處が面白い。田園の少年の生活をよくあらはして、嘘りなく、段樂ハルさんの「母のない子」も面白い作だ。

童話選評

齋藤佐次郎

△いゝ童話が多く集つて來るやうになりました。選をしてゐながらも盤合ひがあつて愉快です。私の方も熱心に選をする積りですから、どし〳〵苦心の作を送つて下さい。

△今月は靖井さんの「狸峠」を推薦に擧げました。調子をつけるために處々私が加筆したところがありますが、話が面白いのでこの作を選んだ譯です。書き方には、大した工夫も見えませんし、また特別に成功してゐる場面もありませんが、話の面白味が子供の世界に素直に受容れられるやうに出來てゐるので、特に選んだ次第です。

△話の筋を第二として書き方の巧さを標準に見て行くと、外にいゝ作はまだ澤山ありました。例へば伊藤一雅さんの「靴直しのお爺さんと蜘蛛」新井心平さんの「怠け蛙」福田ハツ子さんの「おしやべり雀」等それです。

△殊に「おしやべり雀」などは、實に巧いものだつた。特に書き方を工夫してゐるとも思へない中に、如何にも自然に面白く會話を連續させて行くあたり全く巧いものだつた。「怠け蛙」の作者は、澤山文章も書き、苦心もした事のある人と見えて、萬事にそつなく、上手である。「靴直しお爺さんと蜘蛛」は、もう少し容易に樂々と書いたらと思はせます。童話の世界は、胃のこらない、伸々とした行き方で萬事が樂に行きたいのです。併し、作者の眞面目な態度は尊く思つて尊敬を拂ひます。

△此の外では、長谷川好延さんの「慈の深い男」南善孝さんの「幸福を持つて來た泥棒」伊藤三千夫さんの「落ちた貫」はどれも注目されました。

△以上の佳作は、いづれも捨て難い面白味のあるものなので、これ等は保留して推薦候補作の中に加へて置きます。そして、適當な機會に、この中の幾つかを推薦して紹介することにします。

編輯室より

○秋が次第にふけて行きます。蟲の聲もかれて來ました。いゝ季節ですが、夜など淋しいですな。編輯室にとぢこもつて、夜おそくまで仕事をしてゐますと、聞えるものはたゞ蟲の聲ばかり。思はず記者の眼から涙がポロリ。

○おや〳〵これはいけない。とんだ失禮。さて、「金の星」は號一號と次第に發行部數を增し、皆樣からは大好評を以て迎へられるといふ有樣で、記者一同、寢食を忘れる位に只今の處活動してゐる次第ですが、これからはやつと準備も完全に出來上りましたから、いよ〳〵一大活動を行つて、ます〳〵皆樣のお爲になるやうな面白い雜誌をこしらへますから、どうぞこれからの雜誌を是非注目していたゞきたいと存じます。

○前號で新年號掲載のために牛に關する鄉土童話を募集しましたところ、これ又非常な歡迎を受けて、もう既に毎日續々と投稿が集つて來ます。この分でしたら、十月廿日の締切までには驚くべき數が集るでせう。選者一同今から樂しんでゐます。

○「家なき娘」は前月號から掲載はじめましたが「家なき子」の姉妹篇といふので大好評です殊に少女の方には大變な人氣です。主人公のパリンヌがどうなるんだらうといつて、心配して尋ねて來られる方がある位です。話が進むに從つて、皆さんはパリンヌの運命に必ず泣かせられるのでせうが、雜誌以上にくはしく本になつて出ますから、是非それを讀んでいたゞきたいと存じます。

○本號の卷頭童話として掲げられた三島霜川先生の與次郎に就ては、どんな御感想を抱かれましたでせうか。三島先生は暫く筆をおとりならないでおいでになりましたが、以前中央文壇にこの人ありと知られた有名な方です特に「金の星」のために、今後大いに力をそゝいで、毎號大苦心の作を發表されます。

○十五少年漂流物語も、いよ〳〵次號を以て一時終りを告げる譯になります。このお話はこの先に、最も面白い處があるのですが、殘念乍ら一と先づこれで中止しなければなりませんので、これも早速一冊の本として、後のお話を全部添へて本社から出版いたしますから、是非お愛讀下さい。（記者）

新しく出た本

◇**森の祈り**（神野岩三郎先生著）長篇物語「森の祈り」は二百四十頁にわたつた、少年少女小説であります。くはしくは本社出版だよりに出てをりますから、御一讀を願ひます。本書は實に神野岩三郎先生の一大傑作であゞばかりでなく大正を通じての少年少女のための代表的傑作であることを疑ひません。讀んで後悔する本が世の中には澤山ありますが、この本などはそれと反對に讀めば讀むほど深い感激を受けて、清い涙を流さずにはゐられない尊い本であります。是非皆様の御一讀をおすゝめいたします　裝幀と挿畫とは斯界の大家露谷虹兒先生の筆になり氣品の高い極美の本です。（四六判箱入美本二四〇頁　定價金一圓八十錢　金の星社發行）

◇ギリシヤ神話**オデッセー物語**（金の星社編）世界少年少女名著大系の第八編として發行された「オデッセー物語」は例によつてクロース製本の壯麗な箱入美本で、本文百七十四頁の一代長篇物語です。ギリシヤ神話として三千年の昔から傳へられてゐる物語りであつて、規模の雄大なことゝ、お話の面白いことに於ては古今稀れなものです。一度讀んだ者は必ず驚きと感じて、これ程面白いお話があつたのかと思はせられるものです。是非一度は讀んで置かればならぬ古今の名篇であります。（四六判箱入美本一八〇頁　定價金九十錢　金の星社發行）

◇**銀砂の汀**（露谷虹兒先生著並畫）虹兒畫譜の第三輯です。裝幀・挿畫・詩全部虹兒先生の手になつたもので、例によつて限りなき美しい、可憐な本です。全篇ことごとく少女の夢とあこがれに滿されてゐます。現代の少女の心を最も深くとらへてゐる虹兒先生のこの畫譜は、從つて現代の少女の方々に最も大きな喜びを以て迎へられるに相違ありません。中の版畫は藝術味の豐かな深刻な畫であつて、後世に殘るに足る傑作を幾枚か選ぶことが出來ませう。（四六判箱入美本定價　金一圓卅錢　神田南神保町十六　交蘭社發行）

◇**コサック騎兵**（小島政二郎先生著）イデア書院發行の兒童圖書叢書の第十編として「金の星」でおなじみの小島政二郎先生の短篇集「コサック騎兵」が發行になりました。「金の星」誌上で大好評を受けた「ウツツキ彌次郎」「どろ坊學校」「三人片輪」などをはじめ、小島先生お得意のお話を十四編も集めた面白い〳〵童話集です。「コツシ、キユー」「かみなりに御用心」「ドンヂヤン醫者」など題を聞いたゞけでも讀みたくなるものばかりです。童話作家としても現代に稀れな天分ある作家として好評ある著者の童話集として是非御一讀をおすゝめします。（四六判箱入美本三〇二頁　定價金一圓六十錢　牛込山伏町十四　イデヤ書院發行）

＝自由畫掲載外佳作＝

中田　ダイ（千　葉）　正木　文二（石　川）
中田　ふく（千　葉）　齋藤　邦一（和歌山）
北本　彌平（群　馬）　後藤順四郎（新　潟）
羽田　露子（新　潟）　五十嵐周治（新　潟）
森田　修二（和歌山）　金丸　正則（新　潟）
荻原　有（長　野）　森田　健三（和歌山）
村田　文代（岡　山）　白澤　一郎（豐　橋）
豐島　泰（山　梨）　木村　ノブ　弘（前　橋）
奥村　榮（名古屋）　安孫子斗志（千　葉）
名政　喜三（群　馬）　岩谷　貞三（秋　田）
岩谷ミヨノ（秋　田）　飯寺　武雄（和歌山）
柳田　英二（青　森）　森田　修二（和歌山）

＝方綴掲載外佳作＝

竹淵喜代春（長　野）　渡邊　徹之（熊　本）
若松　忠夫（香　川）　近藤　國男（東　京）
奥村　保（岐　阜）　宗　寂照（松　江）
山本　臣（愛　媛）　山田　さだ（愛　知）
公子（熊　本）　殿樂　ハル（山　梨）
海達　健藏（不　明）　海老澤リン（茨　城）
野邊　正雄（茨　城）　伊藤　威（京　都）
角田　健三（和歌山）　宮崎　輝城（東　京）
森田　一郎（東　京）　五十嵐周治（新　潟）
石　晨一（愛　媛）　川野邊　精（茨　城）
渡邊　北本　彌市（群　馬）　名取　喜三（群　馬）
北本　彌市（群　馬）　後藤　粹夫（大　阪）
藤城　昌雄（東　京）　山木　秀一（和歌山）
齋藤　邦一（和歌山）

＝幼年詩掲載外佳作＝

上野　癸丑（山　梨）　小比賀常榮（香　川）
清水　弘（和歌山）　大野　勤一（埼　玉）
豐島　泰（甲　府）　吉川　正市（茨　城）
宮城　輝城（東　京）　坂本　好造（埼　玉）
藤城　昌雄（東　京）　北村　春夫（山　口）
佐口　コト（茨　城）　鈴木　美江（東　京）
鎌北元太郎（埼　玉）　安藤　春作（埼　玉）
若槻　繁（新　潟）　鈴木　輝子（東　京）
伊藤富士雄（京　都）　北田　正雄（京　都）
關　好一（東　京）　齋藤　利秋（千　葉）
武藏野秋鳴（高　崎）　平野　慣吾（埼　玉）
櫻井　朝（名古屋）　庄野　雪子（東　京）
三田　正夫（長　崎）　中田　貴（前　橋）

＝童謡掲載外佳作＝

木下　孝（秋　田）　葛木　和生（高　知）
大國　信夫（山　形）　藤野ふくを（福　井）
永井よし江（京　都）　緑野　吟子（東　京）
岡山　純義（神奈川）　片山　星雫（下ノ關）
西脇臣三郎（臺　灣）　海笛　白夫（千　葉）
小倉　倉一（新　潟）　吉岡　一郎（札　幌）
西島　美二（長　野）　窪田　恕（長　野）
石　一郎（東　京）　武部　政一（鳥　取）
成田　秀二（青　森）　中村ひさし（濱　松）
村形　萍花（東　京）　苅込　小浪　千　葉
大本しげる（廣　島）　岡崎　交二（東　京）
大空　夏子（名古屋）　河邊すみ子（神奈川）
玉田　星路（埼　玉）　有馬　神乘（神　戸）
松本　明（東　京）　木村　英夫（熊　本）
關部　源吾（東　京）　茂松百合子（東　京）
岡本　正二（愛　知）　都々島景和（東　京）
山口　靜江（神　戸）　森　功（德　島）
幕江　宏佳（大　阪）　佐藤　廣吉（東　京）
松井　雅夫（福　岡）　星野芳之助（千　葉）
高井みたび（和歌山）　原田　青夢（福　岡）
川口銀四郎（佐世保）　中島　光樂（臺　北）
池上　信一（東　京）　平野　慣吾（埼　玉）
藤堀　三夫（熊　本）　中村　遠生（大　阪）
鎌田音次郎（香　川）　津子（不　明）
野口　池上　エイ（東　京）　後藤　靜夫（大　阪）
溪　水（栃　木）　相見　基一（東　京）
福田　琴子（横　濱）　中里　民雄（不　明）

＝『金の星』誌友募集＝

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三ケ月分以上の直接購讀者に對しても、誌友のお取扱ひをする事となりました。

＝童話佳作＝

伊藤　一雅（京　都）　新井　心平（埼　玉）
伊藤三千夫（山　口）　福田ハツ子（横　濱）
長谷川好延（東　京）　南　義孝（石　川）
伊藤　駿二（東　京）　大塚　哥四（埼　玉）
島野　時雄（千　葉）　岡崎　文二（東　京）
藤代　白山（千　葉）　岡村　菊堂（濟　州）
岡崎須榮子（大　阪）　宮本　演彦（横　濱）
中村　紹資（群　馬）　森　ほたる（愛　知）
岡崎　文二（東　京）　山根　貞子（朝　鮮）
永野　春雄（東　京）　中村　佐（長　野）
松永忠太郎（北海道）　大熊　龍夫（岡　山）
綱島　芳葉（東　京）　關部　源吉（東　京）
瀧口　常（和歌山）　柴田梅太郎（横　濱）
高井みたび（和歌山）

（以下次號）

讀者だより

▼私たちにとつてなつかしい秋が來ました。南國の片田舍で、獨黍の葉づれの音をきいては、淋しい秋の聲に動かされて童謠制作につとめ、家をとりまく夜毎の虫の唄をきいては、若き日のなつかしいあこがれや幻想に夢をめぐらして童話の創作にいそしんで居ります。群馬の青柳花明さま、京都の三須英三さま、お暇の時は南國の寂しい童謠詩人にみ便りおめぐみして下さいませ。私の編輯してゐる『童謠詩人』は金の星の愛讀者ならどなたにでも差上げます。（愛媛縣温泉郡生石村北吉田馬場二、仙波しげる）

▼編輯部の諸先生方は、お變り御座いませんか。いつも野口先生の御奮闘を感しく思つて居ます。拙誌友の皆さん、私達の少國民會は今度蝶々の會と改名して童謠と童謠踊の研究をして居ます。何分未熟な者ばかりですから皆様どうぞ御後援下さいませ。詳細は左記宛へ願ます。貴重な紙面を私事に使つて誠にすみません。（大阪市西區市岡町八九〇篠原方『蝶之の會』名方まさる）

▼小供を離れゆく淋しさ、悲しさ。皆社會とかは小供より大人がいゝといひます。かしこく上手にいんけんにうそをやれといひます。金の星に居る小さい人らよ、あんたたちは、今の間に小供の國で樂みなさい。實社會へ出る仕度をするんですつて……あゝこのムジュン！ 記者樣、教へて下さいませ、小供は純情を永久に保つべく努力すべきか、又は實社會に出る仕度を早くからすべきか。（白だすき二世）

▼諸先生並びに諸兄姉にはお變りありませんか。秋になりました。九月號の金の星、虫の鳴くのを聞きながら讀みました。みんな良いものばかりでした。それから諸君のうちに小さい雜誌を發行してゐる方がありますなら、見たいものです。早速入會して指導を仰ぎたいと思つてゐます。（神奈川縣中郡伊勢原町三〇七 岡山純彦）

▼私は今横濱を去ります、福田さん金子さん其他濱の童謠壇の方々わたしは濱を去るに當つてあなた方の、とはな御健筆をお祈りします。――ひさし君九月號で君と並んで童謠がのつかりましたね。別れる前の夜ふたりして泳いだことはいつまでも忘れられない事です。本牧の月のてしほに、人一人ゐぬ樽の上で唱つた天の川を、私は今もうたつてゐます。其中遊びにまゐります。終りですが金の星並びに皆様のお健闘を祈ります。（小石川久堅町六九 義美）

▼大震災の一週年紀念日が數日の後に近附きました。一家揃つて賑やかな晩食の箸をとるとき、そこに大震災の話の花が咲きます。ほんとうに夢の樣ですね。もうまる一年たつたのですから。私は今度新たに誌友に加へていたゞいたものです。諸先生方の御指導の下に長く金の星の愛讀者として微力を盡したいと思ひます。玆に送附致しますのは、私の處女投書です。何卒宜しくお願ひします。（東京市淺草區橋場町 岡崎文二）

▼湖畔大學の一夜、所は大津公會堂『葱を捨てれば、しなれて枯れる、慈さへ捨てればしなれて枯れる。おらアお月樣見て泣いた』と野口先生が自由獨唱をなさつた時、私は金くひさまぢきたい樣な感激にうたれました。皆一樣に笑ひにまぎらすうちにも、心のなどるのを禁じる事は出來ませんでした。京都から通ふ身の、中途で失禮しなければならなかつたのは、實に殘念でした。（京都E・M生）

▼犬を愛して、それこそ目の中へ入れるやうにしてゐる人が、平氣で蝶々をその犬に喰はしたのです。何といふことでせう。憤らずにゐられませんか。夏の夕は、そんな腹立しい出來事さへも知らぬ顔をして、あつけらかんと暮れて行くのです。（京都 三須英三）

▼私達の『金の星』のために、私の希望なのべておきます。

童話には、こんなのを撰んで載けますまいか。

1、西洋の童話で、あまりいろいろな本にのらない珍らしい、そして名作ものを。

2、日本の童話や支那の童話も。

3、童謠や綴方や幼年詩は、大へん結構です。

4、募集の童話のうち、

（イ）傳說ものを、諸國に渡つて紹介して載きたい。文章のまづいのは、記者の方々で書きかへて出して下さつてもよい。それは特別ななつかしみを持つものですから。

（ロ）創作 構想をも）童話も、文が拙かつたり構想が惡かつたりしたら、それなヒントにして記者の方々で改作して出して戴きたい。新しさも、或程度までは、ほしいことです。

5、岡本歸一先生の畫は、なるべく童話に材料をとつてはもらへますまいか。そこに、先生のは何ともいへない味があるやうです。

6、兒童劇の脚本と、その背景がほしいのです。脚本は極端に文學的ではないもの。背景は、極めて、暗示的なもの。（朝鮮野路丘青二）

▼野口雨情先生へ、茨城を里に生れた先生、實に懷しい。自分も茨城を里に持つた一人である。里に居ります〃、森田藜の秋先生に指導を受けて居りましたが、今度東京に居るのを幸、野口先生に御指導を御受して一人前の童謠作家になりたい、先生どうぞ御指導の程を。先生の住所不明につきここにお伺ひ致します（市外高田町雜司ケ谷一一二七内田方塙 正雄）

▽野口先生へのお手紙一切は金の星社氣付になつてをります（記者）

▼私は金の星を愛讀してから、早一年半になります。此の間に金の星はすつぷん變りました。同じやうに私も變りました。金の星は本當によい雜誌です。何時までも愛讀しようと思つて居ます。私は現コドモ會の同人で金の星八月號に小寺勝吉先生の童話劇山のふもとがのつてゐましたのを、大阪で公演した所が、大變な好評を博しました。東京でも山のふもとを公演したさうですが、本當ですか。小寺先生此れから毎月此んな童話劇を出して下さい。（大阪 秋月生）

▼編輯部の諸先生、益々御壯健のことゝ存じます。私達の田舍にはもう『こほろぎ』が毎夜のやうになくときとなりました。何んだか殊に哀れつぽくてたまりません。九月號の表紙にはスッカリ感じさせられてしまひます。雨情先生の雨乞ひの唄には、私達農村のものは殊に涙がホロ〳〵出てしまひます。早く作曲（中山先生が）して下さい。『金の星』が號を逐うての發展振りは、ほんとうに素晴らしいものです。私達は尋しくてたまらない次第です。（齋藤先生益々御自重御自愛下さい。（或る愛讀者）

▼諸先生大變涼しくなりました。ほんとに童話童謠作家達の喜ばれる時でせう。八月に初めて投書いたしました。殘念ながら落ちました。併し私は決して失望致しません。むしろ嬉しい位です。私の奮發心を增々强めて呉れました。愛媛の仙波しげる

推薦作 童謠 佐藤 お月さん

▼『お月さん』の外川都医野雨情様も『お月さん』で存じて居ります。幸にお知り合ひ下さい。奮へ童謠、童話作家諸子。この秋を、最後に金の星の大發展を祈つて止みません。（敦賀 藤野ふくを）

▼記者先生樣、まことに有難う存じます。私はほんとうにどうして御禮申し上げてよいやらわかりません。『青い目の人形』は今日たしかにとゞきました事をお通知申上げておきます。ほんとうに一目見てどんなに私の心はをどつた事でせう。そして野口先生の御署名をでしていたゞいて！！ しばし私は『青い目の人形』をしつかとだいてなりました。それに先日は御通知までして下さいまして、ほんとうに記者先生の鄭重なもてなしに私は萬分の一もお答へ出來ぬ事を心から悲しんでなります。それに私は『金の星』の誌友にしていたゞかうと規則書までお送りれがひましたが、父母はそれを中々ゆるしてくれないのです。私は毎日机の引出をあけてはあの規則書を無言にみてゐるのです。しかしきつとも少ししたらお金をためて誌友にしていたゞきます。（堺市 糊修）

金の星社 出版だより

十一月號

沖野岩三郎先生の名著

長篇 森の祈り

▽定價金壹圓八十錢▽送料金十五錢

各方面から非常に大きな希待を以て迎へられてゐる沖野岩三郎先生の傑作『森の祈り』が遂に發行になりました。本書は二ケ月前に發行になる筈でありましたが挿畫の都合上、發行が後れてをつた次第です。

『森の祈り』は童話といふよりは寧ろ少年少女のために小説として書かれた處に沖野先生の非常なる苦心がありまして、如何なる少年少女も、この『森の祈り』によつて面白い〳〵物語りを聞くと同時に、敬虔の念に打たれ、魂の清まることを思ふでありませう。本書はまた立志小説といふことも出來ます。紀州の山の中に生れた兄妹が都に出て苦學して身を修めて行く有樣は、實に立派な立志小説であるからです。

『森の祈り』一卷は、いろ〳〵の意味で、大正文壇にあらはれた、少年少女の爲めの一大傑作として、後後までも殘るべき作であつて、從つて本書の出版は出版界に一大反響を與へることでありませう。

小島政二郎先生譯 キップリング原著

狼少年

附錄『白あさらし』

▽定價金貳圓廿錢
▽送料金十五錢

『狼少年』といへば世界にひゞいてゐる名作です。どんな多くの少年たちが、胸をおどらせて此の物語りを讀んだことでありませうか。印度の森林の中で狼に育てられた少年モーグリの話は、實に言葉につくせない程、面白くてたまらない物語りである。日本の少年諸君に、『目も早くこの物語りを知らせたい』。少年諸君がどんなに喜ぶだらう。この事を思ふとぢつとしてゐられないで、小島先生をせき立てゝこゝに溯く一卷をなしました。さア、どし〳〵お讀み下さい。

愛讀者通信

▽私は『家なき子』を見て全くうれしく思ひました。何といふなつかしい物語でせう。これから後もどうぞよい物を出して下さい。『家なき娘』『グリム童話集』『古事記物語』の發刊を待つ。（高崎市　佐竹金次郎）

▽沖野先生の童話讀本の第二卷はいつ發行になりますか。私の學校で先生がおすゝめになるので、私たちも『赤い猫』を買つて讀みました。第二卷の發行の日をお知らせ下さい。（東京　君塚良平）

▼童話讀本の第二卷は只今前手してをりますから十月末か、おそくも十一月中には發行になります。是非御愛讀をねがひます。（記者）

▽『家なき娘』が金の星社から出るさうで、私はもう今から樂しみにして待つてをります。雜誌にも十月號から出ましたね。しかし私は雜誌で讀んだのでは、まだろくて困ります。記者樣、どうか出來るだけ早く出版して下さい。『家なき子』と一しよに大事にします。（大阪　北川君子）

世界少年少女名著大系第十編

グリム童話

世界の名著を安價にして、しかも內容體裁共に模範的書籍として出すことが、金の星社出版部の使命でありますが、その主義のもとに發行された名著大系の第十編がこの『グリム童話』であります。

グリム童話に就ては、今更申さずとも、どなたも御存知と思ひますその有名な、ドイツのグリムの童話の中で、最も面白いお話ばかりを集めたのが、『このグリム童話』です。美しい畫が澤山に入つてゐて面白くて、綺麗な本です。（定價九十錢　送料十五錢）

近刊書

名著大系第九編　シエークスピヤ物語　定價金九十錢　送料金十五錢

名著大系第十二編　古事記物語　定價金九十錢　送料金十五錢

三井信衛先生譯　なき娘　定價金貳圓廿錢　送料金十五錢

沖野岩三郎先生著　日本童話讀本（第一の卷）　定價金壹圓　送料金十五錢

沖野岩三郎先生著　日本童話讀本（第二の卷）　定價金壹圓　送料金十五錢

世界少年少女名著大系第十一編

繪入 イソップ物語

定價金九十錢
送料金十五錢

有名な『イソップ物語』に一々面白い繪を入れた美しい本です。教訓と面白味とを兼ね備へた此の物語りは、世界の童話文學の珍寶として尊ばれてゐるだけあつて、何度讀んでも面白く讀めます。金の星社の『畫入イソップ物語』はお話一篇ごとに畫が入つてゐるので、これまでのありふれた、『イソップ物語』とは違つて非常に立派なものです。是非御一讀下さい。

▽この間お父樣と銀座へ行つたお父樣が丸善へお立寄りになつたので、僕も一しよに行きました。何か面白い本はないかと思つて探してゐると、一番先きに目についたのは金の星社の名著大系でした。雜誌で廣告だけで見てゐたので、どんなにいゝ本か知らなかつたが、はじめて見て驚いた。『アラビヤン、ナイト』だつ！コロンブス物語』だのいろ〳〵あつたのでお父さんにおねがひして買つていたゞきました。お父樣もこれはいい本だといつて、丸善の店の人にこの本はよく賣れますかと聞いたら、へエこの頃出た本では一等よく賣れますと答へました。記者樣これからもどし〳〵こんな面白い本を出して下さいッ！日本橋　島田秀雄）

▽この頃それほうれしかつたことがありますからお知らせいたします。それは、先日學校で作つた私の童話が大そう先生にほめていただいて二重丸がついたので、家へ歸つてお母樣にそのことを、お話して私の童話を見せましたら、お母樣は大變ほめて下さつて、ごほうびに『青い眼の人形』を買つて下さいました。（神戸　吉田ひろ子）

童謡集 青い眼の人形

野口雨情先生著・装幀 蕗谷虹兒畫伯 挿畫 寺内萬治郎畫伯 武井武雄畫伯

〔三版〕總絹表紙箱入美本、紙數約二百三十頁、定價壹圓八拾錢、郵送料十五

雨情先生の童謡中特に傑作のみ八十篇を撰んで一冊となしたもの。しかも、目もさめるばかり美しい裝幀に飾られた本書は、童謡界最初の模範的出版であります。賣切れぬ内御購讀下さい。

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕題題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』帙製の賞品を差上げます。次號〆切は十月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は新年號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓二拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四十錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八十錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい）
振替口座東京五九五九六番

〔送金の注意〕
▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は爲替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名はハッキリ書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年十月九日印刷納本（毎月一回）
大正十三年十月一日發行（一日發行）
東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人 齋藤佐次郎
東京市小石川久堅町百八番地
印刷人 上村新輔
東京市小石川久堅町百八番地
印刷所 株式會社博文館印刷所
東京市外田端三百五十一番地
發行所 金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

金の星童謡曲譜集

第一輯	人買船	本居長世作曲・野口雨情作謡	(曲目) 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん
第二輯	一つお星さん	本居長世作曲・野口雨情作謡	(曲目) 一つお星さん、七つの子、鼬と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬
第三輯	青い空	本居長世作曲・野口雨情作謡	(曲目) 青い空、燕、雨夜の傘、でんでん蟲、雀の酒盛り、呼子鳥
第四輯	赤い靴	本居長世作曲・野口雨情作謡	(曲目) 赤い靴、山彦、三ケ月さん、姥捨山、朝鮮飴屋、眠り龜の子
第五輯	夢とり	小松耕輔作曲・野口雨情作謡	(曲目) 夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り
第六輯	子守唄	本居長世作曲・野口雨情作謡	(曲目) 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、惚坊主、藪下道

東田 東京 市外 端三 京一五 金の星社 振替 東京 電話 小石川 番六九五九五 番七八三五

東下 目黒 京 市外 四六 白眉大賣出 捌版社 振替 東京 番八九五四五

本居長世作曲・野口雨情作謡・寺内萬治郎裝幀

お人形さんの夢

(曲目) お人形さんの夢、赤い櫻んぼ、啼いた啼いた雉子、藪の下道、夢を見る人形、草遊び。

〔金の星童謡曲譜第七輯〕(最新刊)

定價金八拾錢 送料六錢

小松耕輔作曲・達崎龍作謡・竹久夢二裝幀

ペンペン鳥

(曲目) ペンペン鳥、螢のお使、仔牛、赤い小馬車、紅殼蜻蛉、さみだれ。

〔金の星童謡曲譜第八輯〕(最新刊)

定價金八拾錢 送料六錢

東田 東京 市外 端三 京一五 金の星社 振替 東京 電話 小石川 番六九五九五 番七八三五

東下 目黒 京 市外 四六 白眉大賣出 捌版社 振替 東京 番八九五四五

清新の香味最もなつかしき

ライオンねりはみがきは

少年少女諸君の齒をみがくのに、
最もふさはしい、使ひ心地の此上
もなく好いはみがきです。

「金の星」第六巻第十一號（鈴木三重吉・明治四十五年十一月一日発行）（定價金四十錢　送料一錢五厘）